
史書

風華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

史書

【Nコード】

N2812BA

【作者名】

風華

【あらすじ】

中華風と和風の間のような世界観のお話です。

双龍国と呼ばれる大陸には、いくつもの国があった。

あらゆる国が不穏な動きを見せる中、一人の少年が嘉国にやってきた。

紅い髪をもつ少年、紅貴は洸国を救うため、嘉国最高位の武官、二將軍と、嘉国で得た仲間と共に旅に出る。

(自サイトからの転載です)

第一章 北の青い空 1

双龍国と呼ばれる大陸。北の大国、洸に次ぐ大きな領土をもったその国は嘉と呼ばれていた。南にあるその国は、しかし、暑すぎず、1年を通して穏やかな四季があつた。今は春。春の初めに都で開かれる祭りが終わり、微かに桜が散り始めている時期だ。

嘉の都李京は、南と西は、低い山で囲まれている。低い山であるが、その頂からは正方形の李京を見ることが出来る。その低い山々の隙間を、都に通じる道が通っていた。李周道と呼ばれるその道の入り口、李外門の入り口には兵士が立ち、横の検問所では役人が待機しており、身元の確認を行う。朱の門を通り抜けると、都に向かう人々の目には、春であれば、道の両端に植えられた桃色の桜の木が映る。人々がその桜の美しさに漏れるため息をつくという行為は、李周道のいたるところで見られた。やがて、李周道が終わり、李京の入り口に差し掛かると、鳳門と呼ばれる、李外門以上に大きな朱色の門が現れる。その柱には嘉を守ると言われる獣の一つ、鳳凰が彫られていた。鳳門を開けば、煌路と呼ばれる広い路が煌李宮に通じている。やはり両端には桜の木が植えられ、春には桃色の桜が咲く。そして、春も半ばを過ぎた今、都の南にある温かい海から吹く潮風に運ばれて、花びらが舞っていた。

煌路の脇の細い小道。昼であつてもその小道は薄暗かった。桜と共に運ばれる潮風に、一枚の薄い紙が飛ばされた。一人の少年がそれを追いかける。

「あ、おい、ちょっと待てよ」

飛ばされた紙が、灰色の石畳の上に落ちた。それを見た少年は、紙をとらえようと手を伸ばすが、風が紙をさらに遠くへ飛ばしてしまった。風が止んだ頃には、紙は少年の手の届かないところへ行ってしまった。

「どつしよつ……。俺、地図がなきゃわからないのに」

そういつてため息をついた直後、ちゃりんという音とともに何か横を通り抜けた。少年は、一瞬何が起こったのかわからなかった。しかし、とっさ懐に手を入れてみると、そこにあつたはずの財布がまるごと無くなつていた。目の前には走り去る男がいる。

「ちよつと待て！俺の財布を返せよ！」

少年はそう言いながら財布をとつたと思われる男を追いかけたが、転んでしまった。

「いつて〜！おい、俺の財布返せ！」

男は少年の方を振り返つた。着古した服を着たその男は嬉しそうに笑っている。

「それは俺の財布だぞ……！あ、その兄さんそいつ俺の財布取つたんだ！取り返してくれ！！」

偶然だろうか。財布をとつた男の背後から、黒い服を着た青年が現れた。青年は、少年の声を聞いたのか、顔の表情一つ変えずに男を見る。

「だそうだ。盗つたなら返してやれ」

青年は低く淡々とした声で言つた。

「だ、誰が渡すか！こつちだつて生活かかつてるんだ！」

男はそう言つと短刀を取り出した。それを見た少年は思わず心の中で悲鳴を上げる。

「兄さん、やっぱり俺の財布なんていいから逃げて！」

少年の言葉は届いたのか届かなかつたのか。青年は軽くため息をついただけだつた。少年には、自分の言葉を無視しているように感じられた。青年は、相変わらずの無表情で言葉を続けた。

「馬鹿なことはしない方がいい。どうせしばらくしたら嘉の兵が駆け付ける。その前にあの餓鬼に財布を返してやったほうが賢明な判断だと思つが」

「わたすわけにはいかねえ！」

男は震える手で短刀を青年に向けようとした。少年が見たのはそこまでだ。思わず目を瞑つてしまったのだ。少年は、微かに震える

体を自分の手で抱きしめた。ドクドクという心臓の音が自分の体中に響いている。やがてドスツという音とともに辺りは静かになった。時間がたち、少年の耳に声が届いた。

「おい」

声は青年のものだった。おそろおそろ瞑っていた目を開けると、片手を腰に当て、見下ろしている青年の姿があった。その横にはたしかに紅貴の財布をとったと思われる男が気絶している。

「あ……」

青年はため息をつくとき赤い布でできた財布を見せた。

「お前の財布はこれか？」

少年は大きくうなずいた。自分の財布を見てやっと安心することができたのだ。

「うん！ありがとう」

青年は、財布を投げてよこすと口笛を吹いた。何をやっているんだろうと不思議に思っていると、青年の背後から黒い馬が現れた。黒い馬の背中には翼が生えている。翼をもつ馬のことを天馬といい、すべての生き物の中でもっとも速い足をもっていた。が、同時にそれを扱うのは軍人であっても困難だという。振り落とされてしまえば、軽傷では済まない。そんな天馬を目の前にいる青年が扱えると知って少年は驚いたのだ。それに、少年は黒い天馬を見たことがなかった。天馬はたいてい茶色の毛並みを持っているものだ。

「それ、お兄さんの天馬？ かつこいいいな！」

少年は興奮を隠さずに弾んだ声で言った。しかし、青年は何も答えずに、天馬の手綱を手にとって背中を向けてしまった。少年にはそれがなんだか惜しいことに思われ、思わず声を出す。

「ちよつと待って！」

「何か用か？」

何か用があつて青年を呼んだわけではない。少年は口ごもる。

「そ……その……」

「用がないなら帰るが」

少年は急に何かを思い出した。李京内部の詳細が書かれた地図は先ほど飛ばされてしまったのだ。そして、自分はどんなことがあっても煌李宮に辿り着かなければならないのだ。だが、地図無しでたどり着ける自信はまったくなかった。青年に案内を頼めないだろうか。

「あの、俺李京の地図を無くしちゃって。そのさ、どうしても煌李宮に行きたいんだけど行き方がわからなくて。で、迷っていて……」
それまで変わらなかった青年の表情が微かに変わった。青年が疑わしげに見下ろしてくる。

「それ、本気で言っているのか？」

「うん。なんとか李京についたんだけど、煌李宮の行き方がわからなくて、しかもさっき地図まで飛ばさ……」

「お前馬鹿か？」

全て言い終わる前に青年が割り込んで言う。

「どうやってたら煌李宮に行こうとして迷子になるんだよ。鳳門からまっすぐ行けば良いだけだろう」

「それがさ、煌路の脇の小道っていっぱい店あるだろう。見惚れてたらいつのまにか道に迷っちゃって……」

青年はため息をついて、呆れたように言う。

「まあいい。どうせ、俺も煌李宮に行く。邪魔しないならついてこい」

少年は笑って頷いた。

「退屈だわ」

街道に面した茶屋の奥。人が少ないその場所で、一人の女性が座っていた。憂いを帯びたように見える女性の横顔を見て、店主はほおっと息をはく。その女性そこにいるだけで、見る者をくぎ付けにしてしまう。肩よりも長い黒髪は癖を知らず、そのまま零れ落ちていた。白く透ける肌はシミひとつ無い。憂いを含んだように見える黒い瞳はどこか遠くを見ていた。彼女こそが、李京一の美女と言わ

れる、白琳はくりんだった。見た目が美しいだけでなく、幼いころからの頭腦の高さは周りを驚かせ、現在は医者として名高い。その、絶世といってもおかしくない女性、壮さう白琳はくりんは、人々の憧れの的だった。

「何が退屈なの？」

人が近づくと気配はなかった。しかし、たしかに背後から声が聞こえた。店主は驚いて後ろを振り返った。そこにはにこやかにほほ笑む青年の姿。店主はその姿をみて目を見開く。肩まである黒い髪は柔らかそうだ。男性でありながら作り物のように整った容姿である。肌は白く優美であったが、かといって不健康に見えるわけではない。背が高いその青年は細身ではあったが、痩せすぎというわけでもなかった。軽装化した、紺色の軍服がよく似合う青年だ。腰に下げた通常のものより大きな剣。その剣の鞘は白。細い銀で細工してあるその剣の持主の噂を店主は聞いたことがあった。

「あなたはもしかして、駿様ですか？」

「そうですね。俺の名前を知っているなんて驚きました」

駿はそういって、面白そうに笑った。店主は早口で言う。

「それはそうですね！駿様と言ったら、そのお年で麒麟軍に入られたお方！頭も良く、剣の腕も優れていると……！大変優秀な方だと聞いております！」

駿はかなり優秀な軍人だった。この嘉という国には禁軍と呼ばれる軍がある。王の持ち物であるこの軍が嘉国において上位に位置している。しかし、それを凌ぐ實力を持った者たちの軍が二つあった。二將軍と呼ばれる、この国の宰相に並ぶ位を持つ武官がそれぞれ所有する軍だ。二將軍は慣例として、この国を守ると言われる獣、鳳凰と麒麟から一字取って、王から名が与えられる。鳳凰の名をもつ將軍の軍を鳳軍と言い、麒麟の名をもつ將軍の軍を麒麟軍と言った。その軍に入るのは狭き門であり、禁軍においても上位の實力を持つものしか入ることができなかった。二つの軍に所属する軍人は、それぞれ禁軍將軍に近い實力をもったものだけだった。駿は、わずか

18歳でその麒麟軍に入ること許されたのだ。

「ありがとうございます。そんな風に言っていたらいて光栄です」
駿は照れたように、笑みを浮かべた。

「期待に恥じないよう精いっぱい働かせていただきます。ところで、お茶と、芋羊羹をいただけますか？」

「はい！すぐにお持ちします！」

「この席座るね」

駿は白琳の前の席に座った。

「お仕事は良いんですか？」

「さすがにこんなに長い間休暇がないと疲れるから休暇もらったよ」
「麒麟も急がしそうですものね」

白琳はクスクス笑った。

「ところで、退屈って言うてたけどもしかして…」

「たぶん、あなたの予想通りよ。あなたの上司で、友人でもある翡翠様がいないと退屈だわ」

「麒麟様…いや、翡翠は…」

「良い暇つぶしだ」「良い玩具ですわ」

白琳と駿の声が重なった。麒麟という字を持つ、麒麟の將軍、本名翡翠は白琳と仲が良かった。世間一般の『優秀な將軍』という印象からは想像がつかないことだったが、翡翠は白琳に頭が上がるな。そして、駿は翡翠と子供のころからの親友だったのだが、駿はよく翡翠で遊んでいた。翡翠が駿の上司となった今でもそれは変わらない。

「翡翠様いつ頃帰ってくるんでしょうね」

「そろそろ帰ってくるんじゃないかな。でも、白琳、悪いけど、翡翠は当分事務処理で忙しくなると思うな。あいつも、部下に仕事押し付けないで、たまには自分でやった方が良いと思っし、わざと仕事残して休暇もらったんだ」

「あら、翡翠様には当然の報いですわ。計算が苦手だと言って計算

が入ると全部部下の方に任せているのでしょうか？たまには翡翠様が自分でやるべきだと思っわ」
そう言うと、白琳はクスリと笑った。そんな白琳に駿も笑みで返した。一見李京一の美男美女。二人がそこにいるだけでも場の空気が変わる。そんな二人がこういった会話をしているなど誰もが夢にも思っていないかった。

第一章 北の青い空 2

青年についていった少年は、日の光が当たる煌路に出た。温かい光の中に出てわかったことだが、目の前にいる青年は、茶髪だった。少年は、路の様子を見まわした。裏の小路の様子とは様変わりし、柔らかな昼の日差しで灰色の石畳が白く反射している。その中央を、小川のように水が流れていた。路の両端には桜の木。先ほどまでいた小路とは違い、幾人もの人が歩いていった。そして、やはり、時々吹く、南の海からの潮風が桜の花びらをはらはらと散らせていた。噂には聞いていたが、綺麗な都だとそう思った。今はもう終わってしまったているが、春の初めの桜祭ではもっと美しくなる、ということを少年は聞いたことがあった。

ふと少年が正面を見てみれば、少し長めの茶髪を下の方でしばっている青年は、だいぶ前の方へと進んでしまっていた。少年は小走りて青年を追いかけて、青年の横に並んだ。ふと、青年の横顔を見上げて、少年は驚く。今までくらい小道にいて気付かなかったが青年の瞳は翠色をしていた。少年は翠色の瞳をもつ人物を見たことがなかったのだ。思わずまじまじと青年の顔を見つめる。少年の視線を感じたのだろうか。少年より頭一つ分近く背が高い青年は少年を見下ろした。

「……俺の顔になんかついてるか」

相変わらずの落ち着いた声で青年が言った。

「あ、いや、ただ、翠色の瞳なんて珍しいなあって思って」

青年は、やれやれというよに、軽くため息をついただけだった。慣れた反応なのかもしれない。

「嘉って綺麗な国だな。噂で聞いた通りだ」

「……お前は外の国から来たのか？」

少し間を置き青年が問う。

「あ、うん」

「…お前の髪の色、珍しいな」

少年はああ、と頷くと癖のある赤い髪を手を取った。少年の髪は、赤みがかった茶色でも、何かで染めた赤でもなく、純粹な赤だ。

「この髪の色が目立ったからかな？今、双龍国でもっとも安全な嘉にいるのに、財布をとられそうになったのは」

少年はふと思いついた疑問を口にする。双龍国といわれるこの大陸には、北の洸を始め、八つの国が存在しているが、嘉以外の国は落ち着かなかつた。ある国では貧困にあえぎ、また、国同士で何年も戦争をしている国もある。そんなご時世に、嘉だけは違つと聞いていた。

「…お前、名はなんだ」

「紅貴」

兄さんは？そう問う前に、青年の言葉がそれを遮った。

「紅貴、確かに嘉は双龍国の中ではもっとも安全な国だ。だが、昔ほど治安は良くない。周りの国があれだけ荒れていて、嘉も昔のようにのんびり平和っていうわけにはいかない」

赤い髪の少年　紅貴は、青年が言おうとしていることがつかめずに首をかしげる。そんな紅貴を見てか、青年は呆れたようにため息をついた。

「ある程度落ち着いている国はこころ辺だと、嘉だけだろう？逃げるとしたら嘉以外の選択肢は考えられない。……当然だが他国から嘉に来た難民が増える。嘉の国民とそれ以外の難民とで、格差が生まれる。この国で成功する奴は良いが、そうじゃない奴もいる。すると、そいつらの中には罪を犯す者もいる。あの、薄暗さじゃ、紅貴の髪の色は目立たない。髪の色のせいなわけないだろう…紅貴、お前、見た目に違わず馬鹿だな」

青年が、軽蔑しているような気がし、紅貴は微かに怒りを感じた。「そんな言い方ないだろう。たしかに、兄さんと違って、髪の色以外特徴ないし、平凡な容姿だし、弱いけど、そんな冷たい言い方しなくたって良いじゃないか」

目の前にいる青年は確かに、並以上、いや、かなり端正な顔立ちをしていた。天馬を扱えると知って、憧れにも似た感情を覚えていた。しかも青年は紅貴の目の前で、財布泥棒を倒して見せていた。しかし、人が話していてもにこりともせず、この冷たい言い方。この青年は性格が悪いのではないだろうか、紅貴は思った。先ほどまで持っていた憧れに似た感情も、消えていくのを感じた。

「紅貴はただの難民というわけでは無さそうだな。……嘉、いや、煌李宮にいったい何の用だ」

青年は紅貴の心の内を知ってか知らずか、相変わらずの口調で続けている。紅貴は、不機嫌な様子を隠さずにそれに答えた。

「兄さんには関係ないだろう」

「いっっておくがそう簡単に煌李宮には入れないと思うぞ。一般人が進めるのは煌北門の先、煌李宮の正面、麒麟までだ。……一応、王が住む場所だからな」

「そんなことはわかってる！それでも俺は何が何でも煌李宮に行かなきゃいけないんだ！」

紅貴は、青年を睨んだ。紅貴が叫びにも似た声を上げた直後、その声に共鳴するかのように、穏やかだった風が急に強くなった。はらはらと漂っていた桜も、吹雪のように舞い散った。青年は何を思っているのだろうか。口の端をほんの少しだけ緩めて微かに笑うと、淡々と言う。

「……俺の名前を言っていなかったな。翡翠だ。煌李宮にいる兵は強い。財布一つまともに守れないような餓鬼一人じゃ煌李宮の侵入は無理だ。俺が手伝ってやっても良い」

翡翠の意外な言葉に紅貴は目を瞬いた。

「でも翡翠さん……」

「翡翠で良い。それはそうと、もうじき煌李宮に着く」

翡翠が指を指した方を見ると、白い石でできた城のようなものが見えた。白は二層に別れており、上層にも下層とも数人の兵士が待機していた。下層には人が通り抜けられるような空間がある。

「煌北門だ」

紅貴は、絵でしか見たことがないその門の名をつぶやいた。紅貴の目で、はつきりと兵士の顔をはつきり見ることが出来る位置まで近づくと、こちらに気づいたのか兵士が、頭を下げた。ちらりと紅貴が横を見ると、翡翠はなぜかため息をついている。紅貴にはそれが少し不思議に思えたが、考えてもきつと翡翠の考えていることなどわからないだろうなと思った。

煌北門を通り抜けると、細かい彫刻があしらわれた門が現れた。この国を守ると言われている獣の一つ、麒麟の彫刻だ。ゆえにこの門は麒麟と呼ばれた。

紅貴は麒麟を正面から見ると、あの門を通れば、その先は煌李宮だ。紅貴はこれからしようとしていることを思い、喉をぐくりと鳴らした。

「……言ってなかったが、俺は嘉国の軍に務めている。お前が煌李宮に入れるように話をつけてくるからその辺でまっている」

無理やり煌李宮に侵入する覚悟をしていた紅貴は、気が抜けるのを感じ、そして同時に安堵のため息をついた。だが、と彼は思う。これから成そうとしていることの重さは変わらない。

第一章 北の青い空 3

煌李宮の北、煌龍門と呼ばれる門がある。天に昇る龍の形がかたどられたその門の先は、内廷と呼ばれ、この国の王族の生活の場となっている。煌龍門を抜けた先には、やはり、白い石でできた路。その左右は、池と呼ぶには大きく、水だまり。小さな湖のようになっている。東の湖の上には、季節の花が咲く、庭園のようなものが浮いている。西の湖には、林が浮いていた。その林の上を今は、黒い翼をつけた馬が飛翔している。それを、内廷の内から見つめる少女がいた。

「烽国の首長が、津国の者に倒されたという情報が入りました。二国の争いはますます激しくなるで……」

「天之助だ〜」

内廷の西の一室、黒漆でできた円卓を囲んで、二人の男と、一人の少女により、会議が行われていた。先ほどから、ずっと話をしてい、黒に近い青い官服を身につけた男の本名は、康莉こうりといい、嘉国の文官の最高位である、宰相の位についていた。宰相は、嘉を守るといわれる、獣、靈龜れいきより、龜という字をとって、王より名を与えられる。故に、康莉の字は康龜こうきという。

康莉が話している途中で声を上げたのは、桃華という少女。淡い桃色の丈が短い服を着て、茶髪をお団子にした少女は、まだ、十代半ばだった。顔立ちも幼く、綺麗というよりも愛らしいという言葉が似合う。踊り子などをやっているようなその少女は、実際にはその出で立ちからは想像しにくいことだが、武官だった。たしかに、その腰には黒い鞘に入った刀と、脇差しが帯刀されている。そして、鳳凰から一字とった名を少女はもっていた。鳳華という字を持つこのあどけない少女は、武官としての最高位、二將軍の位についていた。桃華は、飲みかけのお茶を円卓に置くと、窓の方へ駆け寄った。

「やっぱり天之助だわ」

窓の方へ駆け寄り、桃華を、父親のように温かい眼差しで、着流しの男がむける。茶色い瞳に、はしゃぐ少女の姿が映り、男は柔らかく笑んだ。

「天之助っていうと、翡翠の天馬だったかな？確か桃華が名付け親だったね」

男は顎に生えた少量のひげをなでながら、柔らかい声で言った。着流しを着たその男は、たしかに、二將軍の名を本名で呼んだ。親しい間柄ではその限りではないが、字をもつ人間にたいして本名で呼ぶのは無礼とされている。本名で呼ぶことが許されているのは、その親と、そして、王族だけだ。この四十に入ったあたりの長身の男こそが、嘉国の国王、龍孫だった。

「翡翠は名前なんていらなくて言っただけで、それじゃあ、あの子が可哀そうでしょう？だから、私がつけてあげたんです。最初、翡翠はなぜか嫌がってたんだけど、白琳が説得してくれて、あの子の名前天之助になったんです」

桃華はそういうとにっこりわらった。何の屈託もないと言ってさしつかえのない明るく愛らしい笑顔だ。

「天之助が帰ってきたということは、麒麟は弄国から帰ってきたということですね」

康亀がそう言うと、ちょうど扉が開き、翡翠が中へ入ってきた。

「翡翠お帰り〜お土産は？」

桃華はそう言って手を出す。翡翠はそんな桃華を無視し、まっすぐ王のところへやってきた。

「王、ここに帰ってくる途中に会った餓鬼に会って欲しいのです。多分、王に用だと思つたので」

龍孫は、突然そんなことを言う翡翠を不思議に思い、微かに首をかしげた。不思議に思つたのは、康莉も同じだったのだろう。

「麒麟、子供を王に会わせたいとはいっただい……」

翡翠はそれには答えずに、王の目をまっすぐに見た。翡翠の視線

を受けて、その内に潜む真剣な目の輝き　それに、王は気づいた。

「その餓鬼……真つ赤な髪を持つその餓鬼は、おそらく洸国から来たと思われませう」

王は頷くと、先ほどまでとは口調を改め、言う。

「……わかった。その子どもに、玉座の間で会おう。康亀、玉座周辺の人払いを頼む。その子供と二人だけで話したい。私は、着替えたら、玉座に向かう。翡翠はその子を玉座に案内してくれ。弄国の報告は後ほど聞こう」

王がそういったその直後だった。ボタンという音が部屋中に響いた。音の中心にはうつ伏せに倒れている青年。確かに先ほどまで王と話をしていた青年が倒れている。康莉は、目を丸くして翡翠の方へ駆け寄った。

「麒麟、大丈夫か!？」

「翡翠どうしたの〜眠いの?」

早口で言う康莉に続き、この場では場違いなのんびりとした桃華の声が続いた。

「多分、貧血だな。康莉、桃華」

龍孫はいったん言葉を切ると、割と背が高い康莉と、背が低く、細身の桃華を見比べる。うん、と頷くと、再び口を開いた。

「まず、桃華は、翡翠の代わりに赤い髪の子供を玉座まで案内してくれ。慣れない宮中で、子供をいつまでも待たせておくのも可哀そうだから、着替えたらすぐ行く。康莉は翡翠を頼む」

駿は、山のような書類を片手に内廷の回廊を歩いていた。回廊の上部にはめ込まれた硝子の窓は、開けられていた。春のやわらかな風と陽光が差し込み、駿を照らしている。耳に心地よい小鳥のさえずりが聞こえ、駿は上を見上げた。

「気持ち良いな」

そう、目を細めてつぶやきながら歩いているうちに、目的の部屋の

前にたどり着いた。宮中での翡翠の私室だった。駿は、書類を持っていない方の手で扉を開き、中に入った。

「相変わらず何も無い部屋だな」

駿は、部屋を見回した。部屋の奥には大きな窓。そこにかけられている簾は上げられ、煌々宮の湖が見渡せる。陽光が入る明るい部屋ではあるが、それ以外に特徴はなかった。生活に必要な最低限な物しか置いておらず、殺風景な部屋だ。部屋の主の性格を表しているようだ、駿は感じていた。

入って右の寝台をちらりと見ると、この部屋の主が眠っている。

駿はそれを見て微かに笑うと、入って左の机に書類の山を置いた置いた。その直後、紙が一枚ヒラリと床に落ちる。拾おうと腰をかがめた丁度その時、駿はもそもそと動く音を聞いた。そちらを見ると翡翠が上半身だけ起こしていた。

「お前、俺の部屋で何しているんだ」

微かに眉間に皺を寄せている翡翠をみて、駿は質問に答えずに笑って見せた。代わりに、違う話題を切り出した

「久しぶり、といっても二週間ぶりくらいかな？」

「……」

翡翠は相変わらず、眉間にしわを寄せているままだ。

「翡翠が弄国にいつている間に、何回か白琳に会ったよ。いつみても綺麗だよな」

白琳の名前を聞いた翡翠の眉が微かに動いた。ほんの少しの変化だったが、駿はそれを見逃さない。一瞬の沈黙の後、翡翠が言った。

「駿……お前はわざわざそれを言いにきたのか……？」

翡翠のあからさまな不機嫌な声に、今度は微かに声をあげて笑った。

「そうじゃないけど、あれ？もし、そうだったら何か問題でもある？」

「……いや……あ！この忙しい時に兵士が、暇潰しに喋りしに来てたらまずいだらう。仕事に戻れ！」

突然思いついたように言う翡翠が可笑しい。駿は微かに笑いながら答える。

「翡翠、俺はどこかの將軍と違って、半年ほど無休だったんだよ。それで、今日休み貰ったんだ。だから休みの日に俺が何やっても自由だろう？翡翠の方こそ今日は休みじゃないだろう？こんなところで寝ていて良いのか？」

「……昼寝ぐらい問題ないだろう」

プイッと壁の方を向いてそう言った翡翠に対し、駿は『確信』を口にする。

「なんだ。昼寝か。俺はてっきり翡翠が貧血かなんかで倒れたのかと思ったよ」

そう、にこにここと笑っていると、駿の背後の扉が開き、髪をお団子にした少女が顔を覗かせた。

「翡翠、貧血大丈夫？」

そう言いながらも、桃華の声からは心配している様子を感じられない。花が咲いたように明るく笑うと、翡翠は深いため息をついた。「翡翠が連れてきた赤い髪の子……紅貴だっけ？玉座連れて行ったよ」

「あれ、翡翠が子供連れてくるなんて珍しいね。子供嫌いだろう？」

「たまたま目的地が同じだったから一緒に来たっただけだ」

「ふ〜ん……？常に仏頂面の翡翠に声かけるなんて、そんな勇氣ある子いるんだね」

「……お前ら無駄口叩きに來ただけならすぐこの部屋から出る」

「違うよ〜！ちゃんと用事があつて來たんだもん」

桃華は口を尖らせて言うと、手のひらを上に両手を出した。

「おみやげ〜」

「は？」

「だからお土産っ」

桃華はにっこりと笑った。

「なんで俺がそんなのを買わなきゃいけないんだ」

「え〜？だつて、仕事とかで遠くに行つたときはお土産を買つ決まりでしょう？」

「そんな決まり作つた覚えはない」

桃華は、翡翠の声を聞きながらも部屋のはじの戸棚に近づき、革でできた翡翠の鞆を漁りだした。しばらくたち、目的のものを見つけたのか、嬉しそうに桃華は笑った。

「これ、お土産でしょう」

竹の皮で包まれた物を取り出し、桃華は翡翠の許可を得る前に開け出した。部屋に、ほのかな桃華の香りが漂う。

「桃饅頭だ〜。私、桃饅頭大好き」

嬉しそうに桃饅頭を頬張る桃華と、溜息をつく翡翠を見比べ、駿は静かに言う。

「翡翠も桃華ちゃんに甘いんだな」

「は？」

「宮中の人間は皆鳳華様に甘いからね」

駿はそう言つてほほ笑んだ。二將軍の一人、鳳華、本名桃華は、その容貌のためか、性格の為か可愛がられる傾向にあつた。十六歳になるのだが、その容姿は十三歳程度にしか見られなかつた。駿が初めて桃華に会つたのは四年前。駿と翡翠が十七歳、桃華が十二歳だつたのだが、実際、その頃からほとんど桃華の容姿は変わつていない。昔から大きな黒い瞳はいつもきらきら輝いており、桃色の口元はいつも笑顔を象つている。どんなささいなことでも素直に喜び、天真爛漫という言葉が似合う、そんな子供だつた。

でも 駿はちらりと桃華の黒い刀を見た。一度刀を抜けば、その実力は他者を圧倒する。たまたま王族と親交が深かつたとか、前二將軍が恩師であるとからいつた理由で桃華は二將軍に命じられた訳ではないことを駿は知つていた。

「おい、駿も桃華もいい加減この部屋から出る」

翡翠が腕を組んだまま、機嫌の悪さを隠さずに言った。

「そうしたいところだけど、俺も遊びに来たわけじゃないから、伝

えたいことだけ伝えたら出るよ」

駿は机を指差した。机の上には先ほど駿が置いた書類の山。

「仕事を持ってきたんだ。明日までに頼むね」

「ふざけるな」

「さて、ここにいっても邪魔だろうし出ようかな。桃華ちゃんも部屋
でようか」

駿は柔らかに笑うと、最後に言う。

「どうせ、翡翠のことだから、お金の計算を間違えたんだろう。旅
の資金を前半でほとんど 使い切って、後半はほとんど金なくなっ
て食事できなくなった、ってことが前にもあったしね。そんな自業
自得の奴の仕事を代わりにやる優しさは持ち合わせてないから仕事
頑張れよ」

駿はいったん言葉を切るとにやりと笑う。

「まあどうしても大変だったら白琳にでも手伝ってもらうんだね」

俺は休みを満喫するよ、と、軽口を言って駿は部屋を出て行った。

第一章 北の青い空 4

洸嘉十三小国戦国期。圧倒的な力を持つていた洸は当時の嘉の真ん中に 位置する凜河まで兵を進めていた。洸は、大陸征服まであと一歩だったのである。当時の嘉王は、洸の思想に危機を感じていた。これ以上洸の領土を広められるわけにいかなかったのだった。だが、洸は秘密の戦闘力をもっていた。その力は絶大だった。戦国期、最強の武人、嘉の『二勇士』でさえ、その戦力に抵抗することは出来なかった。嘉王は、苦渋の決断の末、あることを交わす。『凜河の盟』。これにより、凜河を互いの国境とし、お互いそれ以上領土を推し進めないことが決定した。同時に、戦国期の終わりを告げた。

『史書』天の巻より

煌李宮、玉座の間につれてこられた紅貴は、無人の玉座を見つめた。塵一つ見当たらない黒い石でできた階段の先に、それはある白を基調としたその椅子には銀がちりばめられていた。しかし、眩しすぎず、それが美しい華を描いていた。今は、そこに座るべき人物の姿はまだ見えない。誰もいない玉座の間は当然、静かだった。自分の存在はこの場ではあまりにも異質だと、紅貴は感じた。目のやり場に困った紅貴は自分が立つ床を見る。まっ平らな黒い石でできた床は、上部から差し込む日の光を受け、わずかに反射していた。床の上に、銀で描かれた絵は、その特徴から、この世界を作り出したと言われる妖龍と神龍だろうと、紅貴は推測した。
(そういえば、翡翠はなんで、俺が国王に会いたいってことがわかったんだろっ)

紅貴は煌李宮に行きたいと言ったが、王に会いたいと思っっているとは翡翠に話してはいなかった。でもたしかに……紅貴はふと、ここまで案内した少女を思い浮かべる。翡翠に頼まれたというその

少女は、確かに「紅貴が王様に会えるように、翡翠が説得したんだよ。あそこの玉座の間にいれば王様来るからちよつと待ってて」そう言ったのだ。やがて、かつかつという音が玉座の間に響いた。足音は紅貴がいる正面からだった。ゆっくりと顔をあげると、暗い紫色の衣をまとった中年の男が玉座に腰かけるところだった。優しげな茶色の瞳が、紅貴をまっすぐに見た。その視線とぶつかり、紅貴は自分の心臓が、緊張のためにどきどきと高鳴るのを感じる。震えそうになる自分をなんとか抑え、膝について頭を下げた。そして、ゆっくりと言葉を紡ぎ出す。

「私は、紅貴。いや、わたくしです。これが証拠です」

紅貴は懐から、赤い巻物を取り出した。金糸を解くと、巻物は金色の光を発した。

「洸より、嘉王様をお願いをしたく、参りました」

「話を聞く。顔を上げよ」

王に促され、紅貴はゆっくりと顔を上げた。巻物もしまい、再び元のはのかな日の光が照らすのみの玉座になった。紅貴は、再び王の顔を見る。優しそうに見える国王は、やはり、それだけでなく、王としての威厳を漂わせている。やっぱり王なんだ。逆らうことができない何かをまとっているように、紅貴には感じられた。しかし、紅貴は言葉を続ける。

「現、洸国皇帝、紫淵しえんは、行きすぎる悪政を敷いています。……まだ表立った活動はしていませんが、民の中には悪政しか行わない皇族を誅し、洸国の民を救おうと考えている者がいます」

「そなたはどうするつもりだ」

「私は民の味方をします」

「ほつ」

王は、髭を撫でながらおもしろそうに笑う。

「……洸国皇帝の軍と、一介の民の軍。その戦力にはだいぶ開きがあります。とてもではありませんが、今のままでは戦うことなどできません。そこで、お願いがあります」

紅貴は手から汗が流れおちるのを感じていた。これを言うために嘉へやってきたのだ。

「嘉の援助をいただきたい」

「凜河の盟は知っているか？」

「……存じております。表立った支援は要求いたしません。ですが、内密に、ある人材を貸していただきたいのです」

「人材？」

「個人の単位で戦える人間はいても、それを指揮できる人間がいま
せん」

「いや、正確にはいるのだ。いるのだが……彼には他の役目をやってもらう必要がある上に、その前に片づけなければならぬ問題がある。」

「戦略を練り、それを指揮できる人間……それを貸していただきたい。それから、嘉には『癒し』の力を使える方がいると聞いております。その方に救っていただきたい人がいます」

「そなたのいう要求を聞いて、嘉に良いことはあるのかな」

王は、変わらず笑みを浮かべている。それに対して、紅貴も笑みを作った。知将と呼ばれた、今は亡きかけがえのない人物の表情を心に描いて。

「もちろんです。私は、お願いだけでなく、提案しに参ったのですから。洸の皇帝を倒したら、嘉に多大なる利益が与えられることを知らぬ私ではありません」

李京の南は港になっている。白い石でできた波打ち際に、それほど強くない波が打ち寄せ、繋がれた何艘もの船が波に揺れていた。

その上を通り抜ける風が　夕暮れの　かすかに冷たい風が、港の縁で、海に向かって足を投げ出して座っている女性に向かって吹きつけた。

「さすがに夕暮れの海は寒いわね」

そう言って、十代後半の女は、蒼い瞳を水平線の西にむけた。日

はすでに半分ほど沈み、蒼い海を金色こんじきに変えている。美しいのと同じ時にどこか切なげな情景だと、女は思っていた。

「考え事ですか？瑠璃」

紺色の着物を、片手で撫でつけていると、背後から聞きなれた女性の声が聞こえた。振り返ると、20代前半の女性が、優しい笑みを浮かべている。夕日に照らされたその顔はひどく美しい。

「白琳こんなところでどうしたの？」

白琳は瑠璃にほほ笑むと、柔らかい声で言う。

「考え事する時、瑠璃はいつもここに居ますから。何かあったんですか？」

「ちよつとね」

少しの間、二人は何も言わない。波の音だけがそこにあった。やがて、白琳が静かに口を開く。

「……やっぱり洗に行くおつもりですか？」

「さすが白琳ね。考えていることはお見通しつてわけね」

「何回か相談受けていましたし、それに、私は瑠璃の親友でしょう？」

ほほ笑む白琳の笑顔は、不思議と瑠璃を安心させた。白琳自体がそういう人柄だというのもあったが、白琳とは長い付き合いだったのだ。幼い頃は、兄、翡翠の友人だった。やがて何度も会い、時が経つうちに、いつしか親友と呼べる関係になったのだ。

「洗にはいつか絶対行かなきゃいけないわ。それが今のような気がするんだけど……でも」

瑠璃は噂でしか知らない洗の様子を思い浮かべる。双龍国の北にあるその国は、荒廃が酷いという。皇帝の圧政が続き、治安は最悪。双龍国の各地で起こっている戦争の背景には洗があるという噂もあった。

「わたしみたいな一般人が行って、無事で済む国だとは思わないわ……傭兵を雇うっていう手もあるけど、いくら傭兵でも、洗には行きたがらないと思うし、嘉国公認の武官……郷兵や禁軍兵、二將軍

の兵士が、洸に行くのは『凜河の盟』で禁じられているでしょう？」
凜河の盟とは『史書』天の巻に記された嘉と洸の盟約だった。嘉の子供であれば、その重要な部分は塾で習う決まりになっている。また、凜河の盟が記されている『史書』天の巻、この世界の創世が書かれた『史書』創世の巻は、文官、武官問わずに、この国の役人であれば暗記しているのが当然だった。それほどまでに重要なきまりなのだ。それを破れば嘉と洸は戦争になる、というのを瑠璃は聞いたことがあった。

「こうなるんだったら桃華に剣の使い方を教えてもらっていけばよかった」

瑠璃は友人の名前を出してため息をついた。いや 妹ともいうかしら？友人というより、妹のようだと瑠璃は思っていた。昔から言動が幼く、一人でできることは少ない。部屋の片づけもまともでできず、髪を結ぶのも苦手な桃華の世話をするのは いつも瑠璃だ。しかし、そんな瑠璃でも、桃華に敵わないものは武道だった。どんなに言動が幼くとも、彼女は、二將軍であり、それ相応の実力があるのだ。

「ねえ瑠璃、洸行く時にき桃華様も連れて行ったらどうでしょう」
瑠璃は目を瞬いた。桃華、いや、二將軍が洸の国境門を超えることは禁じられている。『凜河の盟』を破ることは、世間一般の常識ではありえない。しかし、白琳がそう言った時の声色は、冗談が混ざっているように思えなかった。

「白琳、それ、本気で言ってるの？」

「はい」

白琳は即答した。

「洸国に干渉することは禁止されているし、兵士が洸に行くことなんてできるはずないと思うんだけど……」

白琳はクスクスと笑っている。

「桃華様なら、洸国に乗り込むくらいなんでもないと思いますし、用心棒にもってこいです。瑠璃の友人でもあるし、叶うならこれ以

上の適役はいないでしょう？それに、私は聞いたことがあります」
「え？」

「桃華様、嘉と洸の国境門を通る以外にも、洸に向かう方法を知っているようですよ」

瑠璃は驚ろき、白琳をみつめた。白琳は、なぜか楽しげに微笑んでいる。

「どうやら、実際に、洸に行ったことがあるようですよ」

瑠璃は、塾や書院にいけばいつでも見ることができ、双龍国の地図を思い浮かべた。双龍国の中央、凜河と呼ばれる大河が東西にはしっているが、その河は流れがやく、船でも渡ることができない。凜河のところどころに橋が架けられており、その先は洸の領土になるが、橋の入り口と出口には、国境門と呼ばれる門が据えられ、その門を武官が越えることは『凜河の盟』で禁じられている。嘉の南から船で洸に行ったところで、港は監視されている。洸国に行くことは不可能なことに思えた。しかし、こういう表情の時の白琳は嘘をついていない、と瑠璃は知っていた。

「でも、仮に桃華が洸に行けたとしても、桃華はあれでも二將軍だし……。どれくらい時間がかかるかわからないような旅に桃華をつけていったら、桃華の周りの人に迷惑かけちゃうでしょう？」

「大丈夫です。桃華様の仕事は私が責任を持って翡翠様にやらせますから。それに、鳳軍、麒麟軍の方たちは將軍たちがやり残した仕事を処理するなんて日常茶飯事だと思いますわ。ですから、瑠璃と、桃華様、それから私で洸に参りましょう」

「え、白琳も行くの!？」

瑠璃は驚き、思はず目を見開いた。

「医者の方が心強いとは思いませんか」

「それはそうだけど……」

「お願いします。私も洸に連れて行ってください。女三人洸国旅行しましょう」

白琳はそう言うにつこり笑う。白琳は瑠璃に対してはめったに

無理な頼みはしない。しかし、こうしてまれに突拍子もない頼みを瑠璃にするのだ。そして、一度そうと決めた白琳は瑠璃が頷くまで、諦めないだろう、というのを瑠璃はそれまでの経験から知っていた。首を微かに傾けて美しい笑顔でほほ笑む白琳を見た瑠璃は軽くため息をついた。

日はすっかり沈んでしまった。代わりに現れた白銀の月が、呆れながらもどこかほっとした風な瑠璃と、それを見て微笑む白琳を柔らかに照らす。澄み切った夜の海は、今宵の満月を映していた。

第一章 北の青い空 5

宮中での翡翠の一室からは湖が見渡せた。日がすっかり沈んだ今、湖は夜空を映し、澄み切った黒へと変化している。今宵は満月に黒に浮かぶ白銀の満月はため息が出るほど美しかったが、この部屋の主がついたため息は別の意味を含んでいた。

黒無地の着流しを、少々だらしなく着た翡翠は、座卓の前で胡坐をかいたまま駿に押し付けられた仕事を終わらせようとしていた。しかし、夕焼けの頃からやっているのにもかかわらず、積み重なった紙の山はほとんど減っていなかった。いつのまにか、日はすっかり沈み、代わりに月が姿を現している。紙の山と、月を交互に見た翡翠は思わずため息をつく。

(こんなのいつになつたら終わるんだよ……)

翡翠は再び紙の山をみると、気分転換をしようとして立ち上がった。寝台の方へ向かい、その横で、膝をつく。そうして、寝台の下に手を伸ばすと、そこから、酒瓶を取り出した。瓶には『恵明月』とある。嘉国の隣の恵国で醸造される高級純米酒である。翡翠は、改めて座りなおし、胡坐をかいた。慣れた手つきで瓶の口を開けると、『恵明月』の芳醇な酒の香りが漂った。

(これが桃華にみつかったら確実に奪われるな)

見かけによらず酒好きの同僚を思い出し、ふうっと息をはくと、香りに誘われるようにして、酒瓶に口をつけようとした。しかしちょうどその時、戸が開き、一人の女が入ってきた。女 白琳は、微笑みを浮かべて翡翠を見た。ちょうど、月明かりに白琳の白い顔が照らされた。つややかな黒い髪がさらりと零れ落ちる。一瞬、言葉をなくした翡翠であったが、何をしにきたんだと、尋ねることにした。しかし、それより先に、白琳が柔らかい声で言う

「仮にも二將軍の翡翠様が、宮中でそんな服装で、しかも胡坐をかいて、自室でお酒を煽っている姿をみたら、みなさんきつと怒りま

すよ」

「知るか。着流しの何が悪い」

いつもどおり、軽口をいうと翡翠はプイッと窓の方を向いた。

文官であれ、武官であれ、宮中で官職についている以上、役職に応じた官服というものは存在する。仕事が終わった後まで、官服を身につけていなければならないという決まりはないものの、いつ召集されるかわからないのが煌李宮である。宮中で過ごすほとんどの官は寝るとき以外は官服を着ていた。しかし、翡翠と言えば、官服を着たとしても、どこかだらしなく、官服をきちんと着るのは何かの宮中行事の時ぐら이었다。そして、普段はと言えば、専ら着流しという有り様だった。

白琳はクスクスと笑うと言葉を続けた。

「翡翠様らしくて私は好きですけど。とてもよくお似合いですし」

翡翠はわずかに頬が朱色になるのを感じたが幸い白琳の方からは見えない方に顔を向けていた。

「でも、これが二將軍だと知ったら嘉の民は悲しむでしょうね」

そう言った白琳の声はどこか可笑しそうだった。翡翠は、白琳の方を向いて言う。

「……ここに何の用だ？」

「実は、翡翠様にお願いがありまして、煌李宮に侵入してきちゃいました。」

「お願い？」

「ええ。……でも、見たところ、お酒飲んで現実逃避している割にはお仕事たまっているようですし、お仕事が終わってからお願いすることにします。翡翠様は、やろうと思えば事務処理もできる方ですし、そんな翡翠様がこれだけ処理できないお仕事です。きつと相当大変なお仕事なんですネ」

翡翠は机に乗った紙の山を見るとため息をついた。翡翠とて、事務処理が苦手なわけではない。むしろ得意なほうである。しかし、例外はある。それが今回のような仕事だった。駿が翡翠に押し付け

た仕事にはすべて計算が含まれていたのだ。翡翠は、いわゆる数学というものが大の苦手だった。実際、翡翠は武科挙と言われる国家試験には史上最年少で通ったものの、三元というものを取り逃がしていた。三元とは、科挙の三つの段階である、郷試、会試、殿試の全ての試験において首席だった者のことだったが、翡翠は、数学が含まれる郷試で首席を取り損ねていた。数字をみるのも嫌なほどに嫌いだったため、これまでそういう仕事が入った時にはすべて部下に押し付けてきたのだ。

「あら」

机上の紙を一枚手に取った白琳は小さく声を上げた。

「どうした？」

「これ、仕事じゃありませんわ」

「……仕事じゃない？ いったいどういうことだ」

「これ、仕事でもなんでもないただの数学の問題集です」

「なんだと……！？」

駿はたしかに仕事だといって紙の山を翡翠に渡した。しかも明日までの期限付きだ。

「あいつ、いったい何考えてるんだ……！」

「暇つぶしではないでしょうか」

「どういふことだ！」

翡翠が声を荒げて言ったちようどその時、部屋の戸が開いた。翡翠とは対照的に、きちんと官服を着ている駿だった。

「翡翠、王が呼んでるよ」

駿は部屋に入ると、いつもの頬笑みを浮かべて言った。

「駿！ そんなことより、これはどういふことだ！」

「そんなこと？ 王のことよりも大切なことがあるの？ 相当大変な問題があるんだらうねえ」

「これ」

翡翠は紙の山を指差す。

「これ、仕事じゃなくてただの数学の問題集だっていうじゃないか

「!これのどこが仕事なんだ!」

駿は、クスッと笑うと、何でもないことのように淡々と言う。

「別に間違っではないだろう?数学が常識では考えられないほど苦手なひく君にとっては数学は仕事だろう?学生の仕事が勉強っていうのと同じだと思うよ」

「同じなわけあるか!第一、俺は、もう、学生じゃない!この期に及んで数学をやる必要がどこにある!」

「うん……そんなこと言われてもなあ……。これ、霸玄さまがわざわざ文付きで送ってくれたものだし……。なんだったかなあ。ああ、いくら武道だけでできて、数学で合格点とってないって周りに知れたら足元巢食われるかもしれない。だから、これを翡翠にやらせてくれとか書いてあった気がする。二將軍になった後も心配してくれるなんて霸玄さまは良い方だね」

「あの、霸玄様って、もしかして元二將軍の?」

翡翠と駿の会話を聞いていた白琳が不思議そうに尋ねた。

「うん。元二將軍で、俺たちの恩師の……」「恩師じゃない」

駿が白琳に答えていると、翡翠が割って入った。翡翠はそのまま言葉が続ける。

「あんなじじい、恩師でも何でもなし。タダのくそじじいで十分だ」

「そんなこと言ったら、霸玄さま悲しむよ」

「あいつはくそじじいだ。それ以上でもそれ以下でもないだろう」

「まったく、恩ある年長者を尊ぶことができないようなこんな奴が二將軍につくなんて世も末だね。……『ただの』数学の問題集って言うくらいだから、すぐ解き終わるだろうけど、さすがに王に呼ばれて時間がないのに明日までが期限っていうのは可哀そうだ。一日延ばしてやるよ。だからすぐ王のところに行くんだね。いつものところだってさ」

「俺は何があっても数学はやらない。無駄口叩いてないでさっさとここから出る。……お前、俺が帰ってきたら覚えてろよ」

「何だかんだ言って痛い目にあつたことはないけど、一応、忠告通

り気を付けさせてもらつよ。そつだ、ちよつど良かった。王は白琳も呼んでたよ」

「私もですか？」

「白琳もつていつたいどういうことだ？」

「おれも詳しくは知らないけど、桃華ちゃんと、翡翠、それから白琳を呼ぶように頼まれたんだ」

翡翠と桃華が王に呼ばれるのはわかるが、白琳は有能な医者ではあるものの、官ではない。王に呼ばれるなど、普通では考えられなかった。もつとも、白琳の父親の圭貴は、宮中に務める医者であるため、あり得ないことではないが、白琳はまだ宮中で務める気はないことを翡翠は知っていた。その白琳が王に呼ばれるということに、翡翠は本能的に嫌な予感を感じていた。

李京の北、北区と呼ばれる場所に一軒の酒場があつた。その酒場に入るには少々コツが必要だった。石畳でできた路地、その石畳の一つを決まった手順で叩くと、がこんと音が響く。扉の一つを指で押すと石畳が外れ、代わりに鍵穴が現れるのだ。その鍵穴を開けた先に酒場はある。

「白琳に翡翠、待つてたよ。王様が、好きなお酒つくつてくれるつて」

翡翠と白琳が酒場に入ると、お猪口を片手に桃華が嬉しそうにっこりと笑つていた。その横ではどこか呆れた風な康莉が椅子に座つている。部屋の奥ではこの国の王、龍孫が酒場の店主よろしく、酒瓶を手に、柔らかい笑みを浮かべていた。

「翡翠、白琳なにが良い？古今東西のお酒を揃えてあるから、希望に答えられると思うよ」

翡翠がちらりと横にいる白琳の方を向くと、白琳はわずかに驚いた様子でいた。

「龍孫様、白琳殿が困つておられますよ。私たちは慣れてるので良いですけど、王が自ら酒を注ぐなど常識では考えられないことです」

翡翠と白琳の心中を察したのか、康莉が言う。白琳のほうに向き直り、康莉は言葉を続けた。

「驚かしてしまって申し訳ございません。王と言えど、普段は人の良いおじさんだと思って、好きなお飲物を言ってください。龍孫様も喜ばれると思います」

「え、ええ」

「俺は輝石水」

「麒麟、いくらなんでも遠慮がなさすぎだろう。輝石水って言うたら、恵国の最高級の酒じゃないか」

「康莉、構わないよ。翡翠、今、出すから待ってくれ」

龍孫はそう言うのと、棚の下の方に手を伸ばし、輝石水と呼ばれる酒を取り出した。

「白琳はなにが良い？」

お猪口に透明の輝石水を注ぎながら龍孫は、優しい声で言った。

「えっと……私は、お酒弱いので緑茶で結構です」

「わかった。飲みたくなったらいつでも言うんだよ」

龍孫の言葉を聞いた翡翠は、桃華と康莉がいる円卓について。それに倣い、白琳も少し戸惑った様子を見せながらも席に着いた。

「輝石水と、緑茶だよ」

龍孫はそういうと、コトリと音を立てて、それぞれ翡翠と白琳の前に置いた。翡翠は、視線を落とし、輝石水の透明な液を見る。濁りが一切ない輝石水にはわずかに、金粉が漂っていた。一般人には例え、將軍職についている翡翠ですら輝石水はなかなか手に入らない。翡翠はお猪口に手を伸ばす。酒の冷たさが、翡翠の右手にわずかに伝わった。口をつけると、翡翠好みの辛口が口の中に広がる……… 美味しいな」

思わず感想が口から洩れた。

「ねえ翡翠、白琳、私、見せたいものがあるの」

桃華はにっこりと笑うと、腰から鞘ごと脇差を抜きとり翡翠に渡した。刀がどうした、と言おうとしたが鏝につけられたものを見て

顔をしかめる。そこには小さな龍の縫いぐるみが括りつけてあったのだ。水色の柔らかい生地で作られた龍はつぶらな瞳を翡翠に向けている。

「お前、基本的に刀じゃなく脇差で戦うんだらう？こんな鐔につけたら邪魔じゃないか？」

「大丈夫だよ。それよりね、龍孫様と康莉にも名前教えたから、翡翠と白琳にも教えてあげようと思って」

桃華は満面の笑みを浮かべると、明るい声で言う。

「龍乃助りゅうのすけって言うの。可愛いでしょう？」

翡翠は自分の黒天馬を思い出し、溜息をつく。

「お前のその名前の感覚なんかならないのか？」

翡翠が呆れて言うと、桃華は頬を膨らませた。白琳はクスクスと笑うと、子を諭すように言う。

「私はとてもかわいらしいお名前だと思います。それを否定する翡翠様のほうがよっぽどどうかしていると思いますわ」

「それ、もらったのか」

「うん！買ってもらったの。この子のお友達で、梅っちもいるんだよ」

誰に、と聞かなくても察しのついていた翡翠はこれ以上何も聞かないことにし、話題を変える。

「話は変わるが、輝石水なんて高級な酒、どうやって手に入れたんですか？」

「前に、恵王の使者が嘉にいらした時にもらったものだよ」

「恵王…… 翡稜か。そんな高級な酒を快く注いでくださるなんて、もしかして、何かとんでもない命令でもするつもりですか？」

「…… やっぱ翡翠は鋭いな。まず、勝手に呼んでおいて申し訳ないがこれが終わったら、白琳には席をはずしてもらいたい。そして、君たちにとんでもない命を下そうとしている私を許してほしい」

王はそう言うと翡翠たちが座る円卓の前にやってきた。そういえば、と翡翠は思った。いつも、着流しの王が今は紫の正装を着てい

る。

「康莉」

王が真剣な様子でそう言うと、康莉は静かに立ち上がった。いつものまにか康莉の手には三つの巻物が握られている。

「白琳」

王が静かに声をあげると、白琳は緊張した様子で立ち上がる。

「まず、ここでのこと、これから下す命については、父親と、君の親友の瑠璃、嘉の二將軍以外の誰にも口外しないでほしい。約束できるか？」

急に空気が変わった。慣れた者どうしが集まった時独特の温かい空気から、この国の王が支配する圧倒的なそれへと。白琳は静かに口を開く。

「はい。約束します」

「壮 白琳に勅命を下す」

龍孫はそう言うと、康莉から巻物を受け取り、白琳に手渡した。白琳は一礼してそれを受け取り、巻物を開いた。開いたそこには流れるような龍孫の達筆。さらに文末には御名御璽が押されていた。翡翠と桃華も同じように巻物を受け取り、巻物を開く。やがて、中身を確認した翡翠は眉間に皺を寄せる。

「龍孫様、俺と桃華がこの命を受けるのはわかります。ですが……白琳までというのは危険ではないでしょうか」

これに答えたのは王ではなく、白琳だった。

「翡翠様、私なら大丈夫です。私にしかできないこともあるので一緒に行かせてください」

「でも……」

「大丈夫です。桃華様、それに、翡翠様がいるなんて心強いですわ」「翡翠、良いじゃん。白琳いた方がきつと楽しいよ」

仏頂面の翡翠に桃華は笑顔で言った。

「それとも、翡翠には白琳を守りきれない自信無いの？」

「そういうわけじゃ……」

「ふ〜ん……？まあ、翡翠が無理ならいざとなったら私が白琳を全力で守るから良いもん」

「あのな、桃華そうじゃなくて……」

王に下された命令はあまりにも危険すぎる。できたら白琳を巻き込みたくない、というのが翡翠の本音だった。

「だって、私や翡翠じゃ無理で、白琳にしかできないことがあるんでしよう？そしたら仕方ないじゃん」

桃華はなんでもないとのように言った。

「翡翠様、これ、勅命ですよ。拒否できるものではありませんわ。」

翡翠様がとやかに言っても仕方ないと思いますわ」

意気投合している白琳と桃華を見た翡翠はため息をつく。なぜか笑いあう二人をみて、疲労のようなものを感じてしまったのだ。

「龍孫様、この命 洸国の民と共に洸に入り、洸国を救うという命、謹んでお受けいたします」

翡翠の心境を知ってか知らずか、白琳は美しい声でそう宣言した。一切の揺らぎがないように翡翠には感じられた。これ以上は何も言うまい。そう決め、翡翠はため息をつく。

「ですが、受ける代わりにひとつお願いがあります。瑠璃も一緒に同行してもらっては駄目でしょうか？」

「瑠璃……芳 瑠璃か」

王は鬚をなでるような仕草をし、白琳を見つめた。

「よかるう。瑠璃も同行すると良いだろう。それは瑠璃の宿命のよくなものだからな。白琳と桃華、翡翠に瑠璃、それから洸の民、紅貴と共に、洸へ向かうのだ」

王はそう言ってこの場にいる翡翠、桃華、白琳の目を一人ずつ見つめた。

「では私は失礼いたします」

白琳が退席すると、王は静かに言った。

「翡翠、桃華、そなたたちにはもう一つ頼みたいことがある」

そう言って王は、臣であるはずの翡翠と桃華に頭を下げてしまった。
王のどこか悲しげな低い声は、いつまでも翡翠と桃華の耳から離
れなかった。

第一章 北の青い空 6

李京の東、商業区と呼ばれる一角はいくつもの店が並んでいる。

石畳の路地の両端には桜の木。その横には歩道があり、歩道に沿うようにして、店がたち並んでいた。商業区の目覚めは早い。日が完全には上りきっておらず、朝靄がかかる早朝、店の中から一人、二人と人が姿を現す。日がすっかり登る頃には、店を開けなければならぬのだ。そんな商業区の中ほどに位置する『福屋』と呼ばれる、都一の呉服屋から、一人の女が現れる。箒を片手の持った綺麗な女の瞳は蒼い色をしている。

「瑠璃ちゃんおはよう」

呉服屋の隣のお香屋の店主の女に声をかけられた瑠璃は、にこやかな笑顔を向けた。

「明喜おばさんおはよう。今日も早いですね」

「瑠璃ちゃんこそ。若いのによく働くって評判だよ。瑠璃ちゃんなら、嫁にとって声は多いんだろうね」

瑠璃はこれには答えず、微笑みを返しただけだった。

「顔も綺麗だし、元気でよく働く。商人の鏡だって評判だよ。家に来てほしいくらいさ」

実際、瑠璃を嫁にという声は多かった。歳も18。この国ではそれくらいで嫁ぐのは普通だった。幼いころから、よく働き、利発。

しかも顔が綺麗とあっては、嫁に欲しがる声が多いのは当然だった。しかし、瑠璃は結婚する気はなかった。その前にまだやらなければならぬことがあるのだ。

「やだねえ瑠璃ちゃん。冗談だよ。家のバカ息子に瑠璃ちゃんはもつたいないさ。瑠璃ちゃんにはもつといい男がいるってもんさ」

「おばさんったら」

そう言っただけほほ笑む瑠璃は、ふと、見慣れた人こちらに向かってくるのを見つけ目を見開く。

「馬鹿兄翡翠!？」

「誰が馬鹿兄だ」

翡翠の実家がここだとはいえ、めったに帰ってくることはない。突然の兄の帰還に、瑠璃は声を上げる。

「どうしたの?首にでもなったの?」

「なわけないだろう。用があつて戻ってきたんだ」

「珍しいね」

「俺、昨日ねてないから今から寝る。起こすんじゃないぞ」

翡翠はそう言うと、店の中に入っていった。

「まったく……」

瑠璃は腰に手をあてて、呆れたとばかりにため息をついた。

「ハハハハ」

「おばさんったら、急に笑ってどうしたんですか?」

「いやねえ」

笑いが少し治まったらしい明喜は翡翠が入って行った呉服屋の入り口を見たまま言う。

「麒麟様……翡翠は、子供のころは、この辺近所じゃ悪ガキって評判だったろう?それが、国立学校に入って、禁軍に入って、今じゃ二將軍になったって言うんだ。立派になったもんだと思ってたんだよ。あの小さな悪ガキが二將軍っていうんだからさ。でも、今の翡翠の口ぶり聞いてたら、性格は変わっちゃいないんだな、とと思ってね」

「そりゃそうですよ。あの性格の悪さはそう簡単には治りませんよ」

明喜は何かおかしいのか、もう一度笑った。

店の前の掃除を終えた瑠璃は、呉服屋の二階の住居部分に向かった。居間では、ちょうど朝食を作り終えたらしい、母親の珊瑚が、食卓に茶碗を運んでいるところだった。瑠璃同様に美人だと、また、よく働くと評判の母親だ。

「瑠璃、ご苦労だったね」

瑠璃と同じく、早朝の仕事を終えた父親の銀がいつもの穏やかな声で言った。

「ありがとう、お父さん。そういえば、翡翠が戻ってきたけどいったいどうしたのかしら」

「ああ、それなんだけどね、実は夜が明ける少し前に、康亀様がいらしゃってね、私に巻物を預けていったんだ」

「康亀様……って、あの康亀様！？大物じゃない！」

「そうだね。でね、その巻物というのが、王からの手紙でね」

「王！？」

次から次へと出てくる大物の名に瑠璃は驚きを隠せなかった。

「なんでも、翡翠が私たち家族に話があるだろうから、実家に戻らせた。話をきいてやってほしい。そんなようなことが書いてあったんだ」

「実際翡翠が戻ってきて、いったん寝て起きたら話があるから聞いてほしいっていったわ。まったく困った子だわ。寝るなら、せめて朝ごはんを食べてからにしたらっていったのに、それより寝るんだって言うってきかないんだから」

珊瑚はそう言って瑠璃と銀の湯のみにお茶を入れた。銀が好きな嘉緑茶だ。嘉緑茶特有の香ばしい香りが居間に広がった。銀は、珊瑚が入れたお茶を一口飲み、湯呑を置いて言う。

「それから、王からの手紙には瑠璃のことについても書いてあったんだよ。瑠璃も私たちに話さなければならぬことがあるはずだね。もし、瑠璃が話さないのだとしたら、勅命という形で後押しをしなければならぬかもしれない。……瑠璃、それは本当かい？」

父親の銀の口調は責めるようなものではなかった。いつもの温かい、諭すような柔らかい口調だ。まるで、銀の性格そのもののような。瑠璃は昨日の港での白琳との会話を思い出す。もう、自分がどうするかは決めてあるのだ。だとしたら、やるべきことは両親にその決意を話すことだけだ。

「そうね。私、お父さんとお母さんに話さなきゃいけないことがあるわ。……翡翠が起きたらお話しします」

「こんな朝から押しかけてしまつて申し訳ありません」

煌李宮の一角の武官のための鍛錬場。本来誰もいないはずの早朝、この場所には白琳と、駿が居た。

「かまわないよ」

駿はにこやかに笑つてそう言う。

「……実は、翡翠様をお願いしようと思つていたことがあるんですけど、状況が変わりましたので、あなたをお願いすることにしました」

「俺に？」

「ええ。あなた位の地位でしたらもう知つていると思いますが、翡翠様と、桃華様、瑠璃と私は洸国の民と共に、洸に赴き、洸国を救うことになりました。でも、実は私、その命が下る前は、所用がありました、桃華様と瑠璃、私で、洸に行こうとしていたんです」

「随分と大胆なことをするんだね」

「最初、桃華様がいなくなる分の仕事を翡翠様をお願いしようとしていました。でも、翡翠様も一緒に行くことになったので、翡翠様と桃華様の分、よろしくお願いします」

「大丈夫。それは、いつも俺がやっていることだから。翡翠も桃華ちゃんも数学が大の苦手だね……計算が入ると、いつもやらされるのは俺だったから、今まで通りだよ。それより白琳、本題はこれじゃないだろう」

白琳は微かに笑んだ。

「あなたに隠しても無駄ですし、隠すようなことでもないので、そのまま言わせていただきます。瑠璃……あなたにとって大切な瑠璃はいざとなつたら私が守りますのでご安心ください」

「知つてたんだね」

駿は微笑む。翡翠の親友、駿は、翡翠の妹の瑠璃に密かに想いを

寄せていた。しかし、その思いを瑠璃に伝える気はなかった。駿には駿の思惑があるのだ。

「それにしても、知られていたなんて驚きだよ。完璧に隠していたつもりだったんだけどね」

「多分、他の方は気づいていないと思うのでご安心ください。ただ、私が翡翠様を見る目と、あなたが瑠璃を見つめる目が似ていたものですから。……瑠璃はいざとなったら私が守ります。翡翠様や桃華様はもしかしたら、やらなければならないことがあって、瑠璃の事までは回らないかもしれません。その時は私がどんな手を使っても……」

駿は白琳を見た。白い肌も、艶やかな黒髪も、桃色の唇も、どこをとっても美しく、それは総じてきつい印象ではなく、柔らかい印象を与えるものだった。しかし、今、彼女の中には強い意志で溢れているように感じられた。だが、それは、ある一面では儂い。駿は、少し低い声で言う。

「あんまり、桃華ちゃんと、瑠璃ちゃん、それから翡翠が悲しむようなことを言うもんじゃないよ」

「え……？」

駿は、今度は笑顔を作る。そして静かな温かい声で言った。

「麒麟と鳳華……嘉の二將軍は強いって言ったんだ」

努力で補えるものではないほどに、麒麟と、鳳華は強い。それを駿は良く分かっていて。自分の武術の腕が上がれば上がるほど、その実感は強くなっていった。諦めではなく、あの二人に追いつくことは、天地が引っくりかえっても無理だろうと漠然と感じていた。

「洸国のお土産を持って、全員で戻ってくるのを、俺は待ってるよ」
「……あなたは性格が良いんだか、悪いんだか、いまだによく分りませんわ」

「それは、君も似たようなものだろう」

「ところで、その洸の民は、今どこにいるんだろうね」

駿は、いつものように考えをめぐらしていた。

翡翠が実家の呉服屋に帰ってきた夕方、呉服屋の芳家は、卓を囲んでいた。

「私、洗でやることがあるから洗に行きます」

瑠璃は静まった居間ではつきりとそう宣言した。

「瑠璃、洗がどういう国か分かっているのかい？」

銀が優しく言い、瑠璃は静かにうなづく。

「尊程度しか知らないけど、酷いってことは間違いないみたいね」

「それがわかっていて、どうしても行きたいというなら止めはしない……ただ、一つ約束してくれないか」

「約束？」

「絶対に生きて帰るという約束だ」

銀にしては珍しく、強い口ぶりだった。

「……約束する」

「銀、珊瑚」

翡翠が瑠璃に続いた。

「俺も、洗に行くことになった」

驚いたのは瑠璃だった。

「ちよつと翡翠！それ、どういうこと？なんで、翡翠まで行くことになってるの？」

驚いている様子の瑠璃を余所に、翡翠は淡々とした口調で言う。

「俺は、王に勅命を下された。……洸国に赴き、洗を救へという命だ。向こうの軍と戦うことになるだろう。洸国に行くということは、もしかしたら死ぬ可能性もある」

瑠璃は目を見開く。目の前でなんでもないことのように言い、呑気にお茶を飲む兄に対して、これまでにない怒りを感じる。

「翡翠！何、馬鹿なこと言ってるのよ！」

「瑠璃、落ち着きなさい」

「これが落ち着けるわけじゃないでしょう？なんで私は絶対に生きてかえってくるって約束をさせられて、翡翠は死ぬかもしれないってい

う宣言なの！？そんなのおかしいわ！翡翠も洗に行くって言うなら私と同じように絶対に生きて帰ってくるって父さんと母さんに約束するのが筋ってもんじゃないの？」

「瑠璃、そういうことじゃないんだよ。翡翠と瑠璃は違う」

「違う？何が違うの！？私たち二人とも父さんと母さんの子供でしょう？父さんと母さんは翡翠のことなんてどうでも良いの？」

「そんなことはない。二人とも大事な私たちの子供だ」

「じゃあ、どういうこと……？」

瑠璃の声は震えていた。

「……俺が説明する。俺は一応……翡翠……私が説明するから、部屋に戻っていなさい」

翡翠の言葉を、銀が遮った。

「私が説明したほうが良いと思うんだ」

銀は囁くように翡翠に言う。翡翠はため息をつく、瑠璃の方を見た。

「瑠璃、安心しろ。俺は死ぬ可能性はあるとはいえ、死ぬ気はない上に、そこまで弱くない。多分生きて帰れる」

翡翠はそついうと、自室に戻っていった。

「瑠璃、話をつづけようか」

「うん……」

「翡翠はね、武官なんだよ。武官であれ、文官であれ、官は国のために働くものなんだ。それはわかるね？」

「うん」

「武官の場合、国のために働くその職務に、命の危険が伴うものがあるんだよ。それが今回のような命だ。王は、国のために、時に勅命を出すことがある。国のための王の勅命に、官は逆らうことができない。そして、基本的に、いかなる時も優先されるべきものは、国のための命を遂行することなんだよ。たとえ、それが命を失う可能性のあるものでもね。その見返りに官はたくさんのお給料をもらっているだろう？」

「そうね……」

「翡翠は、それをわかった上で、武官になったんだ。しかも、わたしたちも翡翠が武官になることを受け入れた。翡翠は官だけど、瑠璃は官じゃない。そこが二人の違いだよ。そしたら、私たちがやれることは、翡翠の実力を信じて、それを受け入れることじゃないかな」

「うん……」

「瑠璃、大丈夫よ。翡翠があんな性格でも二將軍になれたのは、実力あつてのことなんだから。強いんだからきつと大丈夫。今日は久しぶりに家族4人、全員がそろつたんだし、おいしいご飯でも食べましょう」

「銀悪かつたな。あんなことを説明させて」

すっかり夜も更けた夜中、翡翠は、居間で酒を飲む銀にそう言った。「良いんだよ。……それが翡翠が逃げずに選んだ道ならね」

翡翠は何も言わずに、銀の笑顔を見た。その優しい笑顔を見ると不思議と、申し訳なく思えてしまう。心の中でもう一度謝罪をして、立ち去ろうとすると、銀が声をかけた。

「たまには、男同士で親子水入らず、一杯どうだ？」

銀はそういうと、翡翠にお猪口をさし出した。

「悪くないな」

翡翠は銀から酒を受け、一気に飲み干した。

その夜瑠璃は月を見ていた。あの、ただの馬鹿兄だと思っていた翡翠が実はそんな覚悟で官になったというのは意外な気がしていた。(でも、あの馬鹿兄ばかりが見せばあるなんてなつとく行かないわ私だって、同じくらいの覚悟はあるんだから)

ただ、翡翠や桃華とは違う。自分がする覚悟は違う種類のものだ。「絶対に生きて帰る……！」

瑠璃は、自分が洗へ旅立った後に、嘉で待っているであろう人々

の顔を思い浮かべ、誓った。

第一章 北の青い空 7

王に無事奏上することができた紅貴は、煌李宮、賓客殿に案内され、そこで一夜を過ごした。目が覚めた頃には、すっかり日は昇り切っていた。明るい陽光が一杯に差し込んだ部屋を見渡すと、入口近くに、女官の少女が、笑顔を浮かべて立っていた。歳は、紅貴と同じくらいに見える。

「もうすっかり昼ですよ。何度起こしてもお目覚めにならないんですから」

「すみません。朝弱くて……」

少女はにっこりと笑うと、年相応の明るい声で言う。

「長旅でお疲れだったんでしょね。龍孫様が、昼食がすんだら、会いたいとおっしゃってましたよ」

「そうか」

「それから、駿様が、紅貴殿がお目覚めになり次第会いたいと……」

そう言うと、女官の少女は、紅貴でもはっきりわかるほどに、顔を赤らめた。

「お通してよろしいでしょうか？」

「構わないけど、駿様ってどのような方なんですか？」

少女の顔はますます赤くなる。

「それはもう、かつこよくって……。あの笑顔、優美な仕草……。堪りませんわ！しかも、今、21歳でいらっしやるんですけど、わずか18のころに麒麟軍に入られたって言う、とても優秀なお方なんです。紅貴殿は、嘉の武官で、もっともかつこいい三人をご存じ？」

大人しいと思っていた少女の突然の豹変に、紅貴は圧倒させられる。紅貴の返事を聞くより先に、少女の話は続いた。

「麒麟將軍、二將軍の翡翠様に、皇太子付きの直属護衛官で、駿様の弟の豹馬様。それから……麒麟軍の、若き天才駿様！どのかたもかつこ良いんですけど、私は駿様が一番好きですわ。翡翠様も豹馬様

も無愛想でいらつしやるけど、駿様だけは違います！あの爽やかな笑顔！なんて素敵なのかしら」

「……たしかに18で麒麟つてすごいですね。鳳軍と麒麟つて、嘉でもつとも強い軍なんですよね？」

挙げられた三人の中に、聞いたことがある名があった気がしたが、紅貴はあえて気にしないことにし、話を続ける。

「それはもう。素敵ですわ……！」

「その、駿という方呼んできてもらっていいですか？」

紅貴が淡々とした口調でいうと、少女は嬉しそうに部屋を去って行った。

少女が去った後、紅貴は急に疲労感を感じた。

(いまどきの女の子つてすごいな……)

たかがかっこいい男の話であそこまで熱くなれるとは……と、紅貴はため息をついた。たまたま用意されていたお茶を口に含んだ紅貴は肩をなでおろす。

(そういえばあの子、翡翠が麒麟將軍つて……)

改めて考えると衝撃的な事実だ。紅貴は、驚きのあまり持っていた湯呑を落としてしまった。

(嘘だろ……！あんな性格悪そうなやつが將軍なんて…… いや、ちよつとまでよ。もしかしたら同じ名前の翡翠がいるのかもしれない。うん、きつとそうだ。あんな性格の奴が將軍なわけないよな)

嘉の官位は、頭の良し悪し、武道の優劣だけではなく、立ち居振る舞いや、言葉づかい、その者の持つ品格などが問われるというのを、紅貴は聞いたことがあった。だとすれば、翡翠が將軍だというのは考えにくい。そう思おうとしたが、翡翠が、上官の命令を、不満も言わずに聞いている様子はどうしても想像できなかった。

(やめよう……これ以上考えるのは。翡翠が何者だろうと、俺には関係ないし)

そう考え、溜息をついて、溢したお茶を片づけていると、先ほどの少女が頬を赤らめて戻ってきた。

(……花が飛んでる)

少女を見た紅貴はまず最初にそう思った。顔を赤らめ、にっこりと笑い、これ以上の幸せはない、というような雰囲気を出していた。少女の桃色の着物が余計にそれを際立たせている。しかも、真昼の明るい陽光が、少女を効果的に演出している。人によっては、こういう少女をかわいらしいというのかもしれないが、紅貴はこういう少女の対応の仕方を知らなかった。はつきり言ってしまうは苦手だった。

「駿様をお連れしました」

少女がそう言うと、部屋に一人の青年が入ってきた。

(たしかに、これじゃあもてるだろうなあ……)

紅貴は駿をみて妙に納得してしまった。背はすらりと高く、顔はどこか中性的な印象だった。筋が通った鼻も、涼やかな黒い瞳も、柔らかそうな唇も、男性にしては白い肌も、並の男にはないものだった。どちらかということ、細身の青年は、武官というより、文官といったほうが似合うような気もしたが、服はまぎれもなく麒麟のものであり、腰に大きめの剣があった。

「ここまで案内してくれてありがとう」

駿は爽やかに笑ってそう言うと、少女は、今にも卒倒しそうなように紅貴には感じられた。

「あの……あなたが駿様ですか？」

「そうだよ。俺の名は駿。ここで武官をやっているんだ」

「俺は、紅貴。俺にいったい何の用でしょうか？」

「ちよつと話をしてみたいと思ってね」

駿はそう言って笑った。

駿は、近くにあつた椅子を引き、そこに座る。しばらくの沈黙を楽しんだあと、駿は、静かに、さりげない感じで紅貴に話しかけた。

「その髪の色珍しいね」

「はい。よく言われます」

「翡翠にも言われた？」

駿は友人に話しかけるように、軽い調子で紅貴に話しかける。紅貴は、なんでもない様子で、それに答えた。

「はい。言われました」

駿は、会話を楽しんでいるそぶりです。笑顔で相槌を打つ。彼の中で考えを巡らせながら。

「あの、駿様は翡翠を知っているんですか？」

「知ってるよ。彼とは昔からの友人で、今は俺の上司だからね」

「上司ってことは、翡翠は本当に麒麟軍の將軍、二將軍なんですか？ 驚いている様子の紅貴に、駿は笑顔を作った。

「そうだよ。そういう紅貴君こそ、翡翠とは知り合いなの？」

「えっと……実は道に迷ってた俺を煌李宮に連れてきてくれたのは翡翠で……」

「そうか。あいつと一緒になんて、大変だっただろう。無愛想だし、冷たいし」

「友人の駿様に言うのもなんですが、それはもう……」

駿は、やっぱり自分の考えは合っていたと確信する。翡翠が紅貴を煌李宮に案内した理由は、おそらく自分の推測で合っているだろう。それを確認するために、駿は、態度を変えることなく、切り札とも呼べる言葉を使うことにした。

「紅貴君、君とは話が合いそうだね。翡翠は、ほんと、どうしようもないやつだよ。君とは良い友達になれそう。同じ友人として、駿様なんて呼ぶのやめてもらえるかな？ 俺、汐せき駿しゅんのことは、駿って呼んでよ」

駿はそう言って、爽やかに見える笑みを浮かべた。

「え……あ、はい」

駿には紅貴の動揺が手に取るようにわかった。何も知らない人間なら、駿の今の言葉に動揺する要素はないはずである。しかし、紅貴は動揺している。それは、おそらく、駿の姓『汐』に。しかし、『汐』の意味を知っている人物は限られている。紅貴が『汐』の意

味をしつているとすれば、やはり、予想は的中したということになるだろう。駿は話を続けた。

「ごめんね。驚かせちゃった。いきなり今日知り合つて、そんなこと言われても困るよね。しかも、『石』（いし）って書いてせきつて読む名字なんて変わってるんだし、それは驚くよね」

「そんなことないです。俺も新しく友人ができるなんて嬉しいです。紅貴の顔からは安堵の様子が窺われた。やはり、紅貴が驚いたのは『汐』という、姓にたいしてだったのだ。だとすれば、話したいことが駿にはあった。」

「紅貴君は、洸に行つ洸国を救うんだろう？」

駿は、真剣な様子に聞こえるように、少しだけ声の調子を変えた。「……なんでそれを知っているんですか？」

「仕事がらね。……あとで、龍孫様から聞くと思うけど、紅貴君に同行するのは、嘉国の二將軍、翡翠と、桃華ちゃん。それから、医者白琳、翡翠の妹の瑠璃ちゃんだよ。……いずれも俺の友人だ」

駿はそう言つて、少しだけ悲しげに見える表情を見せた。目線を少し下に下げる。駿は、自分の容姿がこつこつという場面出で役に立つことを知っていた。駿は静かな声で言葉を続ける。

「洸つて言つたら、生きて返れるかわからない場所らしいね。そこに行くとなると、みんな生きて返れるか……。翡翠も、桃華ちゃんも二將軍だし、王の勅命は絶対だけど、凜河の盟を破ることになる。それが洸に見つかれば、どんなに二人が強くて、どうなるかわからない。もしかしたら、その影響で嘉に大きな被害をもたらすかね」

「はい……」

「4人を送り出す友人、知人、家族もつらい思いをしているだろうねえ。実際俺もつらいしね」

駿はそういつて悲しげな笑みを見せる。

「官は王の命に逆らえないし、誰かが洸を救わなきゃいけない……！それはわかっているんだ……。でも、俺と、俺じゃなくても、

あいつらを洗に行かせるのはつらい。もしよかったら……王にした
願いを下げてもらえないかな……」

「駿……」

紅貴は、明らかに動揺が見える様子で駿を見た。

「ごめん！俺、なんてことを……今の言葉は忘れてくれ」

駿はそう言つて、賓客殿を去つて行つた。

駿が去つたあとも、紅貴の脳裏から、駿の悲しげな顔が離れなかつた。駿の言う通り、自分がやるうとしてしていることは、たくさんの人の悲しみを生む行為なのだ。駿のような思いをしているのは、駿一人ではないだろう。しかし……

紅貴は故郷を思い出す。このままいけば、故郷でたくさんの方が死ぬかもしれない。それに……。紅貴は自分の手を握つた。ある、かけがえのない人物が死んだ。それをとめられなかつた自分。それを償わなければならない。

時に、残酷な決断をしなければならぬ。それが、自分の置かれた立場なのだ。それができなくて、あのようなことになったのだから。

「駿悪い……。」

許してくれ、というつもりはない。時に非情な決断をし、何を最優先にするかを考えなければならぬ。それができなければ、もっと酷い事態が起こるかもしれないのだ。だとすれば、やるべきことは一つだった。

「せめて、洗をなんとかしよう……。まってるよ、聡翔」

紅貴は故郷で待つ人物に向かって、そう宣言した。

「お人が悪いですね。駿殿」

「お話聞いていたんですか？康亀様」

「気づいていたでしょう？」

「一応、武官やっていますから、人の気配には鋭いつもりです」

「あの少年には酷ですが、周りの悲しみや、苦しみ、そういうものを踏襲してまでも突き進まなければならぬ、そうですね？」

「優しいだけでは、無理ですからね。ごく、軽く試練を与えたまでです」

「名演技でしたね」

駿は、くすりと笑みを浮かべる。

「たまには『汐家』の仕事をしないと、罰があたりますから」

そう言って、汐 駿は、いつもどおりの麒麟の仕事に戻って行った

第一章 北の青い空 8

「きや〜！」

煌李宮のとある一室、ガタガタという音とともに、少女の甲高い悲鳴が上がった。ちょうど部屋の外の回廊では、宮中に勤める数人の女官が掃除をしているところだったが、女官たちが驚いた様子はない。

「またですね」

「まだ前回の雪崩から一日しかたっていないのに……」

「鳳華様ったら相変わらず困った方ですわ」

「私、様子を見てきます」

一人の少女がやれやれというように桃華の部屋に向かった。

「いった〜い！」

桃華の部屋では、宮中ではなかなか見ることができない光景が広がっていた。床には大量の巻物と、ぬいぐるみがばらまかれ、本来見えるはずの床が見えなくなっている。本来巻物が入っているはずの黒い漆でできた書棚には、なぜか巻物ではなく、飲みかけのお茶が入った湯のみが置かれている。そんな部屋の中心……床の上というよりは、巻物でできた小山の上に、この部屋の主、桃華は座っていた。

「桃華様大丈夫ですか？」

部屋に入ってきた女官の少女を見た桃華は、へらりと笑う。

「うん、大丈夫」

「ところで、さっきの物音どうしたんですか？」

「なんかね〜、探し物したら物が降ってきたの」

女官の少女は首をかしげる。

「探し物をしていて、どうしてこうなるんですか？」

「わかんないけど、普通に探し物したら、巻物がたくさん落ちて

きたの」

「そうですか。ところで、その探し物見つかったんですか？」

桃華は首を横に振る。それをみた女官の少女は桃華に優しく微笑みかけた。

「わかりました。私も探し物を手伝います。でも、まずは、ここを片づけないと探し物は見つからないと思いますよ。ですから、まずは片づけてから探しましょう」

「でも、片づけなんてしてまにあうかなあ……」

桃華は床を見てうつむく。

「どういふことですか？」

「あのね、午後に、翡翠が実家から帰ってくるから、帰って着次第話し合いんだけど、その探し物ね、翡翠からの借り物で、その話し合いで使うの……」

「探し物って翡翠様からの借り物なんですか……！？それ、見つからないと翡翠様に怒られますよ！」

「うん……どうしよう！可憐」

桃華はそう言って、自分の桃色の着物を握る。可憐と呼ばれた女官の少女は、桃華のほうを見て、少し早口で言う。

「桃華様、落ち着いてください。片付ければ必ず見つかりますから。その、翡翠様からの借り物っていったいどういったものなんですか？」

「あのね、巻物」

「巻物ですか！？」

可憐は桃華の部屋を見渡した。そこにあるのは、大量の巻物だ。

「桃華様、巻物に特徴とかないんですか？」

「え〜と……とにかく深い緑色で、内容は弄国正史と、弄と嘉の盟約についての写し。全部翡翠が書いたやつだから、筆跡は翡翠のだよ」

「わかりました。片付けながら探してみます」

数十分後、可憐に、部屋の隅で、動かないように言われた桃華は隅で、猫の縫いぐるみを抱いて座っていた。暇を持て余した桃華は、可憐に話しかける。

「ねえ、可憐、紅貴って知ってる？」

「紅貴殿って、赤い髪の方ですか？知っているも何も、今、私が紅貴殿の身の回りのお世話をしているんですよ。そしたら昨日、それがきっかけで駿様に会えたんです……！あの、素敵な笑顔……！堪りませんわ……！」

「駿かあ。なんであんなに人気あるんだろうねえ。たしかに顔はカッコいいのかもしれないけど、え〜と、私にとっては良いお兄ちゃんのようなものだけど、駿性格悪いでしょう。なんで人気あるの〜？」

桃華は猫の縫いぐるみの手をふにやふにやと動かしながら、なんでもないことのように可憐に話しかけた。可憐はといえば、信じられないというように、驚いた様子で 桃華を見る。

「桃華様！駿様は性格悪くありません！きっと、優しくって、頼りになる方です！そうじゃなきゃ、あんな素敵な笑顔が似合うわけがありませんわ」

「素敵な笑顔、か。なんか友達の可憐がそういうこと言っと、やだな〜。なんか可憐が騙されているみたいで」

「駿様は人を騙したりはしません！……ところで、話変わりますが、紅貴殿っていったいどういう方なんですか？紅貴殿に直接聞いてもあんまり詳しいことを教えてくれないんです……。桃華様知ってますか？」

「紅貴は、洸国の難民だよ〜」

可憐は、種類別に巻物を分ける手を止め、桃華の方を見た。

「洸って、あの洸ですか？」

桃華は頷いた。

「ずいぶん遠くからいらしゃったんですね。長旅をしてきたとは聞いていましたけど予想以上ですわ」

洸国と言えば、双龍国の最北部に位置する国だ。南の嘉からみれば確かに遠い。

「ところで、なんか、こうして何もしないの悪いし、私に手伝えることない？」

「いいです！桃華様はそこで大人しくしててください！」「可憐はそういうと、再び部屋の片づけをはじめてしまった。

「あ、深緑の巻物一つ見つかりましたよ。中身確認してみてください」「い」

桃華は可憐から受け取った巻物を開く。書道の手本のような見事な達筆は間違いない。翡翠の筆跡だ。桃華が、翡翠を尊敬する唯一の部分だったため、間違えようがなかった。

「可憐、ありがとう！これで間違いないわ！」

「よかったですわ」

「私、今から話し合い行ってくるね。ここの片づけ可憐にお願いして良い？」

可憐はにっこりと笑った。

「おまかせください。桃華様が戻る頃には見違えるように綺麗にしてみせます」

「後で遥玄ようげんの所いってこようっと」

部屋を出た桃華は鳳軍で一番信賴置ける部下の名前をつぶやいた。

煌李宮の内廷の西の一室。桜の模様が彫られた茶色の扉を開くと、円卓を囲んで四人の男が座っていた。お茶を飲んでいたのか、部屋には香ばしいお茶の香りが広がっている。

「桃華、普通のお茶で良いかね？」

「うん。龍孫様ありがとう」

龍孫は、いつものように柔らかい笑顔を浮かべると、ひとつあいていた席の椅子を引いた。桃華が椅子に座ると、慣れた手つきで桃色の湯のみにお茶を注ぎ、桃華の目の前に置いた。

「翡翠、これ」

桃華はにつこりと笑い、たまたま横に座っていた翡翠に巻物を渡した。

「……埃まみれになってないか？」

「そ、そんなことないよ」

翡翠はため息をつく、巻物を円卓の上に置いた。

「おや、麒麟様、女の子に冷たい態度取っているともてませんよ？」

桃華の正面に座る、少し長めの髪を後ろでお団子にした中年の男はくすりと笑って言った。

「俺には関係ない話だ」

翡翠はそう言って表情を変えずにお茶を飲む。

「つれないですねえ。そうそう、私の娘の噂知ってますか？」

中年の、医者証である白い衣を身にまとった男は笑みを浮かべたまま続けた。

「白琳の噂？圭貴様、教えて」

桃華は、話の続きを、白琳の父親に促した。圭貴は、桃華にむかってにこりと微笑むと、話を始めた。

「看護師や、女官、はたまた官吏……煌李宮中の人々が噂しているのを聞いたのですがね、私の娘、白琳と、麒麟の若き天才、駿殿ができていますよ」

圭貴は、そういうとおもしろそうに笑った。桃華はちらりと翡翠の方を見たが、相変わらず表情を変えずにお茶を飲み続けていた。

「その噂なら私も聞いたことがある。宮中どころか、李京中で噂になっているよ。まあ、それでも駿殿と、白琳殿が好きな方は相変わらず多いようだけど」

康莉が圭貴に続いた。

「へえ、知らなかった。見た目はすごいお似合いで、すつごく絵になる二人だね。おとぎ話の皇子様とお姫さまみたい」

桃華はそういって翡翠にほほ笑みかけるが翡翠は、何も言わずにお茶を飲み続けている。

「そういえば、鳳華様は、国境の様子を見にいつて二週間ほど煌李宮を留守にしておりましたし、麒麟様は、花祭りのあとすぐに弄国に行きましたからお二人ともご存じないんですね。なんでも、私の娘と駿殿はその間に、頻繁に会って仲を深めていたそうなので、二人の仲睦まじい姿がいたるところで目撃されていたそうですよ。父親の私としても、あの、駿殿なら安心です。腕も立ち、頭脳明晰、後輩の面倒見も良く、駄目な上司……おっと失礼しました。尊敬する上司の後始末……失礼、右手となって働いている。あんなに出来た方の嫁になってくれれば父親としても幸せです」

桃華が再び、翡翠の方をちらりと見ると、今度は湯のみを円卓に置いてため息をついていた。そして、翡翠が口を開く。

「とりあえず、くだらない話は後だ。本題に入ろう」

「そうですね。私の娘の自慢話はまたあとで。弄国はどうでした？」

「結構まずいかもしれない」

「まずい……？ いったいどういふことかな？」

王は怪訝そうに翡翠のほうを見る。

「確認するまでもないが、嘉は弄国に防衛のための兵を貸し出している。嘉はその代わりに弄国から軽玉を輸入しているが……」

翡翠はここでいったん言葉を切り、お茶を飲んだ。桃華は、自分の頭の中にある常識を思い出す。恵玉とは透明な石だが、特定の場所でしか取れない。その貴重な石は、特殊な加工を施せば、いかなる硬さにも調節ができ、いかなる形にも変化することができる。弄国は、そんな貴重な軽玉の産出地だ。貴重な玉を所有することは恵まれていたことではあるが、同時に波乱を呼び起こす可能性もあった。国同士の公正な取引ではなく、他国の侵入という、一方的な形で弄国が支配される可能性もあるのだ。弄国は元々、兵力が少ない。軽玉が取れるその土地は、聖域のような意味を持っており、もともとは神官が建てた国、戦いは厳禁だったというのがその原因だった。とはいっても、このご時世、そうも言ってもらえない。しかし、弄国が兵力を持つとすると、ひとつ問題があった。突然兵力をもった

ならば、戦争を仕掛けようとしているとし、それを理由に弄に攻め入る可能性がある国があった。北の大国、洸だ。嘉は、そんな弄を守るために、嘉の武人を弄に派遣しているのだ。嘉と洸の間には凜河の盟がある。数百年前、嘉と洸が戦争している時代、嘉は劣性だった。時の嘉の国主、要王は何かと引き換えに、国境を定め、互いに干渉しないことを洸に約束させた。これが凜河の盟である。この盟約がある以上、洸は嘉の兵に手出しができないのだ。

「弄国が、兵を増やして欲しいと言ってきた」

「なんか嫌な感じだな」

「しかもだ、一緒に行った文官のやつによると、弄が提示した軽玉の計算が合わないらしい」

「どういうこと〜?」

「軽玉っていうのは、弄国の特定の土に埋めると、増える。弄でその年取れた軽玉のうち、3割は再び土に埋めて、2割が嘉にもらえることになっている。普通に考えれば年々嘉がもらえる軽玉は増えていくはずだ。実際今までは、軽玉の量が年々増えてきていた。だが、今年提示された軽玉の量は去年よりも少ない。いやな予感がする」

「他国に脅されて、軽玉がとられてたりしてな」

康莉が腕を組んだまま静かにいった。

「それとも、弄が危ないって言うことを弄自身が知らせたくて、そう言ってるのかもよ」

「どちらにしても、もっと細かく調べてから弄国と約束するべきだろうな。で、二將軍に、弄国を調べる許可を王にもらおうとしたら、そのどこぞの王は俺たちにめちゃくちな命令をして、それができなくなった」

桃華、康莉、圭貴の三人は笑った。王は、少し気まずそうに咳払いをする。

「仕方ないだろう。紅貴があまりにも必死だったんだから」

「……で、とりあえずその役を駿と遥玄あたりに頼もうと思ってる

「何か問題あるか」

「ないよ〜」

「ないな」

「良いと思いますよ」

翡翠は、同意する桃華、康莉、圭貴の答えを聞くと、王の方を見た。

「駿と、遥玄には私から話しておこう」

「あと、圭貴様にお願いががあります」

圭貴はにやつと笑うと、口を開く。

「だいたい察しがつきます。軽玉をうまく調整して使い、もし軽玉がたりなくて、嘉の医者騒ぎでしたら、黙らせてほしいんですね？」

「はい」

嘉では、軽玉を、主に医療の現場で使っている。様々な硬さ、形に変化できるそれは、注射、あるいは点滴などに形を変える。しかし、弄との約束が保留になった今、その軽玉が足りなくなる可能性があった。白琳の父親、壮 圭貴は煌李宮で医学を司る、典薬寮の長だった。実質、嘉国の医者 の 頂 点 に 君 臨 して いる と い っ て も 良 い。策はあるのでご安心ください」

「それにしても双龍国は荒れてるな。弄国も怪しい、津と烽は相変わらず争っている。恵は何考えているかわからないし、洸からはくそ餓鬼がくる。…… 嘉の緩さが異常なのかもな。まあ

難民の問題はあるが」

そう、淡々という翡翠にたいし、桃華はにっこりと笑って言う。

「嘉もそんなに平和じゃないかもよ〜？もしかしたら、目的はわからないけど、煌李宮にどこかの間諜が紛れ込んでるかもしれないし、でも対策は打ったわ」

「お前のその言い方は、予想じゃなくて、確信だろう。誰だ？……いや、予想はつくが……」

「翡翠が予想付いてるんならそれで多分正解でしょう。大丈夫。遥

玄にお願いしてきたから」

「それ、お前は何もやってないじゃないか」

翡翠はため息をついて言った。

「だってわたし、こういうの向かないもん。で、話し合いはもう終わり？ 終わりなら、明日に備えてお昼寝するから、私は部屋戻る」

桃華はそういって席を立った。周囲の大人は呆れた様子で桃華を見ていたが、桃華は軽やかに笑っただけだった。

第一章 北の青い空 9

まだ夜明け前だった。春とはいえ、夜明け前の風は、さすがにまだ肌寒い。しかも、港のそばに腰かけているとあつては尚更だ。駿は、冷たくなった手を口の前にそつと当てると、温かい息を吐いた。ほんの少ししか温かくはならなかったが、こういう時間を、駿は嫌つてはいなかった。愛しい女性を待つ時間は、彼にしては珍しく、『素』の自分でいられる時なのだから。

「こんな時間にごめんね。待たせちゃった？」

瑠璃の温かい手が、駿の肩にふれた。

「大丈夫だよ。俺がこんな時間しかあいてないのがいけないんだから。……瑠璃ちゃん、夜が明けたら洗に発つちゃうのに」

駿はそう言つて柔らかい笑顔を作つた。瑠璃の蒼い瞳が駿を見つめる。駿には、その瞳に一切濁りはないように感じられた。

「あの、……私、どうしてもやりたいたことがあつて洗に行つてくるから……でも、どうしても駿にはお別れを言いたくて……」

瑠璃はそついうと目を下げた。濁りのない瞳は、しかし、どこか悲しげだった。

「そんな悲しそうな顔しないで。戻つてくるんだろ？ここに」
駿がにこりと笑つと、瑠璃はこくりと頷く。　　そう頷いたもの

の、瑠璃はどこか不安そつなように駿には感じられた。駿は、右手で瑠璃の肩を抱き寄せた。その、細い肩が、愛おしい。

「大丈夫。瑠璃ちゃんは絶対ここに帰つてくるから。やらなきゃいけないことをやって、ここに帰つてくるのを俺待ってるし」

「うん、ありがとう。でもね、私、それもそつなんだけど、単純に駿とはなれちゃうのが寂しいなあつて思つて……。自分で行くつてきめたのに、駄目ね」

瑠璃はそう言つて笑つた。駿にとっては意外な言葉だった。しかし、しばらくして気づく。自分にとって、その言葉……その瑠璃の

純粹さが、たまらなく愛おしいということに。駿が知っている限り、瑠璃は一番純粹な女性だった。世間でそう思われているかは分らないが、瑠璃は心が綺麗な女性だと、駿は思う。そして、それは自分にはないものだ。もしかしたら、そこに惹かれたのかもしれない。昔からの癖なのか、職業柄なのか、いつも物事を計算していた。目的のためには手段を選ばず、時と場所によって、性格を変え、人を利用する。それが駿の日常だ。幸か不幸か、それが完璧にできてしまうのだ。そんな駿にとって、真っ直ぐな心を持つ瑠璃はかけがえない存在だ。

「そんな風にいつてくれてありがとう」

駿は思わず小声でぽつりとつぶやいた。その声が瑠璃耳に届いたかは駿には分らなかった。

「私、絶対戻ってくるから、だから……駿、ここで待っていてくれる？」

駿は、いつもどおりの笑顔を作って言う。

「もちろん待ってるよ。だから、瑠璃ちゃんは、……いざとなったら翡翠を盾にしても無事戻ってきてね。大丈夫、翡翠なら盾にしても死なないから」

それを聞いた瑠璃は声をあげて笑った。

「わかった。いざ、敵がおそってきたら翡翠を盾に逃げるわ」

「……夜が明けるね。もうそろそろ時間かな？」

「そうね。そろそろ行かなきゃいけないわ。李外門でみんなと待ち合わせしてるの。……駿、最後に私と会ってくれてありがとう」

「お礼を言うのは俺のほうだよ。俺のほうこそ会ってくれてありがとう」

駿はそう言っただけ綺麗な笑顔を作って笑った。

瑠璃が去った後も、駿はしばらくその場で座っていた。月が隠れ、地平線の彼方から朝日がのぞいている。

「翡翠の奴……瑠璃ちゃんを死なせたら殺してやるからな……」

それから駿は軽く眼を閉じて心の中でつぶやく。

(ごめんね……瑠璃ちゃん)

このとき、謝罪の意図を知るのは駿自身だけだった。

クシユン

「翡翠、風邪？」

くしゃみの音を聞いた紅貴は翡翠を見上げた。

「いや」

「誰か翡翠の噂でもしてるのかな」

「さあな」

翡翠はそう言っただけで肩をすくめた。紅貴は李外門の内方を見た。李外門を出たすぐ横の検問所で、旅の仲間と合流することになっているのだが、まだ紅貴と翡翠しかきていない。人が来る気配もなかった。

「ほかの人たちまだかなあ。俺、眠いよ」

紅貴は目をこする。寝坊しそうになったところを、女官の少女に無理やりたたき起こされた紅貴は、まだ完全には目が覚めていなかったのだ。

「そうだ、その黒天馬触っていいか？」

「やめておけ。こいつは初対面のやつに触られると噛む癖がある」

「噛むって……犬や猫じゃないのに!？」

「飼い主ににってるんじゃないかな」

気配はなかった。しかし、そこにはいつの間にか白い天馬を引き連れた桃華がいた。

「桃華いつの間になら!? 気配なかったぞ」

桃華はにっこり笑う。

「今来たの。それより、さわるならこの子触ってあげて。天テンって言うんだよ。かわいいでしょう?」

紅貴は、天テンと呼ばれた白い天馬をみる。普通の天馬より小さく、仔馬と同じくらいの大きさだ。羽は、やわらかそうで、風が吹

くと、毛がフワフワとなびいていた。紅貴をみつめるまん丸の瞳は、水色をしており、とても愛くるしい表情をしている。紅貴は天テンを触った。普通の馬より柔らかい毛並みをしている。触られるのが嬉しいのか、天テンは、気持ち良さそうにしていた。

「わあ〜！すっげ〜！こいつ、かわいいな！俺の……もこれぐらいかわいいければ良いのに」

「あれ、紅貴も何か飼ってるの？もしかして、翡翠の天馬の横にいる茶色のお馬さんは、借りものじゃなくて紅貴のやつ？」

「あ、いや、あれは、龍孫様から借りたやつなんだ。なんでも、この国の皇太子様の馬らしいんだけど、皇太子様は天馬を持つてるから、馬を貸しても問題ないだろうって。よく躰けてあるから、しっかり乗せてくれるんだってさ」

「そっか〜それなら安心だね〜」

紅貴が桃華と会話していると、李外門の内側から、馬の足音が聞こえてきた。足音の方向をみると、茶色い馬と、白い馬が近づいてきている。

「瑠璃〜白琳〜おはよう！」

桃華が嬉しそうに挨拶をすると、馬に乗っていた、瑠璃、白琳と呼ばれた女が降りてきた。

「おはよう桃華」

綺麗な蒼い瞳をもつ女が、眠気を一切感じさせないはっきりとした声で言った。

「おはようございます。桃華様。昨日はよく眠れました？」

絶世、といっても差支えがないほどの綺麗な女性が、自分の白馬をなでながら、やさしい声で言った。桃華はにっこりと笑った。

「うん、たくさん寝たよ〜。あのね、横にいるのは紅貴。たぶん白琳瑠璃も会ったことないでしょう？」

「はい。はじめて会います」

白琳はそういうと、目線を紅貴に合わせる。背が高い白琳は、腰を少し折ると、ちょうど紅貴と同じくらいの目の高さになった。

「私は、壮 白琳です。よろしく願います」

そう言って上品に笑う白琳を直視してしまった紅貴は、自分の顔が火照るのを感じる。

「あら、紅貴っていったけ？もしかして白琳に惚れた？」

紅貴のほうを見た、透き通った海のような綺麗な蒼い瞳をもつ女は笑いながら言った。どうやら、見た目通りの明るい性格らしかった。

「そんなんじゃないよ……ただ、あまりにも綺麗だったからつい。

それに、白琳さんみたいな綺麗な人には当然彼氏がいるんだろうし、俺なんかじゃ全然……って、俺何言ってるんだろう」

「あら、私、彼氏なんかいませんわ。特に気になっている方もいませんし」

白琳は先ほどまでの柔らかい口調とは一変、きっぱりと言った。

「どちらにしても、ただの迷子の紅貴じゃあ、役不足だろう」

翡翠が、腕をくんだまま淡々とした口調で言う。

「だから、そんなじゃなくて、ただ、白琳は綺麗だな、って思っただけだって」

「まあ、白琳は綺麗だからしかたないよね。私も初めて会ったとき、びっくりしたし。あ、私の名前は芳 瑠璃。一応、馬鹿兄芳 翡翠の妹。白琳と桃華とは友達だよ」

駿という青年に瑠璃が翡翠の妹だとは聞いていたが、改めて二人を見比べると、似ていない兄妹だと紅貴は思った。どちらも美形なものにはかわらないが、切れ長な瞳を持つ、どこか近づきたい印象の翡翠に対し、大きな瞳を持つ瑠璃は、明るく、親しみやすい印象だった。性格の方も、無口で無愛想な翡翠とは違い、瑠璃はよく笑う明るい性格のようだった。

「全員そろったところで、これからの目的地について話したい。洗にむかう道筋だが、まず李仙道を通って、嘉国と恵国の国境の街、明陽に向かつて、恵国に向かう。そのあとのことは桃華が知っているらしいから、桃華についていけば洗に着くはずだ」

「うん、その後は私についてきて〜。ちよつと大変な道だけど、私と翡翠がいるから仕方ないよね〜。ごめんね」

「それから、その途中、嘉の北の都市、慶で、ちよつと時間が欲しい。王に命令されてな、『星の皇子様』に会わなきゃならないらしいんだ」

「……星の皇子様って誰？」

紅貴が感じた疑問を、紅貴に代わり、瑠璃が翡翠に質問した。

「星の皇子様は星の皇子様だ。王が考えた別名みただな……。ふざけた別名の割に、知ってればその別名だけで、すぐそれが何者かわかる。今本名を明かすわけにはいかないが、会えばわかるから安心しろ」

「うん、わりとそのままだよ。星の皇子様」

「桃華も知ってるの？」

紅貴がたずねると、桃華はこくりと頷く。

「星の皇子様とは仲が良いお友達だよ〜」

「じゃあ、簡単に説明したところで、さっそく出発だ」

翡翠はそういうと、天馬にまたがろうとしたが、紅貴は翡翠の服の裾をひばった。

「ちよつと待つて！出発する前にみんなに言わなきゃいけないことがあるんだ」

他の4人からの視線を、紅貴は感じる。冷めた感じの目で、紅貴を見る翡翠。少し不思議そうな目で見る瑠璃と白琳。興味津津、といった感じで見る桃華。四人の視線が集まり、心臓がすこしどきりとしたが、これだけは言わなければ気が済まなかった。

「こんな大変なことに巻き込んでごめん！……でも、俺どうしても、洗を救わなきゃいけないんだ！だから……よろしくお願いします！」

紅貴は頭を下げる。

穏やかだった風が、急に強くなった。

何か、ただならぬものがそこで生まれたことを紅貴はきづいてい

ただらうか

一瞬、沈黙が包んだが、それを破ったのは桃華のいつも通りの明るい声だった。

「紅貴く顔あげてよ」

紅貴が顔をあげると、桃華がにっこりと笑っていた。

「自分が生まれ育った所助けたいなんて当たり前だよ」

確かに、そうなのかもしれない。しかし、現実的にそれをやるうとするのは大変なことだと、紅貴は知っていた。それを当たり前だという桃華の言葉が心強かった。

「ありがとう」

「私にできることなんて少ないかもしれませんが、お手伝いしますから、大丈夫ですよ」

白琳は優しい笑顔で言う。

「国が大変なことになって、それを救おうとして実際に動くなんて、かっこいいじゃない！私は手伝いしかできないけど、やれることはなんでもやるわ」

「白琳：瑠璃：今日会ったばかりなのにありがとう」

「……礼を言うのは少しはやいんじゃないか？俺たちはまだ何もやっていない。お前がやるうとして無謀なことだ」

翡翠は腕を組んだまま抑揚のない口調で言った。紅貴はこくりと頷く。

「じゃあ、今度こそ洗に出発しよう」

五人はそれぞれ馬にまたがった。馬の背の上で、紅貴は心の中でもう一度、他の四人に礼を言った。

「庚莉、清熾せいし私はずるいのではないだろうか」

王の私室には、三人の人影。龍孫と、康莉、そして龍孫の、唯一にして最愛の王妃清熾だ。

「私は、結局王として、国のためではなく、ただの私情……今は亡

き親友の為にあの四人を紅貴と共に行かせただけなのではないだろうか」

龍孫は自分の拳をぎゅっと握った。

「…… 龍孫様は王として適切な判断をされていると思いますが。あの任に適任なのは、どう考えても麒麟と鳳華です。そして、白琳。瑠璃殿には瑠璃殿の役割がある。洗を救うことは私情だと思いませんし、王として適切な判断だと思いますよ。そして、それに適しているのはやはりあの四人です。翡翠と桃華を二將軍にしたのもあの二人の力を見込んでのこと」

康莉はきっぱりとした口調で言った。

龍孫は静かに頷く。

「龍孫様、あなたは王として適切な判断をしたと思います。自信を持ってください」

龍孫が黙っていると、王妃、清織が、部屋中に聞こえる音でため息をついた。

「まったく。何くだらないことで悩んでるのよ。たまたま下した、『王としての』判断が自分のこうなってほしいっていう『私情』と重なってなやむなんて、馬鹿みたい。重なって運が良かったってぐらいに思わなきゃ」

「清織様の言うとおりでですよ。清織様はいつもの的確なおっしゃいますね」

康莉は、微かに笑いながらそう言った。

「当たり前でしょ。何年この人の妻やってると思ってるのよ。まったく、こんなことで悩むなんて大した王よね」

清織は、座っていた椅子から立ち上がると、龍孫の横に立った。

「悩むなどは言わないけど、もっと自信もったら？…… 嘉国は良い国よ。あ、そうそう、あの四人をもっと信頼してあげたら、もっと最高よ」

清織は龍孫のほうを向くと、鮮やかな笑みを浮かべた。その笑顔を見た龍孫は思わず吹き出してしまふ。

「清熾と話していると悩みなんて吹っ飛んでしまっね」

「だって龍孫が暗い顔しているところなんて見たくないもの」
まるでなんでもないことのように、そう言う清熾を見た龍孫は温かいまなざしを向けた。

「ありがとう。……さて、私は外の空気でも吸ってこようかな」

「清熾様さすがですね」

本当に感心したようにいう康莉に、清熾は笑った。

「さすがも何も、私はあの人をちよつと励ましただけよ。……龍孫は、王だし、国を背負うつていうの、並大抵の覚悟じゃできないと思うわ。それが出来て、しかも世間では賢君なんていわれてる龍孫は、やっぱりタダ者じゃないんでしょ。でも、それでも龍孫は、人なんだし、悩んだりもするわ。人である以上、その悩みを聞いて、激励したりするのは当然でしょう」

「そうですね」

「龍孫は王だし、しかも賢君なんであれば誰もがそういう目でみるのは当たり前だと思うわ。でも、一番近くにいる私たちは王の龍孫つてだけじゃなくて、かけがえのない人の龍孫として、支えなやいけないと思うの。実際、好きな人がつらい思いするのは見ていてつらいしね」

龍孫は、煌李宮の中庭にいた。日は昇っている。あの四人、

それから今は亡き親友にとつてのかけがいのない人物は、もう李京を発っているはずだ。龍孫は北の空を見た。かの五人が向う方角の空は、綺麗な青空だった。五人が向かう道は、想像を絶するほど険しいものかもしれない。この澄み切った青い空のような綺麗な道では、決してないだろう。でも、最終的には、この空のように、綺麗な場所にたどり着けるように、五人が無事であるようにと、雲ひとつない澄んだ天空に、嘉国王、龍孫は祈った。

第二章 旅の始まり 1

李外門を出た先も、石畳は続いている。辺りは、朝も早く人通りが少なかつた。5頭分の馬の足音が石畳に響いているだけで、辺りは静かだ。紅貴の前には、翡翠、白琳、瑠璃があり、紅貴はその後を付いて行っていた。紅貴のうしろには桃華がいる。ちらっと後ろをみると、桃華に先ほどまでの元気な様子はなく、手綱を片手に、眠そうに眼をこすっていた。

「おい、桃華、大丈夫か？」

きちんと手綱は操っているものの、眠そうな桃華の様子を心配に思った紅貴は声をかける。

「うん〜だいじょうぶ〜眠いの〜」
キュン……

桃華がそういうと、天馬の天テンは心配そうに鳴き声を上げた。その時だった。紅貴がのっていた馬が急に立ち止った。急に止まったため、落馬しそうになった紅貴だったが、なんとかこらえる。もしかしたら、よく躡けてあるという、皇太子の馬がうまく支えてくれたのかもしれない。前を見ると、翡翠、白琳、瑠璃も止まっていた。ちょうど見張り台へ差し掛かるうという場所だ。

「ちよつと翡翠！急にとまるなんてどういうこと？」

どうやら、止まった原因は、先頭を走っていた翡翠にあるらしいかった。

「嫌な予感がする」

瑠璃に聞かれた翡翠は、見張り台の二階を睨むと、ぼそりと呟いた。やがて、天テンから降りた桃華もやってきた。いつものにこやかな表情で、先ほどまでの眠そうな様子はない。

「みんな急にたちどまってどうしたの？」

にっこりと笑って桃華がいうと、白琳が答えた

「みなさんを置いていこうかという勢いで走っていた翡翠様でした

のに、嫌な予感がすると急にとまったんです」

「ふ〜ん。いやな予感かあ。……。確かにするね〜」

何気ない口調で言う桃華だが、眼だけは翡翠同様に鋭かった。李外門と、李仙道のあいだのこの路には、二階建ての見張り台がある。一階は、人が通り抜けられるようになっており、二階は普段であれば、兵士が見張りをしている。桃華と翡翠はその二階を睨みつけていた。

翡翠は、何も言わずに見張り台へ向かって歩き出した。紅貴たちもあわてて追いかけた。

見張り台の階段を昇りきろつかとこのところだった。先頭を歩いていた翡翠が急に立ち止まった。

「ちよつとどうした……!?!」

最後まで言う前に、翡翠のすぐ後ろについていた紅貴は何が起きているか気づいた。翡翠の目の前に、一人の、中年の兵士が立っている。兵士が持つ刀の先は、翡翠の首の横に当てられていた。嘉国の兵士らしい男は、眼で威圧しているように感じる。紅貴に向けられた物ではなく、前をにている翡翠に向けられているものだとは解っていたが、兵士の氷のように冷たい黒い瞳に、紅貴は震えそうになった。

「ここに何の用だ。貴様が戦いに身を置くものであるというのは、見ればわかる。あれが貴様の仕業だというのなら、俺が相手をするから覚悟をしろ!」

兵士の激しくまくしたてるような声に、思わず紅貴がびくりとする。しかし、言われた当の翡翠は、わざとらしく大きなため息を吐いただけだった。

「貴様、いったい何を考えている!」

「何か誤解していないか。俺たちは、ただここを通りかかっただけにすぎない。嫌な予感がしたから様子を見に来た」

「信じられるか!貴様がどんな事情で来ようと怪しすぎるお前を通

すわけにはいかない！さつさと引け！」

「わかった。それなら、武器をあずけるからそこを通せ。……何かあつたんだろう？」

翡翠のその言葉に、兵士が驚いたように紅貴には感じられた。

「一般の方を巻き込むわけには……」

兵士は、力なく刀を下ろす。先ほどまでとは一変した兵士の態度に、紅貴は驚いたが、当然の反応なのかもしれない。翡翠は、もう一度ため息をつき、言う。

「気にするな。今は休暇中だが、これでも一応、嘉の兵の端くれだし付け、見張り台の二階に押し入った。紅貴は、なんとなく申し訳なく思え、呆然としている兵士に軽く頭を下げた。白琳、瑠璃、桃華も後ろからついてきた。紅貴は目の前の光景に唾然とする。一人の男が、倒れていたのだ。男は全身を包帯が巻かれていたが、かすかに、その包帯が赤く染まっているところがあつた。その横で座っている若い兵士の手には包帯が握られた。倒れている男の応急処置をしていたのだろう。座っている兵士は、驚いた様子で、紅貴を見た。

「あなた方は……？」

紅貴が答えに困っていると、瑠璃が代わりに答えた。

「緑の目の人、うちの馬鹿兄なんですけど、馬鹿兄が嫌な予感がするとか言い出して、急にこちらに押し掛ける形になってしまったんです。お騒がせしてごめんなさい。ところで、これはいったい何があつたんですか？」

「実は私にもさっぱり……。私の役目はこの見張り台での見張りなのです。昨晚から、朝までが私の担当でしたので、仕事をしていました。そしたら、今は気絶しているこの男……多分、服装からして文官だと思つのですが、血だらけでここにやってきて倒れたんです。とぎれとぎれの声でしたが、覆面の男にやられた……って言っていてとりあえず俺は応急処置をして、孝雅様は、李京に知らせ鳥をだそ

うとしたのですが……」

孝雅と呼ばれた男。先ほど、翡翠を威圧していた、中年の兵士が静かに口を開いた。

「鳥かごを見たところ、知らせ鳥は絶命していたのです。怪我はなく、息だけしていなかったところをみると、恐らく毒のせいかと」

知らせ鳥とは、虹色の羽をもつ鳥だった。瞳の色は鳥により異なる、とても綺麗な鳥だ。その美しい鳥は、洞察力、嗅覚、視力、記憶力にすぐれ、人の言葉も理解すると言われていた。一度行ったことがある場所であれば、迷わずにたどり着くという習性を生かし、嘉では、主に伝令に使われていた。知らせ鳥は、能力が高いのと同じ時に、気位が高いという。そんな知らせ鳥を使うのは、一般人にとつては難しいことだったが、嘉の兵であればつかえて当然だということのを、紅貴は聞いたことがあった。

「一刻も早く都に知らせなければなりませんし、応急処置しかしておりませんので、この方を医者にも見せなきゃいけません。見張りを孝雅様にお任せして、私はこの方を連れて、馬に乗ろうとしたのですが、馬が逃がされていて……。おぶつて李に行こうと思ひ、その準備をしていたところに、あなた方がきたのです」

「様子をみにきてくださつたというのに、先ほどはあのような無礼な態度、失礼いたしました。兵たるもの、嘉国の民のためにはあらなければなりません。それなのに私は、とり乱してしまい……。」

孝雅はそういって、膝を折って頭を下げた。その姿がある人物の姿と重なる。……兵士たるもの、洗のためにあの方をお守りしなければならなかったのに……。紅貴が茫然としていると、瑠璃が言う。

「孝雅様、顔を上げてください。もとはと言えば、突然押し掛けた私たち、というより、あの馬鹿兄が行けないんです。ちよつと、その馬鹿兄、話聞いているの？謝りなさいよ」

瑠璃がそう言ったのをきいた紅貴が、翡翠のほうを見た。倒れている文官の横に翡翠は座っていた。その横には、白琳が立っている。

「こいつ、漣じゃないか」

翡翠が小声でつぶやくと、白琳もうなずく。

「漣さんですね」

「白琳、この人のこと知ってるの？」

瑠璃がそういうと、白琳はうなずいた。

「私たち三人、同じ年ですし、同じ寺子屋でしたから」

嘉国には義務教育という物があるという。9歳から12歳までの三年間、寺子屋と言われる学校に行き、学問を学ぶ。その後は、各種の専門の学校、家業を継ぐものなど、様々だという。

「あ、あの、あなたは白琳様ですか？」

応急処置をしていた男は、驚いた様子で言う。紅貴がそれを不思議に思っていると、それに気付いたのか、瑠璃が紅貴に話しかけていた。

「友達だからつい忘れちゃうんだけどね、白琳は、壮家っていう、医者のお嬢様だし、その中でもとび抜けた医療技術をもっているの。だから、都で白琳を知らない人はいないっていうわけ」

紅貴は言われて気づく。考えてみれば当然のことだった。紅貴は王に、癒しの力をつかえる人物の同行をお願いしたのだ。白琳がそうだとすれば、有名なのは当然だった。しかも、あの美貌に家柄が加われれば、その名を知られていないほうが不自然だった。

「なんか、みんなすごいんだね……」

翡翠や桃華は、あんな性格でも言わずと知れた、武官の最高位の二將軍であり、白琳は、李京でその名を知らない人はいないほどの名医。瑠璃は瑠璃で、綺麗な容姿と、あの、翡翠と桃華を扱いなれているという意味で、やはり只者ではないのだろう。なんだか、すごい人たちと旅をすることになったなあと改めて紅貴は思う。

「白琳様、この方を救えますか」

孝雅が言くと、白琳はやさしい笑顔で笑う。

「もちろんです」

翡翠は、白琳のために場所をあけた。白琳は、漣の手を取った。

その時、急に漣の周りが柔らかい光に包まれた。紅貴を含め、その場にいた全員が、白琳と漣に釘付けになる。軽く眼を閉じ、光の中にいる白琳はあまりにも美しかった。手を握っている様子は、何かを祈っているようにも見え、白い服をきたその姿は、天女のようなといっても差支えないのではないかと紅貴は思う。やがて、光が消えると、白琳はにっこりと笑う。

「終わりましたよ。この程度の傷なら、これで全身の傷はなくなっているはずですよ」

白琳は、確認することがあるのか、漣の横にしゃがんだ。これほどまでの力とは、と紅貴は目を見開く。数十年に一度、『癒し』の力を持つ人間が生まれるという。その人間はあらゆる傷をいやすことができ、あらゆる病を治せるといふ。話では聞いていたが、目の前でその力を見せつけられて、紅貴はおどろかずにはいらなかった。

「……白琳、おれは納得しないぞ」

なごやかな雰囲気壊したのは翡翠だった。突然、白琳の前に立つたかと思うと、いつもよりも低い声でそう宣言した。

「ちよつと何言ってるのよ。せつかく助かったのに」

「瑠璃、今度ばかりは私も翡翠に同意」

桃華にしては珍しく強い口調だった。

「だって……」

次の瞬間、翡翠と桃華の声が重なった。

「俺に対して治療するときは、あんな、優しいやり方じゃないだろう」

「私が怪我すると、白琳はすっごく怖いもん！」

紅貴の知っている限り、翡翠は常に同じ口調で話していた。それが、こつも感情的になるとは珍しいと、紅貴は思った。桃華にしても、あの笑顔がなく、のんびりした口調ではもない。早口だった。

「やっぱりそう思うよな」

「うん、絶対おかしい！なんであんなに優しいの！私たちに治療す

るときは殺されそうになるのに！」

「ああ……あれは、一度体験すると、しばらくはうなされるな……」

「うん、すつごく怖いよね」

「あれは生き地獄だな」

先ほどの、天女のような様子を見た紅貴は、どうしても翡翠と桃華が言う様子が想像できなかった。そもそも常識で考えても、そんなに恐ろしい医者が世の中に存在するのは疑問だった。

「……お二人とも良いんですね」

翡翠の背に隠れて、座っている白琳の表情は見えなかった。しかし、その声だけで背筋がぞくりとするのはなぜだろう。

翡翠と、桃華は黙ってしまった。

「先程、言いましたよね？ 漣さん程度の怪我ならこれで事足りると……お二人はいつも、あり得ない怪我や常識では考えられないような症状が出るでしょう？ しかも、その後のお二人の、馬鹿としか思えない行動……。そこから命を助けるのはあの方法しかない上に、当然の報いだと思います」

翡翠と桃華は何も言わない。いや、言えないのかもしれない。

「普通であつたらこの場にはお二人ともいません。とつくに地獄に落ちてます。生きているのは誰のお陰かを肝に銘じておいてください。今後、そのようなことがあつて、いや、普段のお二方の行動を見ている限り、確実にありますね。……死にたいというなら話は別ですが、誰がお二人の命を握っているか忘れないように気を付けてください」

白琳はそう言って立ち上がると、瑠璃の横に並んだ。

「白琳お疲れさま」

「たいしたことはしてませんよ。普通に治療して、どこかの子供の言い分を正論で返しただけですから」

そう言って、につこりと笑う白琳は、やっぱり恐ろしい人物なのかもしれないと、紅貴は思った。翡翠と桃華はというと、呆然とした様子で立っていた。

やがて、もそもそと動く音が聞こえたと思うと漣が上半身を起こしていた。

「翡……麒麟……！なんで、こんなところにいるんだよ！」

漣は起きて早々そうそう叫び、傍にいた翡翠に掴みかかろうとした。

「そんな急に叫ぶと、お体に障りますよ。私が見た限り、かなり血を流していたようですから」

白琳が言ったとおり、漣は、叫んだ直後、へたりと倒れこんでしまった。

「……ダサイな」

「なんだと……！」

「お二人とも馬鹿な争いはやめてください。翡翠様は、漣さんに詳しい状況を聞きたいのではなかったのですか？」

翡翠はため息をついた。

「おい漣、話せ」

「なんで俺が話さなきゃいけないんだ」

「命令だ、命令。さっさと話せ」

「くそ……！普通に出勤しようとしたら、覆面の奴に襲われたんだよ。おれも持っていた刀で応戦したが、折られてこの様だ。悔しいが、相手はかなりの腕だ」

「やっぱりダサイな……まあいい。とりあえず桃華、こいつを李京まで送ってやれ。俺達は先に靖郭で待っている。場所は桜亭で良いな？」

桃華はこつくりとうなずいた

「ちよつと待て！俺が女に送られるだと！？ふざけるな」

「ふざけるなはお前だ。ここの知らせ鳥は殺されていて連絡手段がない。誰かが李にいかないといけないんだ。しかも、馬は逃がされた。桃華は天馬をもってるから、乗せてもらえば良いだろう？官吏なら仕事しろ。考雅、それで良いな？こいつは、桃華に送らせる。俺たちは先に行くから、そのついでに、もし、敵を見つけたら倒し

ておく。考雅たちはこのまま見張りを続けてる」

「はい……！」

考雅はそういうと、突然頭を下げってしまった。考雅の部下だと思われる青年もそのまま頭を下げていた。

「二將軍の麒麟様とは知らず、とんだご無礼を……」

「二人とも、こんな馬鹿兄に頭を下げる必要なんかないと思います。迷惑をかけたのはこちらなんだし」

瑠璃は、頭を下げる二人にそう言った。しかし、二人が頭を上げる様子はない。

「……別に頭を下げる必要なんかないだろう。たまたまが俺たちここを通りかかっただけなんだから」

それを聞いた二人はやっと顔を上げた。

「麒麟様のご好意、感謝いたします」

翡翠は、軽くため息をついていた。

桃華と別れた紅貴達は、見張り台を出ることになる。先に見張り台を下り、馬にまたがる翡翠を見た紅貴は先ほどから気になっていたことをこっそりと白琳に尋ねる。

「翡翠と漣つてもものすごく仲悪いみたいだし、翡翠がいつもとは違くなる気がするんだけど、あの二人、なんかあったのか？」

「寺子屋時代、あの二人は犬猿の仲だったんです。口を開けばいつも喧嘩ばかりで……。元々漣さんは禁軍に入りたかったんですよ」

「でも、漣さんって文官なんじゃ……」

白琳は頷いた。

「漣さんはあの頃は禁軍に入りたがっていました。男の子ですから、禁軍はあこがれだったのでしょう。実際、頭も良いですし、子供にしては、剣も強いようでした。ただ、翡翠様には剣では勝てなかつたんです。漣さんは最初、翡翠様のことを馬鹿にしている、その翡翠様に負けたのは悔しかったと思いますよ。しかも翡翠様はあの性格ですから……」

あの翡翠の性格であれば、漣の神経を逆撫でさせるのは普通にやりそうだと、紅貴は想像した。

「漣さんも漣さんで、翡翠様の数学の出来の悪さを馬鹿にしてました。まあどっちもどっちですね」

数学が苦手だという事実を知らなかった紅貴は、意外に思う。

「でもその漣さん、詳しい事情はわかりませんが、夢が変わったんです。結局、科挙にも三元を取って受かりました。あの年はすごかったです。武科挙主席で通ったのは駿さんですし、普通の科挙での三元は数十年ぶりだったそうですから。でも、そうなくても昔からの癖なのでしょうが。あの二人が会うといつもあんな風に喧嘩するんです。まったく困った方たちです。」

「漣さんってそんなすごい人だったんだ。なんか、そう見えないな」「この国の上位の官なんてみんなそんな感じですよ。漣さんは謎が多い方なんですけど、有能だという噂です。」

言われてみればそうだと、紅貴は感じた。紅貴がこれまでに会った嘉の上位の官は変わった人物が多い。でも洸国の官よりもずっと優秀なのではないかと紅貴は感じた。世の中が荒れている中で、これだけ平和な嘉を作っている嘉の官吏は優秀なのに違いないと。それを登用する王もまた、只者ではないのかもしれない。

第二章 旅の始まり 2

「紅貴、そういえば身分証明書はもってるの？李仙道を通るには、横の関所で身分証明書を見せる必要があるはずだけど」

見張り台から李仙道まではほとんど距離はないらしい。馬に乗っているとはいえ、速度を緩めていたため、会話がし易かった。少し心配そうに瑠璃に尋ねられた紅貴は、軽く頷くと、瑠璃の問いに答える。

「それなら、俺が煌李宮に滞在しているときに、煌李宮の人が用意してくれたんだ。これから洸に行くのには、何かと必要だろうからって。本当はたくさん審査や手続きが必要らしいんだけど、すぐ用意してもらえたんだ」

「そう、それならよかった。ほら、あそこ、李仙道入口が見えてきたわ」

瑠璃が指をさした方角を見ると、大きな白い門が開かれていた。人も馬も荷馬車も、通るには十分な広さだ。門の内側、紅貴からみてその左側から出てくるのは、これから煌李宮に向かおうとする人々だろう。紅貴が見た時は、ちょうど、馬車が門の内側から出てくるところだった。大きな馬車に、たくさんの荷が積み、馬車を守るかのように馬に乗った人々がその左右にいたが、そんな大所帯でありながらも、門には人が通れる通れる余裕があった。門の両端には兵士が立ち、紅貴からみて右の関所の前には、数人が列を作っていた。

「いつもより検問に時間がかかってるようね」

馬を降りた瑠璃は、そう呟いた。

「そうなのか？」

「うん。あの程度の人通りだったら、数人とはいえ、列を作るほど待たされないはずよ」

「やはり、漣さんが襲われたせいではないでしょうか。犯人を捕ま

えようとして、慎重に検問を行っているのかもしれない。そうしないと、李仙道の安全は守れませんし」

白琳の言う通りだろう。李仙道は、元々、嘉を行きかう商人が安全に主要な都市を行き来できるように作られたのだという。李仙道そのものは、大きな橋のような造りになっており、その周囲は城壁のようなもので囲まれているため、族に襲われる心配もない。しかも李仙道の内側は、嘉の兵が見回りをしている。そのため、物が盗まれたり、人が襲われるということはめったにないらしい。そもそも李仙道に入るには、関所を通過する必要がある。そこで、李仙道を通過する許可が出なければ、通行できないのだ。李仙道が安全だといわれるのは、そのためだった。だが、その李仙道の入口近くで、人が襲われた。検問がいつもよりも慎重になるのは当然なのかもしれない。

「なあ翡翠、漣さんを襲ったやつ、捕まえられそうか？」

「さあな。ああ、念のため言っておくが、漣を襲ったやつを捕まえるために寄り道する気はない。たまたま見つけたら捕まえるかもしれないが、だが、寄り道する気はない」

「ちよつと待てよ！翡翠は強いんだろう？翡翠なら捕まえられるはずだろう！？友達が襲われたのに、いいのかよ！俺、てつきり、翡翠が犯人を捕まえると思ってたのに！」

翡翠の冷たい言い方に、ムツとした紅貴は、思わずそういうが、翡翠は、態度を変えることなく、なんでもないことのように言う。

「俺の仕事はお前を洗に連れていくことで、漣を襲ったやつを捕まえる事じゃない。第一、俺は漣と友達になつた覚えはない」

「なんだよその言い方！考雅さんにも捕まえるって約束してたじゃないか！」

「『ついで』だと言ったはずだ。ついでに見つけたら捕まえるが、見つからなかったら捕まえない。俺じゃなくても、捕まえることができるはずだから問題ないだろう」

「なんだよそれ！」

紅貴は、思わず翡翠の胸倉をつかみたい衝動に駆られたが、背が低い紅貴は、それが叶わない。一方翡翠は、面倒だというように溜息をついていた。紅貴は、その態度に苛立ちを覚え、言葉を続けようとするが、翡翠の静かな口調がそれを遮った。

「だいたい、お前自身は犯人を捕まえる技量はないだろう？ 自分じやできないくせに文句言うな」

「ちよつと翡翠言いきよ！ 紅貴の気持ちを考えなさいよ」

瑠璃はそう言ったが、紅貴は瑠璃の声をほとんど聞いていなかった。翡翠の言葉が突き刺さる。確かに、自分では、できないのだ。紅貴は能力がある人間は、それを生かし、弱い立場を助けるべきだと思っていた。だからこそ、力があるのに何もやるうとしない翡翠に苛立ちを覚えたのだ。しかし、紅貴自身は頼むだけで、何もやるうとしていなかった。それに、気づいてしまった。結局、何もやらない翡翠と同じではないだろうか。

「そんなにやりたきやおまえがやれ、と言いたいところだが技量がないのに無理にやると、お前の身が危ないだけだから辞めておけ……恨むなら、何もできない自分を恨むんだな」

「……そうだな、翡翠の言う通りだ。でも、やっぱりずるい！ 翡翠はできるのにやらないじゃないか……」

紅貴は俯いた。思わず拳を強く握り締める。できるのにやらない翡翠にも、口だけで何もやれない自分自身に対しても腹立たしい。どうしたら、いいか分からずに、黙っていると、柔らかい手が紅貴の肩を叩いた。ゆっくりと顔をあげると、白琳が優しい笑みを浮かべていた。

「自分の力でできなくてくやしいお気持ちはわかります。でも、これから、人を助けられる強さを身につければ良いのではないのでしょうか。これから強くなって、でも、翡翠様のような性格にならないければ良いと思うんです。ですから元気出してください」

そう言う白琳の声色はどこまでも温かかった。瑠璃の声がそれに続く。

「それもそうね。とりあえず、漣を襲った犯人は翡翠とは違って、真面目な嘉の兵士が捕まえると思うわ。紅貴が強くなった時は、今度こそ紅貴ができることをやれば良いと思う。紅貴はこれからよ」「うん、ありがとう」

紅貴がそういうと、白琳と瑠璃はにっこりと笑った。

「翡翠様が先に関所の方へ行ってしまったてますね。私たちも急ぎましよう」

白琳に言われ、関所の方を見ると、翡翠はすでに門の入口の列に加わろうとしていた。

「まったく！なんで馬鹿兄はいつも、あんな風に勝手なの！？白琳、紅貴、行くわよ」

紅貴は、そういつて歩き出した瑠璃を追いかけた。

列に並んで、10分ほど経った頃、やっと紅貴達の検問の番が回ってきた。人が好きそうな、大柄な男が顔をのぞかせている。

「時間かかって申し訳ありません。順番に、身分証明書を出してください」

役人の男は、微かに笑みを浮かべて言った。先頭にいた翡翠が身分証明書を出した瞬間、役人の男は目を見開いた。

「これはこれは……麒麟様でしたか！お会いできて光栄です！」

役人の男は、感動したようにそう言っていたが、当の翡翠は、無関心な様子だった。白琳はクスクスと笑いながらそれに続き、瑠璃も身分証明書を見せた。紅貴も、煌李宮で用意された身分証明書を見せるが、役人の男の手が止まる。

「紅貴君……かな？この身分証明書、偽物じゃないかな？」

驚いたのは紅貴だ。これは確かに、煌李宮で用意ものだ。偽物なはずがない。驚きのあまり、紅貴はとっさに声を出すことができなかった。

「ちよつと待つてください！そんなはずありません！確かにこれは本物なはずです！」

茫然としている紅貴の代わりに、瑠璃が言った。

「瑠璃さん、よく見てください。あなたの身分証明書と、紅貴君の身分証明書、少し違いますよ」

役人の瑠璃の証明書と、紅貴の証明書を裏返した。そこには国名である「嘉」が象形化されたものが描かれている。紅貴はそれをみて、はつとする。明らかに紅貴の「嘉」は全体的に細い字体になっているのだ。

「何か事情があるのかもしれないけど、これはいったいどういうことかな？いつもは話をきいて、理由によってはここを通すんだけど、今日は物騒な事件がおこっているからね、中で詳しく調べたい」

「でも……」

紅貴が動揺していると、翡翠が口を開いた。

「俺の権限でなんとかならないか」

紅貴にとっては意外な言葉だった。翡翠の性格なら、助けるはずはないだろうと思っていたのだ。

「残念ですが麒麟様、麒麟様のお願いとあっても、規則は規則ですのでお通しできません。ですが、取り調べが終わりましたら悪いようにいたしません。その様子ですと、今夜はどこかにお泊まりになるようですね。なんでしたら、そちらの宿まで、用が済み次第紅貴さんをお連れします。規則ですので、このままここを通すわけには行きませんが、それでよろしいですか」

翡翠はしばらく考えるそぶりを見せた。

「それなら助かる。うるさい餓鬼一人、今日だけとはいえないなくなるのは、良いことだからな。湖北村の亮ってやつが屋敷にいるから、頼んだ」

紅貴は愕然とする。そんな紅貴のことを知ってか知らずか、翡翠は、背中を向けてしまった。瑠璃と白琳がそんな翡翠を止めようとしていたが、翡翠が足を止める様子はなく、ついに翡翠の姿は見えなくなってしまった。やつぱり翡翠は翡翠だったと、拳を握りしめていると、役人が申し訳なさそうに言う。

「なんだか悪いことをしてしまったね。ごめんな。取り調べが終わったらすぐ麒麟様のところへ連れて行くよ」

「いいんです。悪いのは全部、翡翠なんだから」

紅貴はそう言って、俯いた。

「翡翠、紅貴を置いて行くなんてどういっつもり!？」

瑠璃は、平然とした顔をしている翡翠を睨みつけた。

「置いていってなんの問題があるんだ？」

「問題あるでしょう!もし、あのまま紅貴が捕まったらどうするつもり!?あの役人さん、一見人はよさそうだけど、何考えているかわからないわ!でも二將軍麒麟の名前を使って、諦めないで押せば、紅貴がああなることもなかったはずでしょう?」

「普通はな」

翡翠は腕を組んだまま抑揚のない声で言う。

「白琳も何か言っ!この馬鹿兄、本当に馬鹿なんだから!」

瑠璃に言われた白琳は笑みを浮かべた。

「本名を名乗るなんて珍しいですね。ああいう関所とかですと、翡翠様はいつもでしたら、麒麟という名前だと何かと面倒だという理由で偽名を使うそうですね。今回の旅でも、『偽名』の身分証明書もっているはずですよ?本名を名乗るなんて、どういった心境の変化なんでしょうね」

「白琳、いったいどういうこと?」

白琳はにこにこ笑いながら続ける。

「私にはわかりません。翡翠様はいったい何をたくらんでるんでしょうね」

「……とにかく、紅貴を『桜亭』に連れてくるのは桃華の仕事だ。俺たちは先を行こう」

「もしかして、翡翠と桃華、何か企んでるの!？」

翡翠はため息をつき、何も言わずに歩きだしてしまった。

役人に関所の内部に案内された紅貴は、椅子に座るように言われた。木で出来た椅子に座った紅貴は、あたりを見回す。壁も、床も天井も全てが灰色の石で出来ており、冷たい印象に感じられる。

「お茶持つてくるから少し待っててね」

関所内部にしている、もう一人の役人が、にこやかに笑いながらそう言った。その後ろ姿を見送りながら、紅貴はため息をついた。翡翠には怒られ、身分証明証はなぜか偽物。そして、旅の仲間には置いて行かれる。旅の初日から、あまりにも不運すぎると紅貴は感じていた。やがて、役人の男がお茶を持って戻ってきた。

「私が淹れるお茶は美味しいと評判でね、じっくり味わってくれ。さて、いくつか質問しようかな」

紅貴は緊張して喉が渴いていた。何も悪いことをしていないのだから、緊張する必要はないのだが、不思議と心臓の鼓動がいつもより早い。紅貴は、心を落ち着かせようと、お茶を一口飲んだ。

「さて、まず君の名」

紅貴は最初の質問を最後まで聞くことができなかった。男が質問を言い終わるより先に、紅貴は、椅子から力なく落ちた。

「さて、用が済むまではしばらくは眠ってもらおうとしようかな」

お茶を持ってきた男はすでにその声が紅貴には届いていないことを知っていた。

第二章 旅の始まり 3

紅貴は、目を覚ました。まだ完全には冷めていない眼で、辺りを見回そうとするが、暗くてよく見えない。誰か、と声を上げようとするが、できなかった。布をかまされており、口を開くことは不可能だった。立ち上がるうとするが、それもできない。どうやら、後ろ手で、何かに縛り付けられているらしかった。

俺……捕まったんだ…… いったい何で……

身分証明書が偽物だと言われて捕まった。実際、瑠璃がもっている身分証明書と紅貴がもっているものは違っていた。

もしかして、俺を捕まえるために仕組まれた……？ いったい何のために……

煌李宮にいる時、周りは紅貴に親切にしてくれていた。しかし、煌李宮に用意された身分証明書が偽物だと知った以上、煌李宮側に、紅貴を仕組んだ人物がいると考えるのが自然だろう。

いったい何のために？……まさか巻物か……？

あの巻物であれば、とられてもおかしくない代物である。だとすれば、まずい。

なんとかしてここから脱出しなきゃ……。

頼りの翡翠は紅貴を置いて行ってしまった。自分でなんとかするしかないのだ。 あの頃のように、なんでもないことのように自分を助けてくれる人はもういないのだから。

日は沈みかけ、もうじき閉門という時刻、瑠璃、白琳、翡翠の三人は靖郭に着いた。李京よりは小規模だが、それなりに栄えた都市だ。本来、馬の足でも二日はかかるところを、一日で着いてしまったことに、瑠璃は驚いていた。昼食のための休憩をしなかったとはいえ、まさか本当に一日で靖郭に着けるとは思っていなかったのだ。「本当に着いちゃったね」

「ええ……途中、李仙道を降りて、私たちが知らない道を使ったとはいえ、驚きました」

瑠璃と白琳は、翡翠についてここまで来たのだが、途中で翡翠は李仙道を降りてしまったのだ。李仙道を外れた先は、路は整備されておらず、ひたすら草原が広がっていた。不便といえば不便だったが、李仙道とは違い、人がいなかったため、一気に進むことができた。途中、山の側も通り、少しでも馬が足を滑らせれば、怪我では済まないような場所もあったが、馬の扱いに長けている瑠璃、白琳、翡翠には問題ではなかった。

「ねえなんでこんなに急いでまで靖郭に行こうとしたの？」

「靖郭にどうしても今日中につかなくやいけない事情があったからだ」

翡翠は、足早に歩きながらそう言った。翡翠は、基本的にいつも早足だが、今日はいつもの以上ではないかと瑠璃は思った。そんな翡翠を不思議に思い、ふと周りを見回すと、周囲の人々の視線がこちらに集まっているように感じられた。瑠璃は、横を歩く白琳と、前を歩く翡翠を交互に見た。その二人を見た瑠璃は妙に納得してしまった。

（白琳は、絶世の、っていつでもおかしくない美女だものね）

瑠璃は声にださずに心の中でそうつぶやいた。李京でも白琳の美貌は有名である。求婚者も後を絶たないが、それを全部断っているのだ。一時期、あまりの美しさに、絵師が白琳の顔を描き、売り出したこともあったという。それほどまでに美しい白琳が通るのだから、人の視線が集まるのは当然なのかもしれない。おそらく、翡翠はそれが気に入らなくて、早足になっているのだろうと、瑠璃は思った。

実際には瑠璃も注目的になっていると、このことを瑠璃本人は気付いていなかった。

「ここだ」

翡翠は急に足を止めた。目の前にある石でできた物体が『桜亭』

なのだろう。路をしきる灰色の石の壁と同化し、建物には見えない。「ここが桜亭だ。今晚は、ここに泊まる」

翡翠はそう言ったが、宿屋には見えなかった。普通宿屋の前では、客を入れよと呼び込みが行われ、宿屋だと一目でわかる看板が置かれているものだが、それも無い。そもそも建物というよりは壁にしか見えないそれは、翡翠に言われなければ見向きもしないだろう。翡翠は壁を触った。動くようには見えない壁は、不思議なことに簡単に押され、三人を中へ導いた。

「馬小屋以外何ありませんね」

壁の内側には建物はなく、馬小屋があるだけだった。馬小屋には、馬が一頭いるだけだった。

「まさか馬小屋に泊まるの!?!」

「いや、ここには馬をあずけるだけだ」

翡翠はそう言うと、自分の天馬を馬小屋にあずけた。瑠璃も、それにならい、馬を連れた。そこで、もともと馬小屋にいた馬を見た瑠璃は気付く。

「これ、紅貴が乗ってた馬?」

「ああ。多分桃華の指示でここまで自力で来たんだろう。……皇太子の馬ならこれぐらいできて当然だろうな」

「この子頭良いのね」

「こいつがいるってことは、天テンもそろそろ来るか」

翡翠がそうつぶやいた時、瑠璃は上空で、羽音を聞いた。瑠璃が上を見ると、白いふわふわとした羽をもつ生き物がある。間違いなく天テンだった。天テンはゆっくりと下降し、馬小屋の前に着陸した。「天テンお疲れさま。あら、それ桃華の刀?」

天テンの口には桃華の刀が咥えられていた。少し長さが短い脇差には水色の龍のぬいぐるみがかくりつけられている。こんなことは桃華以外はしないだろう。もう一つの黒い鞘の刀には、銀の細工がなされている。鏢には細かい桜の彫刻。そこから延びた赤い紐が、鞘と唾の間をきつく結んでいる。

「なんで天テンが桃華の刀なんかもってるの？まさか桃華に何かあったの？」

「……刀が邪魔だったただけだろう。たぶんそれで天テンに刀を預けたんだと思うが」

瑠璃は改めて天テンを見た。天テンは瞳を下に向けており、口でくわえている刀はかすかに震えている。息も荒く、ひどく疲れているようだ。

「本当に何も無いって言える？天テンもこんな状態なのに……」

「ああ。桃華も紅貴も無事だ。断言できる」

翡翠はそう言うと、天テンに近づくと、手を出した。天テンは刀を翡翠の手に落とした。落とす、というよりは落ちてしまったという方が適当かもしれないと、瑠璃には感じられた。刀を受け取った翡翠は無言で歩きだした。三歩進んだところで翡翠は立ち止まる。

左手で刀をきつく握ったまましゃがむと、右手で石畳の上に手を置いた。そんな翡翠の様子を不思議に思っていると、再び羽音が聞こえた。天テンが空を飛んでいる。

「天テン疲れているでしょう？休んで！」

しかし、白い天馬はキュンと鳴くと、あっというまに遠くへ飛んで行ってしまった。

「もしかして、桃華様を向いに行ったのではないのでしょうか。そうですね？翡翠様」

白琳がそう言ったのを聞いた瑠璃は翡翠の方を見るが、先ほどまでいた翡翠の姿はない。瑠璃はあわてて、翡翠が先ほどまでいたところへ走った。

「え……」

「どうしたんですか？」

「ここ、地下に続いているみたいなの」

翡翠が先ほどまでいた場所はぽっかりと穴があき、階段が地下につづいていた。穴の横には、石が置かれている。どうやら一見馬小屋しかないこの場所に、宿屋の入口が隠されていたようだ。

「白琳、行きましょう」

「ええ」

階段は長かった。壁にはろうそくの火が灯っていたため、視界には困らなかつたが、地下に続く終りがなさそうな階段は不気味だった。地下牢にでも繋がっているみたいだと、瑠璃は思う。しかし、続いている場所は地下牢ではなかつたようだ。ほのかな明かりが漏れている。

「もうすぐつくみたいね」

やがて、開けた場所に出た。壁に埋め込まれる形でろうそくがあり、明るかつたため、はつきりと様子が分かる。木でできた台に手を乗せた、老人がにっこりと笑ってこちらを見た。

「麒麟様の連れかな？」

「あ、はい」

「まずこのきまりを説明しよう」

「ここ、『桜亭』はいろんな奴が来る。だが、互いの身元は聞いてはならん。それをしたら、すぐにここから追い出す。あとは普通の宿屋と同じだ」

老人はそう言つと、部屋の鍵を瑠璃に手渡した。

「ところで、翡翠様はどちらへ？」

「この下の道場だが、誰にも邪魔されたくないと言つてたから、貸し切りにした。翡翠の連れだといつても行くことは許さん」

「道場？馬鹿兄翡翠、いつたい何考えてるの？」

「瑠璃、翡翠様のことなんか考えても、仕方ないですわ。部屋に行きましよう」

そういつた白琳の口ぶりはいつもより早口だった。心なしか、微かにおこっているのではないかと、瑠璃には思えた。

「ねえ、お願いがあるの」

李仙道の入口にやってきた少女がそう言う。歳は12、3歳だろうか。肩より少し長い黒髪は、毛先のほうがくるくると巻かれています。

た。とても可愛らしい少女だ。首を少し傾け、大きな瞳で見つめられた男は、優しい声で言う。

「どうしたんだい？」

「あのね、私身分証明書もってないの……でも、どうしても李仙道を通りたいの……」

少女はそう言うのと俯いてしまった。男は少女を見る。大きな瞳のかわいらしい少女は、桃色の服を着ていた。服の感じを見る限り、武器を持っている様子はなく、怪しい様子はない。どこからどうみても無害なこの少女なら、通しても良いような気はしたが、青年が襲われたのだ。少なくとも表向きは。その事実を作った以上、無害に見えるとはいえ、簡単に少女を通してしまえば、周りから怪しまれるかもしれない。些細なことでも、隙を見せるわけにはいかないのだ。

「ごめんね、お譲ちゃん。ここの近くで人が襲われてね、そう簡単に通すわけにはいかないんだ。すぐにおわるから、中でお話を聞いてからでも良いかい？」

「うん、おじさんありがとう」

少しの時間だけ、少女を中で引き留める。そういう形を作れば、周りから怪しまれることもないだろう。少女には簡単な質問をし、すぐに通してやれば良いだろう。少女が、こちらの事情を知るはずもないのだから。少女は嬉しそうににっこりと笑った。

第二章 旅の始まり 4

紅貴が煌李宮を発った日の昼　その頃、煌李宮近くの路面に面した屋台で、二人の男が昼食をとっていた。

「遥玄様が俺を呼ぶのは久しぶりですね」

駿は、横に座る50代半ばにしかみえない男を見てそう言う。

「たまには上司の悪口を一緒に言おうと思ってね」

遥玄はそういうと、これからいたずらしようとしている子供のよう
に楽しげにいつと笑った。本当に子供みたいな人だと駿は思うが、
そんなことを思ったら失礼だろうと思い、笑うのをこらえる。

「遥玄様が上司の悪口を言うためだけに俺を呼ぶはずじゃない
ですか。そもそも、あんなに可愛がっている鳳華様の悪口を遥玄様
が言うとは思えませんし」

「本当はね、駿にお願いがあつてきたんだ。師匠のお願い聞けるよ
ね？」

にっこりと笑う遥玄の笑顔は、駿が幼い時からまったく変わって
ないように見えた。笑い方も、そして、外見年齢も。駿が幼少期に、
師である遥玄に剣を教わっていた時から、何もかも変わっていない。
当時から、遥玄の実年齢は謎だった。どんなに聞いても遥玄がそれ
を教えることはなく、周りの大人に聞いても知らないという。ただ、
一つわかっているのは、その大人たちが子供の時も、遥玄は同じ外
見だったということだ。

「駿話きいてるか？」

「すみません。つい……。お願いというのは？」

「お願はね、鳳華様のことなんだ」

「桃華ちゃんですか？」

駿は少し驚く。遥玄の直接の上司でもある桃華のことを駿に頼む
などこれまでになかったことだ。

「そんなに驚くことじゃないよ。鳳華様に頼まれた仕事を俺の代わ

りに駿にやってほしいんだ。見ればわかると思うけど、駿の方が適任だと思っただけ」

駿は、遙玄に渡された紙を開いた。

「確かに、俺の方が向いてますね。油断を作りやすいだろうし。それにしても、これ、翡翠と桃華ちゃんの役を交換した方が良いと思うのですが……。桃華ちゃんはいったい何を考えているんだろう」

「さあ……。でも、鳳華様には彼女なりの考えがあるんじゃないかな。とにかく頼むよ」

「わかりました」

「それから、この件が片付いたら、王から俺たちが受けた命、弄国関係のことで気になることがある。調べるの付き合ってくれないか？」

遙玄が、いつになく、静かな、微かに張りつめた声で言いつた。

駿は、いつもの師らしくないことを不思議に思いながらも、頷いた。

関所内部に連れて来られた少女は不安そうに辺りを見回していた。明かりは灯っているとはいえ、何もない殺風景な建物は、まだ幼い少女には、どこか冷たく、不安な気持ちにさせているのだろう。

「お譲ちゃん、大丈夫だよ。いくつか質問したら、すぐ終わるから」
表向きは関所内部の担当になっている男は、少女を椅子に座らせる。向かい合い、目の前に座った少女は、木でできた机を見てうつむいていた。窓から入る微かに冷たい風が、少女のくるくるとした黒髪を揺らしている。

「お譲ちゃんのお名前は？」

男はできるだけ優しい声で話しかける。目的を果たした今、後は、本当の役人がやるべき仕事を代わりにやり、今日を乗り過ごす。少女をわざわざ怖がらせる必要もないだろう。

「……張 楊花（じやうば）って言います」

少女は相変わらず俯いたままだ。身分証明書を持たないために、尋問を受けることになってしまった少女を不憫に思いながらも、男

は質問を続ける。今、自分は役人なのだ。

「楊花ちゃんはどこから来たのかな？」

「李から」

「これからどこに何をしに行くのかな？」

楊花と名乗った少女は急に顔を上げた。まっすぐにとこちらを見つめた少女の黒い眼には鋭い光のようなものが射しているように感じられる。笑うのでも、悲しむのでもなく、無表情でこちらを見る少女は、少女が発する気配にしては、ずいぶんと鋭い気配を纏っている。鋭い氷のようなそれへと変わり、先ほどまでの、不安な様子の少女と同一人物だとは思えない。やがて少女が口を開く。

「紅貴はどこ？私は、紅貴を助けに来たの」

少女はびしゃりと、そう言った。少女の言葉が反芻する。この少女はあの赤い髪の少年のことを知っているのだ。

「……いったい何のことかな」

男は、そう言いながら、少女に気付かれないように隠し持っていた短刀を取り出す。とても子供の威圧感とは思えない少女の気配に圧倒され手から汗が噴き出ていたが、落とさずに取り出すことができた。それを知ってか知らずか少女は言葉を続けていた。

「洩だか恵だかしらないけど、紅貴を使っていったい何をすることもりだったのかしら」

「それはお嬢ちゃんが知らなくて良いことなんだよ……！」

男はそう言いながら短刀を少女に突き刺そうとする。しかし、パシツという音とともに、刀が弾かれていた。少女は武器を持っていなかったはずだ。状況を理解するのに、数秒かかるが、やがて

目の前の状況を理解した男は目を見開いた。刀を弾いたものは扇子だった。少女の口元にはわずかに笑みが広がっていた。

「関所にいれば、簡単に紅貴を捕まえられると思ったんでしょ？偽物の身分証明書を持った紅貴を連れ込んだら取り調べだつていえばすむものね。それなら紅貴と一緒にいるはずの二將軍と戦わなくてすむ。あなたたちは、そのために、関所で働く役人を襲った。違

う？」

少女の言葉は当たっていた。ドクンドクンという心臓の音が全身に響いている。しかし、なんとか平静を装う。そんな男の感情を無視するかのように少女は声をあげて笑った。

「漣があなたたちを待つてるわ。ああ、漣っていうのは、あなたたちが襲った役人。あなたたちを捕まえるために、わざわざ関所の役人をやることになったのよ、彼。知ってるとは思うけど、漣は文官のわりには武道にも通じるのよ。だから選ばれたわけなんだけど……。その漣を倒したことは褒めてあげる。でも、私を倒すのは無理だと思っわ。そう、煌季宮に、何かたくらんでる人がいるのは分かってたわ。あなたたちはその人に雇われたか、もともとその人の下で働いていたんでしょう？ちよつと心当たりがあつてね。私は、その人を完全にあぶりだすために、紅貴を利用したの。そんなことも知らずに、ごくろうさま。それから最後に……私がわざわざ話さなくていいことまであなたに話すのはあなたを捕まえられる自信があるからよ」

少女はにっこりと笑った。その笑みが消えると同時に少女が動き出す。武道に長けているのだろう。少女の素早い動きに対応できないだろう。そう思うと同時に、男は落ちた。

人体の急所の一つを突かれた男は気絶している。その男を、少女 桃華は見下ろした。

「入口の偽役人は、今頃、兵が押さえているだろうし、あとは紅貴を助ければ終りね」

桃華はそうつぶやき、男が落とした短刀を拾いあげた。そして、懐から、関所内部の図が描かれた紙を取り出した。漣が描いてくれたものだ。

「紅貴がいるのはこの辺かしらね」

桃華は、一人そうつぶやくと、紅貴のもとへ駆け出した。

「紅貴く起きて〜！」

聞き覚えがある少女の声。ゆっくりと目をあけると、目の前には桃色の服を着た少女がいる。桃華に似ているが髪の色と目の色が少し違う。桃華は黒髪黒目ではなく、茶髪茶目だ。しかも桃華は紅貴の知っている限り、髪をお団子にしていたが、目の前にいる少女は髪をおろしている。

「紅貴起きた？行くわよ」

少女はそういった。紅貴は完全には覚醒していない頭で紅貴は声を出す。

「あなたは……」

「紅貴何言ってるの？私は桃華！紅貴の口に噛まされていた布にしみ込んでいた睡眠薬のせいでボケてるの？」

一度目が覚めたのにまた寝てしまったのはそういうわけかと、紅貴は妙に納得するが、目の前にいる少女が桃華だとは、紅貴には思えなかった。しかし、声はまぎれもなく桃華だ。

「……もしかして、髪と瞳の色に驚いてるの？これは、関所に侵入するのに、万が一二將軍だつてばれたらまずいから色を変えたの。二將軍の鳳華は若い女で目と髪が茶色つて知られてるみたいだから髪は染め粉でそめて、目は特殊な目薬で変えたのよ。似合うでしょ？」

「特殊な目薬……？」

桃華らしき人物はこくりとくなく。子供っぽくおおきく頷く様子、たしかに桃華だ。

「数時間しかもたない上に貴重だからなかなか手に入らないんだけど、その目薬を使えば目の色を変えることができるの。それはそうと、行くわよ。天テンが外で待っているわ」

「紅貴がつかつていた馬は先に瑠璃たちのところに向かったわ。その代わり天テンが外で待っているはずだからそれに乗って今夜の宿に行くわ。天テンに乗って飛べばすぐよ」

「ちよつとまって天テンって……まさか空飛ぶの!？」

「当然でしょ？とんだほうが速いもの」

紅貴は思わず、手をぎゅっと握った。飛ぶということとはつまり、高い所に行くということだ。そんな紅貴の様子に気づいたのか、桃華が言う。

「もしかして紅貴って高所恐怖症？」

「うん……実は」

紅貴が小声で言うと、桃華は柔らかい声で言う。

「大丈夫よ。天テンは飛ぶのじょうずだから。行きましょう」

紅貴は頷くと、桃華の髪を見る。桃華は自分を助けるためにわざわざ髪の色や目の色まで変えたのだ。

「桃華、ありがとうな」

桃華は中途半端な笑みを浮かべただけだった。いわゆる苦笑いというやつだ。そんな桃華を不思議に思いながらも、桃華の後について行き、外に出た。日は沈みかけ、青かった空も茜色になっていた。紅貴達が外に出たところ、茜色の空の彼方から白いふわふわとした天馬が飛んできた。天馬は静かに桃華の横に着地すると、キュンと鳴いた。桃華は天テンを撫でながら話しかけている。

「……刀があると、二將軍って疑われる可能性があったから預けなきゃいけないかったの。天テン、ありがとう」

桃華は紅貴のほうを振り返りにっこりと笑う。

「紅貴、前に乗って」

紅貴はおそるおそる天テンに跨った。そして、それに続き桃華も飛び乗る。二人が天テンの背に跨ると、天テンはフワリと飛んだ。あつという間に、関所を見下ろす高さに飛翔した。大きいと感じていた李仙道の門も小さく見える。そしてあつという間に関所は見えなくなった。

靖郭桜亭。その内部に入ってすぐのところでは、瑠璃と白琳が待っていた。紅貴の顔を見るなり、笑顔で駆けつけてきた

「紅貴、無事だったのね」

瑠璃が本当に嬉しそうに言った。紅貴もつられて笑う。

「うん、桃華が助けてくれたんだ」

「良かったですわ。ところで桃華様は？」

「うん、なんか着いた瞬間、翡翠のところに行くとか言って、ものすごい勢いで階段降りていったけど」

紅貴がそう言うと、白琳がそれまで以上に柔らかい表情になったように紅貴には感じられた。

「じゃあ桃華様は翡翠様のところへ行ったんですね？」

「うん」

「それにしても紅貴が捕まったのに、うちの馬鹿兄がほっとくっていった時はどうなるかと思っただけど、桃華が助けてくれて良かったわ」

「……翡翠、そんなこと言ったんだ。いや、そういう奴だとは思ってからべつにいいんだけどさ……」

「とにかく、助かってよかったです。一日目から大変でしたけど、とにかく全員揃ってよかったですね」

紅貴は最後にもう一度頷いた。

「翡翠、お待たせ」

桜亭の地下深くに掘られた道場の戸をあけると、翡翠が腕を組んだまま座っていた。翡翠の前には桃華の刀がある。龍のぬいぐるみが括りつけられた脇差は鞘から抜かれることなく、そのまま置いてあったが、もう一つの刀は不思議なことに、僅かに鞘から刀が抜けていた。桃華は急いで刀の前に行くと、二本の刀を脇に差した。

「……翡翠ごめん。ありがとう」

「いや。紅貴は助かったのか？」

「うん、助けたよ」

「そうか」

翡翠はゆっくりと立ち上がった。僅かに青白い翡翠の顔が桃華を見下ろす。

「俺は疲れたから寝る」

「うん……。あの……。白琳呼ぶ？」

「いや、いい」

翡翠はそれだけ言うと、桃華に背を向けて道場を出て行った。一人残った道場で、桃華は座りこむ。

（翡翠、ごめん……）

桃華は心の中で静かに謝った。

（でも、……の可能性があったから翡翠にやらせるわけにはいかなくて……）

桃華は、珍しく、もう一度深いため息をついた。

第二章 旅の始まり 5

「ねえ可憐、知ってる？この煌李宮に他国の刺客が送り込まれてるんですって」

煌李宮の中庭にある回廊を渡る途中、可憐の友人香月かつきは恐れる様子はなく、そう言った。月明かりに照らされた香月の表情は、どこか楽しそうだ。

「香月は怖くないの？」

可憐がそういうと、香月は首を横に振って言う。

「怖いわけではないでしょう」

「そうよ、恐れる必要なんかないわ。ここには駿様がいるのよ。きつと私たちを守ってくれるわ」

香月の言葉に、怜れいのはつきりした声が続いた。二人の自信満々な様子に可憐は笑む。

「そうね。駿様がいるから大丈夫よね」

「ねえ、あそこにいるの駿様じゃない？」

香月に言われ、中庭を見ると、たしかにそこには駿がいた。遠くで表情は良く見えないが、駿は、庭を行ったり来たりしていた。

「駿様どうしたんでしょう」

可憐がつぶやくと、怜の言葉が続く。

「可憐、香月、行ってみましょう」

可憐、香月、怜の三人は中庭に降りた。先程までは遠くにいてよく見えなかったが、今は駿の表情がはっきりと見える。どうやら困っているようだった。

「あの、駿様、どうしたんですか？何かお困りのようですけど」

香月が、静かな声でそう言うと、駿は困ったように笑った。

「実は愛犬がどこかへ行ってしまったね。仕事が中々終わらないから、気分転換に愛犬と遊ぼうとしたら、一緒に飼っていたトカゲが

部屋から逃げて、犬もそれを追いかけてどこかにいつてしまったんだ」

駿はそう言うと、僅かに下を向いて俯いてしまった。可憐は不覚にもそんな駿をかわいいと思ってしまうた。もともと中性的な印象の駿が困っている、それはまるで子犬のようだと、可憐は思った。そんなことを思っていると、香月がきつぱりとした口調で言う。「あの、よろしければ私も駿様の犬を探すの手伝います」

「私も」

怜の声もそれに続く。二人の言葉を聞いた駿は顔を上げると、優しいな笑顔を見せた。その笑顔を見た可憐は思わず、顔が火照るのを感じる。

「ありがとう。じゃあ、一緒に犬を探してもらっていいかな？」

「もちろんです。あ、私たちの名前言っていますね。私の名前は可憐。横にいるのは香月で、その隣が怜です」

「可憐ちゃんに香月ちゃんに怜ちゃんか。みんな可愛い名前だね。じゃあ、香月ちゃんと怜ちゃんは、東側を探してくれるかな？可憐ちゃんと俺で西側を探そう」

「はい。あの、駿様の子犬の特徴を教えてくださいてもよろしいでしょうか」

怜がそう言うと、駿は柔らかい声で言う。

「黒い子犬だよ。まだ本当に小さい子犬で、名前は黒助くろすけっていうんだ」

「……黒助ですか？」

「少し変わった名前だと思っただろう？実は鳳華様がつけてくれた名前なんだ」

「あの、駿様、トカゲの方も探しますか？」

「いや、トカゲはいいよ。特徴がないトカゲだし、見つからないと思うんだ。……実は、そのトカゲは友人から預かったものなんだけどね。……でも、トカゲについては俺が謝るから大丈夫だよ。黒助を探してもらえるかな？」

「はい」

三人の声が重なった。それを聞いた駿は、三人を可笑しそうにみると、明るい声で言う。

「みんなありがとだね。じゃあ、30分後にもう一度ここに集まるう」

可憐は駿の後をついて行く。不思議なことに、先ほどまでうるうるとしていたのに、可憐と二人きりになってからは、迷うことなくまっすぐに歩いていた。まるで目的地が決まっているかのような駿のそんな様子を可憐は不思議に思う。やがて、可憐が知らない池の前に着き、駿は止まった。駿はそこで振り返った。口元にはわずかに笑みが浮かんでいる。月を背景に佇む駿は、美しいといっても間違いはないはずなのだが、そんな駿を見た可憐はなぜか、背中に悪寒が走るのを感じた。

「可憐ちゃん、実は君に話したいことあるんだ」

静かな声だった。しかし、人気のないこの場所ではよく響く。

「何でしょうか」

「君、煌季宮に何しに来たのかな？」

ざわりと二人の間を風が通り抜けた。夜の煌季宮は静かだ。風が通り抜けた後は、夜の静寂が辺りを包んだ。しかし、音がほとんど聞こえないはずのこの場所で、可憐は、大きな音を聞いていた。それは、可憐の心臓が刻む鼓動だった。

「……何のことですか」

何も考えることができず、可憐は無意識にそう言った。

「女の子の荷物を勝手に見るのは悪いと思ったんだけどね、たまたまこんな物を君の荷から見つけてしまっただけね」

駿はそういうと、懐から紙を取り出した。可憐は、一歩前に出てそれを見た。

「それは……」

「紅貴君の身分証明書だよ。なんで君が持っているの？」

「……煌季宮に紅貴殿が身分証明書を忘れていってしまったので、私がつっていたんです」

「まあどうでも良いんだけどね。実は、紅貴君が、偽物の身分証明書を持つていたことで、関所の役人に捕まってしまったんだ。でも、その役人も偽物の役人だったんだけどね。誰かが、紅貴君の身分証明書を偽物にすり替えて、それをきっかけに関所で紅貴君を捕まえられるように仕組んだんだろうな。俺が思うにそれは可憐ちゃんだと思っただけと違う？」

可憐は何を言ったらよいか分からなかった。悪寒を感じる。それは冷たい夜風のせいだろうか。それとも

「偽役人が倒した本物の役人なんだけどね、鳳華様があらかじめ用意した役人なんだ。彼、文官なんだけど、武道の心得もあるから、簡単には倒されないだろうからって。まあ結局彼は倒されちゃったわけだけど、どちらにしても、鳳華様は君が紅貴君の身分証明書を偽物と取り替えたって知ったら捕えるつもりだったみたいだよ」

可憐は何も言うことができなかった。

「君の荷物に入っていた紅貴君の身分証明書を見て」

駿はそう言うと、身分証明書の上の部分を外し始めた。しかし、そこで可憐は思い当たる。身分証明書はそんな簡単に外れたり破れたりするような作りになっていないはずなのだ。しかし、紅貴の身分証明書の上の部分は簡単に外れてしまった。外れた部分からあらわれた物を見て可憐は、あ、と声をあげる。

「それは……！」

「見ての通り、鳳凰の印。知つての通り、この印を使えるのは鳳華様だけだよ。本来の使い方は、重要な書類に押ししたりするのに使うんだけど、今回は少し違う使い方をしてるみたいだよ。つまり、鳳華様は君が紅貴君の身分証明書をすり替えることを予測して、あらかじめ紅貴君に渡される身分証明書に細工していたんだよ。君がこれをもっているということは、やっぱり今回のことに君が関わっていたということだよ」

もはや、言い逃れはできなかった。ここから逃げようにも、あの、若き天才といわれる駿の前から逃げ出せるはずもなかった。だとすれば、今、やるべきことは一つだと、可憐は思う。

「そうよ、お察しの通り、私は洸国の刺客」

「……君、紅貴君がどういう人物か知ってるの？」

「どういつって……」

予想外の言葉だった。

「まあいいんだけどね。これから、君は嘉国の文官に引き渡されることになる。……念のため忠告しておく、本当に洸国の刺客だったら自分から洸国の刺客とは言わないと思うんだ。紅貴君のことは洸国出身ということ以外は知らないみたいだし、きつと、誰かに煌李宮に来る洸国出身の少年を捕まえるようにとだけいわれたんだろ？ ……それじゃあ、君が洸国の出身ということは信じてもらえないと思うよ」

可憐は、へたりと座り込んだ。もう駄目だと思うが、どうしたら良いかが分からなかった。目の前の池に映る月が歪んだ。それは、目から溢れる涙のせいじゃなかった。

「……可憐ちゃん、君がやろうとしたことは許される事じゃない。でも、正直に話してくれたら、俺は怒らないよ。だから、俺にだけは可憐ちゃんのこと教えてくれるかな」

先ほどよりも暖かい声だった。ゆっくりと顔をあげると、駿は優しい笑顔を浮かべていた。その笑顔の前で嘘をつくのは申し訳ない不思議と、可憐をそういう気持ちにさせた。

「わたし、洸から来たんじゃないんです……恵からきました……」

「つまり、どういうことだ？」

靖郭の食堂で、紅貴、瑠璃、桃華の三人は夕食を食べていた。そこで、紅貴が関所に捕まる経緯を 桃華に聞いていたのだが、紅貴はよく理解できなかったのだ。

「桃華、そんないいかげんな説明じゃわかるわけないでしょう。も

う少しわかりやすく説明しなさい」

「うん。あのね、たまたまある国に行つて、煌李宮に刺客が送り込まれていることを知つたの。その時はよく分らなかつただけで、後から、その狙いの一つが紅貴だつてわかつたの。でね、少し前から私や翡翠に仲良くしようとしている女官の子がいてね、今思うと、紅貴の情報を探ろうとしていたんだと思うんだ。本名で呼び始めたから、余計に怪しいなつて思つたの」

「どういうことだ？」

「紅貴、二將軍には本名とは別にもう一つの名前が与えられるの、私や白琳、駿なんかは本名で呼んでるけど、それは異例中の異例なの。普通はもう一つの名前で呼ぶわ。どんなに親しくてもね。多分、そのこが、本名で呼んだことで、桃華はその子を睨んだのよ」

桃華は、こくりとうなずいた。

「でね、煌李宮でこそそそやられるなんて嫌でしょう。だから私はその子に、わざと紅貴が洺国出身だつてばらしたの。そしたら何か動き出すんじゃないかと思つて。でね、考えたんだけど、紅貴を捕まえるためとはいえ、翡翠を真正面から相手にするはずはないと思つたの。そんなことやつてたら命がいくつあつても足りないし。関所だつたら紅貴を簡単に捕まえられるんじゃないかなつて思つたの。きつとそのため紅貴の身分証明書を偽物に入れ替えるはずだつて」

「もしかして、桃華は、おれが関所で捕まるのを知つたのか？」

桃華はこれには答えずに、話を続けた。

「でもね、私、紅貴が最初にわたされた身分証明書を改造しておいたの。だから、改造された身分証明書を持っていれば、その子が、つてことになるわ」

「つまり、まとめると桃華は紅貴を利用したつてことね」

紅貴は、瑠璃のその言葉に少し落胆した。そんな紅貴のことを知つてか知らずか、桃華はいつもどおりにつこり笑つて言う。

「紅貴、その杏仁豆腐もらうね」

桃華がそういつとあつという間に紅貴の皿から杏仁豆腐が消えた。

「なんか俺、疲れちゃった。先に宿戻ってるよ」
紅貴は軽くため息をついて席を立った。

桜亭に戻り、紅貴は部屋に向かった。引き戸を開けると、聞いたことがある声が紅貴の耳に飛び込んできた。

「まったく世話が焼けるんですから」

白琳が寝台の横に腰かけていた。寝台で寝ている翡翠に話しかけているようだった。しかし、驚いたのはその後だった。白琳の手が輝きだした。見張り台でも似た光景をみた紅貴だったが、次に繰り広げられたことに、紅貴は目を見開く。寝ている翡翠の体から、紫色の光のようなものが出てきた。それは白琳の輝く手によって吸い込まれていく。不気味な光景に紅貴は動くことができなかつた。やがて、紫色の光が消えると、白琳の手も元に戻った。紅貴は部屋を出ようとすると、白琳が紅貴に話しかけてきた。

「紅貴さん戻ってたんですね」

「あ、うん。忘れ物をしちゃって」

白琳は柔らかい笑みを浮かべていたが、今の紅貴にとっては、白琳の笑顔ですら恐ろしい。

「翡翠様、連日の仕事で疲れているようで、熟睡しているみたいなんです。できるだけ邪魔はしないであげてくださいね」

「う、うん」

白琳はそう言うと部屋を出て行った。白琳が去った後も先ほどの光景が頭から離れなかつた。

第二章 旅の始まり 6

靖郭に着いた日の翌日、紅貴はゆっくりと寝台から起き上がった。地下に掘られた桜亭には窓がないため、現在の時刻は分からなかったが、たいして肉体的な疲労を感じないことを考えると、結構眠っていたのかもしれない。朝弱い紅貴は、朝起きてすぐは二度寝をはじめ癖があるのだが、二度寝をする程眠くもない。そんなことを考えぼんやりしていると、紅貴のお腹がギュルッと鳴った。

（そういえばお腹すいたな。今は昼ごろかな？）

なにか食べ物はないかと辺りを見回す。しかし、この部屋に食べ物はない。仕方ないと思いながら紅貴は立ち上がって部屋を出ようとした。そして、同時に 気づく。

（翡翠がまだ寝ている……？）

おそらく今は昼ごろなはずだ。昨日も早朝にもかかわらず、見張り台の異変にいち早く気づいていた翡翠だ。こんな時間まで翡翠が寝ているのは、紅貴には意外だった。

（やっぱり白琳に何かやられたのかな……）

白琳は翡翠に手を翳した。すると、不気味な何か翡翠から出てきたのだ。紫色のそれは、なぜか禍々しいものに感じられたことを、紅貴ははつきりと覚えていた。そして、それを行った白琳はもっと恐ろしかった。

（翡翠……）

紅貴は、白琳が何をやったかを誰かに聞きたい衝動にかられた。しかし、聞いた相手が何も知らなかった場合、逆に相手を傷つけてしまうのではないかとも思う。やっぱり白琳に直接聞くしかないのだろうか。

グー

そんなことを考えていると、またお腹がなった。紅貴はとりあえず食事をしようと、部屋を出た。

桜亭の食堂に行くと、白琳、瑠璃、桃華の三人が食事をしていて、その三人のほかには誰もいなかった。

「紅貴さんおはようございます」

紅貴に最初に気付いたのは白琳だった。紅貴は思わず、肩をぴくりと震わせた。

「紅貴おはよう。もう、昼過ぎよ」

紅貴が何も言えずにいると、瑠璃の声が続いた。そして、桃華がにっこり笑いながら言う。

「普段の日にこんな時間まで寝てたら、多分翡翠に怒られちゃうよ」

「そういえば何で翡翠はこんな時間まで寝てるんだ？」

紅貴はできるだけ何事も無い口調でたずねた。答えたのは桃華だった。

「だってお休みだもん」

「だからそれじゃわからないでしょう。もっとわかりやすく説明しなさいって」

桃華はこくりとうなずくと続けた。

「あのね、翡翠は今日この街を発つつもりだったみたいなんですけど、この街で買いたいものがあつたから、今日一日だけ靖郭に居られるようにお願いしたの。でね、今日は靖郭に留まることになったんだけど…… 翡翠って、仕事がある時はちゃんと起きるんだけど、何もない日はとことん寝るんだよ。ね、瑠璃」

「昔からそうなの。翡翠は何も予定がない日は昼過ぎまで寝てるのよ。お母さんが呆れて起こしにいくんだけど、そういう日に起こすとすごく不機嫌になってね。まったく迷惑な馬鹿兄よね」

「翡翠はね、私がお願ひしたあと、二度寝始めちゃった。でね、買い物するって言ったでしょう。それ、実は紅貴のやつなんだ。だから、ごはん食べたなら私と一緒に買い物しよう。私はもうご飯食べ終わつたから瑠璃に可愛い髪にしてもらつてくるね」

「ちよつとそんな話聞いてないわよ」

「だって可愛い髪にしたい気分なんだもん。瑠璃く可愛いのにして」

瑠璃は腕をくんだまま言う。

「仕方ないわね。じゃあちよつと桃華の髪を結ってくるわ」

瑠璃はそう言うのと立ち上がり、すたすたと歩いて食堂を出て行く。そして、桃華もひよこひよこことび跳ねながら瑠璃の後について行った。紅貴は食堂に白琳と二人、残されてしまった。

「紅貴さん座ったらどうですか」

ぼんやりと立っていると、そう言われた。

「うん」

紅貴は白琳の正面の椅子に腰かける。ちらりと白琳の方を見ると、白琳が話しかけてきた。

「紅貴さんもしかして私のこと怖がってますか？」

「いや、そんなことは……」

「隠さなくて良いんですよ」

白琳はそう言うと、にっこりと笑った。

「多分、昨日のことですよ？あれ、見てしまったんですよね？」

「……」

紅貴が何も言えずにいると、白琳が穏やかな声で言う。

「いきなりあんなところを見せられたら、びっくりしますよね。驚かせてしまってごめんなさい」

白琳の穏やかな声に、紅貴は思わず頷く。

「昨日のあれはいつたい何だったんだ？」

聞かれた白琳は困ったように笑って言う。

「申し訳ありません。それは私からは何も言えません。……もしかしたら翡翠様でしたら、詳しく話せるかもしれませんので、翡翠様に聞いてもらえますか？」

「翡翠……？」

曖昧な説明になることを最初に謝っておきます。私は当事者じゃないので、私が言うわけにはいかないんです。驚かせてしまったの

に、詳しく説明できなくてすみません」

「うん……」

「では、この話はここまでにしましょう。紅貴さんおなか空いたでしょう？お食事召し上がってください」

昨日のあれが何だったのか、まだ聞きたかったが、紅貴はこれ以上は聞けないと察した。

食事を終え、桜亭をでた紅貴は桃華と共に靖郭の街にいた。小路に色とりどりの露店が並び、商人が道行く人々を呼びとめる様子は、李京とは違った賑やかさがある。

「なあ、いったい何を買った？」

「紅貴の刀だよ」

「刀!？」

驚く紅貴に対し、桃華は、当たり前というようにうなずいた。

「だって紅貴は武器もってないでしょう？これから旅するのに武器のひとつくらいもってたほうが良いと思うの。紅貴は洸国にとっては厄介な存在でしょう？いつ襲われるかわからないわ。武器ないと抵抗もできないでしょう。そういえば、武器もないのによく嘉まで無事にこれたね」

「うん、俺もどうしてここまでこれたか分からないんだ。俺さ、最初、刀持ってたんだよ。でも、どうせ刀持っていても使えないから友達に預けたんだ。その後、洸国を発とうとしたんだけど、洸国を出る前にいきなり洸の軍に襲われちゃって……。気づいたらどこかの牢にいて、途方にくれてたんだ。でも、ある日、寝て目が覚めたら李京にいた。最初は、夢かとも思ったんだけど、夢じゃなかったみたいで。その後、地図を拾ったから、その地図を見て煌李宮に行こうとしたんだけど、道に迷ったんだ。その時翡翠に会って、翡翠に連れて 行ってもらったんだ」

「すごいね。運だけで嘉に来たんだね。で・も・ね」

桃華は人差し指を立てたてを紅貴の目の前に突き立て、はつきりと

言う。

「これからはそんなにうまくいかないわ。刀の使い方は私が教えてあげるから、刀買おう。でも、その前に銀行にお金をおろしに行こう」

「銀行……？」

紅貴は銀行という言葉を聞いたことがなかった。

「そっか、洗に銀行ないもんね」。嘉には色々な場所に銀行ついで場所があるんだけど、銀行にはお金が預けられるんだよ。でね、預けたお金は、銀行ならどこでもお金を引き出すことができるの。紅貴、これ見て」

見せられたのは紙よりは硬い素材だが、硝子よりは軽い不思議な素材でできた、二つ折りの身分証明書のようなものだった。

「これね、中開くと、銀行に預けた額が特殊な墨で書かれていて、消せないようになってるの。これを持って、銀行に持っていくと、各自決められた暗号を聞かれるよ。決められた暗号を答えると、お金を引き出せるんだけど、そうすると、預けた額が減るでしょう？だから、引き出した後は、特殊な墨で書かれた数字が書きなおされるんだよ。ちなみに、銀行で働いてるのは、嘉でも特に信頼されている文官だけで、特殊な墨の修正方法とか、銀行のお仕事の詳しい内容はその文官だけにしか知らされていないんだよ」

「嘉には便利な制度があるんだな」

「ほら、あそこ」

桃華が指をさした方向を見ると、建物の前に武官らしき人物が立っていた。

「武官？」

「銀行のお金盗まれたら大変でしょう？銀行の前には必ず武官が配置される決まりになっているの。じゃあ、私はお金おろしてくるから、紅貴は兵士さんの前で待ってて」

桃華はそう言うと、銀行の中に入っていった。紅貴は改めて辺りを見回した。これだけ店が多く、人が集まる街を、洗では見たこと

がない。幼い頃、初めて連れられた洸の街の様子を、紅貴は、今でもはつきりと覚えていた。

「もうすぐで街に着きますよ」

ある春のことだった。馬に乗せられていた紅貴は、紅貴のすぐ後ろにぴったり付き馬を操る男の声を聞いた。

「街ってどんなところなんだろう。曉貴は知ってる？」

紅貴の隣で馬を操る大柄の男に紅貴は尋ねた。その時は理由が分からなかったが、男はため息を付き、紅貴の後ろに座って馬を操る男に言った。

「紅翔様、本当に行くんですか。あそこは王を倒そうとしている人々が住んでいると聞いておりますが……」

「だから行くんだよ。さあ、あの門の向こうが街ですよ」

紅翔はそう言って馬を止めると、紅貴を降ろした。洸国は寒い国だ。春とはいえまだ僅かに雪が残る地面は、歩くたびに足跡が付けられる。

「紅翔様、おかしいと思いませんか？いくらなんでも馬の足跡の数が多すぎる。それに、この鉄のような臭い……。先に街行って様子を見てきます」

「ねえ紅翔、街、まだ入れないの？あの門のむこうなんだろう」

紅貴が紅翔の顔を見上げて言うと、紅翔はしゃがみ、紅貴に視線を合わせた。

「曉貴が戻ってくるまで待っていてくださいね」

「雪もほとんどなくて雪だるまも作れないし、退屈だよ。曉貴まだかな」

「大変です！」

曉貴が大慌てで戻ってきた。曉貴を見た紅翔はすっと立ち上がった。曉貴を見る紅翔の横顔は、少し怖い無表情だと、その時紅貴は思った。

「……が、……ろしにしたようです」

「思ったより……の動きが……やかっただか」

小声で話す紅翔と暁貴の会話ははつきりとは聞き取ることができなかったが、何か良くないことが起こっているというのは本能的に感じていた。

「やはりここは引き返した方が」

「……は撤退していたか？」

「一応全軍撤退しているようですが」

「なら、街に行こう」

「ちよつと本気ですか！？あんな光景を見せるなんて！」

「それが現実なのだからしかたないでしょう」

紅翔は紅貴の方を向いた。

「街にいきますよ。私の傍を離れないでくださいね」

紅貴は怖くなり、紅翔の服を握りながら歩いて行った。そして、ゆっくりと門をくぐる。そこで見た光景に、紅貴は思わず、手で顔を覆った。しかし、一瞬しか見なかった光景は何度も頭の中で繰り返し、浮かんだ。僅かに残った雪の上を人が歩けば、土の色が混ざった水たまりができる。しかし、この街にあるのは土の色をした水たまりではなかった。赤い液体　それが血だまりを作っていた。そして、その上に、幾人もの人が倒れていた。男、女、老人。そして、紅貴と同じ年頃の子供もいた。彼らは自分からは一切動かず、時々吹く風が彼らの髪や来ている貧しい着物を揺らすだけだった。直視できずに、目を瞑って歩いていると、抑揚のない紅翔の声が降ってきた。

「目を開けてください」

「紅翔様、何を言うんですか！こんなところ早く出ましょう」

紅翔は暁貴の言葉を無視して続けた。

「子供だからと甘やかすつもりはありません。あなたはこの国に生まれました。そして、これがこの国の現実なんです。こういふことが起こっているのはここだけではないのです。今は洗であれば、どこでも『起こりうることですよ』」

紅貴は恐る恐る目を開けた。どこまでも続く人の山と、血の跡。紅翔の服をつかむ紅貴の手は、細かく震えていた。そして、急に何か紅貴の足をつかんだ。

「なんで、なんでみんな死ななきゃいけなかったの……」

紅貴の足をつかんだ血だらけの少女は、か細い声でそう言っていると、動かなくなってしまった。

「しっかりしろよ!」

少女は何も言わない。紅翔はしゃがんだ。右手を少女の胸にあてると、首を横に振る。

「もう死んでいます」

紅貴は胸の奥から何かが入り込んできてくるのを感じ手を口にあてた。

「大丈夫ですか!?!」

曉貴があわてて尋ねるが、紅貴はそのまま座り込む。

「……気持ち悪い」

街をでた後、泣き続ける紅貴に紅翔は言った。

「これ以上こんなことが起こるの嫌なのであればこの国を変えるしかありません」

「いったい、いったいだれがあんなひどいことをやったんだよ」

「洸の禁軍です。なぜ、こんなことを起こったかはまた後ほどお話しします。今は、いつかはこの国を変えるしかないということだけを覚えておいてください」

「紅貴、お金下ろしてきたよ、刀買いにいこつ」

桃華が戻ってきた。右手に持つ桃色のがま口の財布が膨れているところを見ると、かなりの額を下ろしたのだろう。満面の笑みを浮かべ、楽しそうだ。そんな桃華を見た紅貴もつられて笑った。

第二章 旅の始まり 7

桃華に連れられて着いたのは靖郭の中では静かな場所にある鍛冶屋だった。

「すみませ〜ん」

桃華が声をかけて出てきたのは、筋肉質な腕を持った女性だった。髪は短く切りそろえられ、着物の色は黒。男勝りな女性に見えた。

「鳳華、久しぶりだね。今日は何の用？」

「あのね、横にいるの紅貴って言うんだけど、紅貴に刀売って欲しいの」

「刀ねえ」

「でね、本当は一から造って貰いたいんだけど、わけあって待つている時間が無いから今ある刀で、紅貴にぴったりなやつを売って欲しいの」

女はフツと笑うと言う。

「紅貴君、ちょっと手を見せて」

紅貴は不思議に思いながらも、手を差し出した。女は紅貴の手を触る。

「いいよ、しまつて。君、剣を使ったことほとんどないんじゃない？」

「え」

「手を見ればわかるさ。鳳華や駿の手はああ見えて、剣ダコだらけの堅い手なんだけど、君の手はそういうのーつもないもんね」

「はい。実は最近ハマったく剣を握っていません。でも、手を見るだけでわかるなんてすごいですね」

「そりゃそうさ。私は、伝説の鍛冶師、頑信の弟子だった女なんだからね」

「ねえ珠花、紅貴に刀売ってもらえる？」

珠花はまじまじと紅貴を見た。見つめられた紅貴は喉をぐくりと鳴

らした。やがて、珠花はニツと笑った。

「いいよ。売ってやるさ」

「わあ〜い！ありがと〜珠花大好きっ」

桃華はそう言って珠花に抱きついた。

「あ〜もう、くつつくなって」

紅貴思わず啞然とする。そんな紅貴に珠花が笑いかけると、はつきりとした明るい声で言った。

「本当は剣をまともに扱えない奴にうる刀はうちの店には無いんだけどね、あんたは特別だよ。鳳華の頼みでもあるしね」

「ありがとうございます」

「そうだ、大事なことを言い忘れていたわ。お代はリュウセイに請求してね」

「リュウセイって……鳳華は相変わらずなんだね」

「さつき下ろしたお金で払うんじゃないのか？俺、あとで桃華にお金を返すつもりでいたんだけど」

「私が？まさか。あのお金は、あとで、靖郭名物フカヒレ饅頭を買うために下ろしたんだよ。わざわざ刀を買うために下したりしないわ」

「でもリュウセイっていう人が可哀そうじゃ……」

「大丈夫よ。リュウセイだし。ね、珠花」

「……ま、リュウセイ様も可哀想だし、今回は特別にただで譲ってあげるよ。ちょうど紅貴にぴったりの刀もあるしね」

「俺にぴったりの刀？」

「ちよつと待ってて。刀持ってくるから」

桃華は紅貴の方を向き、にっこり笑った。

「良かったね。このお店、本当に初心者には売ってくれないお店なんだよ」

「うん。でも、そんなお店なのに本当にタダで刀貰っちゃって良いのかな？」

「珠花が良いって言うんだから良いんだよ。『紅貴』だしね」

「俺??？」

桃華は嬉しそうに頷く。

「うん、紅貴だから」

「??？」

「おまたせ」

珠花は黒い鞘に入った刀を紅貴に渡した。黒に赤い龍の装飾。彫刻の一本一本がつぶれておらず、優美な曲線を描かれている。紅貴は刀の美しさに、思わずため息をついた。

「わあ〜すごく綺麗だね」

「これは、先代が残した刀の一つ、『国土無双』っていう刀さ」

「紅貴よかったね」

「俺……何とお礼言ったら良いか」

「礼なんて良いさ。その代わり、目的を絶対果たすんだよ」

「じゃあ私達そろそろ行くね」

「あんまり無茶するんじゃないよ」

紅貴と桃華が去った後の加治屋。珠花は紅貴と桃華の後ろ姿を見ながら静かにつぶやいた。

「まさか先代の予言があたるとはね」

日が僅かに西に傾きかけた時刻、翡翠は目を覚まし、馬小屋に向かった。そこで翡翠は白琳に会う。

「翡翠様おはようございます。よく眠れました？」

「こんなところで何してるんだ？」

「翡翠様と同じですよ。馬に餌をやりにきました」

「俺はこいつらに餌をやるなんて不本意なんだがな。特に天テンは好き嫌が多いから面倒だ」

「でも、そこが可愛いじゃないですか」

「……そうか？」

「甘い物を見つけた時の天テンなんて、とっても可愛いですし」
翡翠はこれには何も答えなかった。

「……日が西に傾きかけてるな。今からこの街を発つても次の街の閉門の時刻には間に合わなそうだな」

翡翠はそう言つて腕を組んだまま溜息をつく。

「あら、私は、桃華様が買ひ物のために、今日一日だけ靖郭に居られるように、翡翠様にお願ひしたつて聞きましたけど」

「それを桃華から？」

「はい」

「……あいつそんなこと言つたのか」

「実際、桃華様は紅貴様と一緒に買ひ物に行きましたよ。瑠璃も、その後で、せつかくだからつて言つて買ひ物に出かけました」

それを聞き、翡翠がため息をついた直後だつた。翡翠は上空の羽音を聞いた。上を見ると、知らせ鳥がいた。紫の部分が濃いあの知らせ鳥は王の鳥だ。知らせ鳥は、翡翠と白琳の真上で二三回旋回すると、巻物を落とした。翡翠は巻物を受け取り、開く。目を通した翡翠はため息をつく。

「面倒なことになつたな。……桃華の力は最近は少し弱まつてるから俺が行くしかないか」

「桃華様の力が弱まつてるつて？」

「いや、こつちの話だから気にするな」

「翡翠、白琳、この刀見てくれ」

突然だつた。桜亭に紅貴が帰つてきたのだ。

「綺麗な刀ですね。それ、どうしたんですか？」

「桃華と一緒に رفتつた鍛冶屋でタダでもらつたんだ」

紅貴は本当に嬉しそうに言つ。そんな紅貴を見た翡翠は、呟くように言つた。

「お前、桃華に少し似てきたな」

「そうだ。丁度よかつたですわ。紅貴さん、これ、お願いします」

白琳は綺麗な笑顔を紅貴に向け、馬の餌を手渡した。

「これつて」

「馬に餌をやりに来たんですけど、気が変わりましたわ。紅貴さん、

それから翡翠様、お願いしますね」

そう言って去っていく白琳を見た翡翠は再び溜息をついた。

紅貴は馬一頭一頭の前に餌を置いて行く。元々動物が好きな紅貴にはそれほど苦になる作業ではない。嬉しそうに餌を食べる馬の様子は、見ていて嬉しくなるぐらいだった。

「天テンは餌に砂糖を混ぜないと食べないから、砂糖を入れてやれ」
翡翠が投げた砂糖の袋を受け取り、さっそく天テンの餌に混ぜてみる。すると、先ほどまであまり餌を食べていなかった天テンの食が進んでいた。そして、紅貴の顔をなめ始めた。

「天テン、くすぐったいよ」

そう言いながらも、そんな天テンが可愛いと紅貴は思った。

「お前一人で大丈夫そうだな。俺は先に部屋に戻ってるからあとは頼む」

「あ、ちよつと待って！翡翠に聞きたいことがあるんだ」

紅貴は馬小屋の柵に腰かけている翡翠の前に行く。

「その……昨日のあれはいつたい何だったんだ？」

「何の話だ？」

首をかしげる翡翠は知らない振りをしている様子ではなかった。本当に分からないようだ。

「えっと、昨日の夜部屋に戻ったら寝てる翡翠の横に白琳が居て、不思議なことをやっただ。白琳が手を当てると、翡翠の身体から紫色の光みたいのが出てきて……。正直言って、不気味だった……」

でも、どうして気になったから白琳に聞きに行ったんだけど、白琳は言えないらしくて翡翠に聞いてって言ってたんだ」

「……ああ、そういうことか。悪いが俺にも言えないな」

「どうして？」

「どうしてって言われてもなあ。唯一話せるとすれば桃華だろうが……」

「桃華？」

「ああ。だから話は桃華に聞けつて言いたいたいところだが、多分桃華話さなと思うぞ。このことはとりあえずは忘れるんだな」

「うん……」

「そういや、あの刀見せてくれるか」

紅貴は翡翠に刀を渡した。翡翠は刀を少し抜き、刃をじつと見つめた。鞘に刀を納め、紅貴に刀を手渡した翡翠は言う。

「良い刀だな」

「ありがとう」

「お前にはもつたいない刀だな」

「国土無双っていう刀なんだって」

「国土無双……。それもお前にはもつたいないな」

「国土無双ってどういう意味なんだ？」

「古くからある童話で『幻相記』史記』っていうのがあるんだが、そこに、劉邦っていう登場人物がでてくるんだ。その劉邦に仕えた韓信の才能を、「国に二人とれない、得難い人材」と讃えたのが由来だな。つまり国土無双は国中で比べる者がいないほど、優秀な人物って意味だ。お前にはもつたいないだろう？」

「そんなすごい意味なんだ。ところで、翡翠は頑信って知ってる？」

「あの伝説の鍛冶師の流れをくむやつか。確か今ある各国の王家の剣や刀を打つのを任される程の腕だと聞いているが。じゃ、俺は部屋に戻るから餌やりは任せた」

馬小屋に一人残された紅貴は天テンを撫でながらつぶやく。

「やつぱり昨日のことは聞いちゃいけないかったんだ……」

天テンはそんな紅貴を励ますように顔を舐めるのだった。

「ただいま」

食堂で翡翠と白琳と共にお茶を飲んでいると、刀を買った後で紅貴と別れた桃華が戻ってきた。

「これ見て」

桃華はそう言って、紙に入った何かを見せた。満面の笑みで見せ

る桃華は本当に嬉しそうだ。

「靖郭名物フカヒレ饅買ってきたよ」

「靖郭名物フカヒレ饅といえは、翡翠様の大好物ですね」

「ちよつと桃華そんなところで立ってたら邪魔よ」

桃華がフカヒレ饅を自慢している時だった。食堂の戸が開き、瑠璃が現れた。

「あ、瑠璃お帰り」

桃華がそう言うと、瑠璃の後ろから子供が出てきた。

「瑠璃、その餓鬼は何だ」

「この子、清風って言うんだけど、みんなに話を聞いてほしいの。とくに馬鹿兄にね」

「湖北村が危ないんだ！」

清風と呼ばれた少年は突然、そう言った。

第二章 旅の始まり 8

桃華と紅貴はどこかへ出かけてしまった。白琳は薬の調合をするらしい。馬鹿兄翡翠は当分起きないだろう。せつかくの休日なのだ。一人で宿でのんびりしているのももつたいたいと瑠璃は思う。靖郭に来るのも久しぶりだったので、瑠璃は街に買い物に行くことにした。街を歩けば、いたるところから客を呼び込む声が聞こえる。李京でもそれは同じだが、李京と違うのは、露店の数が多いところだ。売り子と客の直接のやり取りが李京以上に多く、腕が鳴る。瑠璃は、値下げ交渉に自信があったのだ。ちらりと前方を見れば、色とりどりの髪飾りが飾ってある露店があった。

（桃華に買っていったら喜ぶかな）

なんとなく、楽しい気分になり、店の前に行こうとしたその時だった。後ろから少年が走ってきた。そして、偶然にも瑠璃の目の前で少年がこけた。瑠璃は手を差し出そうとしたが、少年はそれに気付かない様子で走り去ってしまった。

「大丈夫かしら」

そう、呟いて下を見ると、黒い布の固まりが落ちていた。それを拾うとチャラチャラと音が鳴った。金属同士がぶつかり合う軽い音はおそらくお金だろう。

「あの子のかしら」

瑠璃は財布を届けるために、少年が向かった方に向って歩き始めた。ちらちらと辺りを見回すが、少年は見当たらない。走っていたからだいぶ先に行ってしまったのかもしれない。いつの間にか瑠璃は露店が並ぶ小路を抜けていた。

（まったく、あの子どこにいったのかしら）

仕方ない、とため息をついた瑠璃は、財布を役人にあずけようと決めた。

「二將軍の力が必要なんだ！知らせ鳥で二將軍を呼んでくれよ！」

子供の声だ。声がした方を見ると、数人の人だかりが出来ていた。

(そういえば二將軍って……?)

瑠璃は、人だかりができている場所へいった。人だかりの中心にいる人物を見た瑠璃はあ、と声を上げる。偶然にも先ほど財布を落とした少年だったのだ。

「清風君といったかね。二將軍はそんな簡単に呼べる御方じゃないんだよ。二將軍は呼べないけど、代わりにこの街の兵が行くのじゃだめかな？」

「駄目だって言ってるだろう！普通の兵じゃやられちゃうんだ！村にいた兵もみんなやられちゃったし……」

少年は震える拳を握っていた。清風と呼ばれた少年は本当に悔しそうだった。

「しかし、二將軍は、ただ会うことも難しい御方なんだよ。その二將軍の力を借りたいというのは難しいことなんだ。だから、私たちが……」

「相手は妖獣なんだぞ！普通の兵じゃやられちゃう！妖獣を相手にできるのは、この辺りだと二將軍だけだって、亮先生が言ってたんだ！」

妖獣という単語に辺りがざわつく。

「妖獣なんて伝説の生き物じゃろう。どうせ凶暴な獣と間違えたとかそんなだろうに。そんなことで二將軍様を呼べとは何事じゃ」

隣にいた老人が小声でつぶやく声が聞こえた。老人が言うことはもつともだ。妖獣とは、龍や朱雀などの特別な力をもった生き物のことをいう。洗嘉十二小国戦国期には妖獣を使う妖獣使いがいたというが、伝説でしかない。そもそも妖獣が本当に居たかも怪しいというのが、一般的な認識なのだ。しかし、清風の目は真剣そのものだった。だが、それに対し、周りの大人は、子供の言うことだと、信じていない様子だ。大人たちの考えももつともだが、信じてもらえない清風がだんだんかわいそうになった瑠璃は輪の中心に飛び込んだ。

「清風君？さつきお財布落としたわよ」

瑠璃はできるだけ自然に笑って清風に財布を渡した。

「ところでさつき二將軍がどうとかって言ってたけど、どうして二將軍なんか呼びたいの？」

「湖北村に妖獣が出たんだ。村中を暴れまわって、けが人がたくさん出て、村人を守ろうとした兵もやられちゃって、けが人を助けようとしたお医者さんもやられちゃった……。変な話なんだけど、怪我はしてないのに、急に倒れる村人もいて……。俺たちはその人たちも連れて山のふもとに避難したんだ」

「事情はわかったわ。その妖獣を倒すために二將軍の力が必要なのね」

「亮先生が、妖獣を倒すことができるのは二將軍だけだって言ってたんだ。だからそこにいる兵士に二將軍を呼んでもらおうとしたんだけど、よんでくれなくて……」

「そうだったの。私の知り合いに無駄につよい軍人がいるの。多分、あれなら妖獣を倒せると思うわ。その人、今この街に来てるから、その人に倒してもらおうのじゃダメかしら」

「本当に!？」

「お嬢さん、しかし……。私が清風君に同伴します。北湖村でなにが起こっているかわからない以上、一般の方が行かれるのは危険かと」

兵士が瑠璃に話しかけてきた。

「大丈夫だと思います。私の知り合いは、本当に強いですから。ところで清風君、そんなに大変なことが起こっているなら、李京には知らせたの？」

「亮先生が知らせ鳥で李京に知らしてた。でも、俺、じっとしてられなくて……」

知らせ鳥を扱えるということは、その亮という人物はそれなりにすごい人物なのだろう。湖北村で何かが起こっているとして、最善の策は李京に知らせることだ。あとは待つしかないのだが、待つこ

としかできずに、いてもたってもいられなくなる清風の気持ち、瑠璃にはなんとなくわかる気がした。

「清風君、もう大丈夫よ。とりあえず私たちが泊まっている宿に行きましょう」

「じゃあその妖獣さんを倒せば良いの？」

瑠璃の話を聞いていた桃華は嬉しそうに言った。

「そう。桃華ならできるんじゃないかと思って」

「うん、多分大丈夫だよ」

「なあ瑠璃、強い人ってこの女の人の？」

紅貴が桃華と初めて出会った時と同じことを思ったのだろう。清風は瑠璃に尋ねた。

「そうよ。あと、そこにいる茶髪のやついるでしょう？翡翠っていうんだけど、あの馬鹿兄も真面目になれば使えると思うわ。ちなみに赤い髪が紅貴。となりにいるのは白琳よ」

紅貴は瑠璃の話を聞いていて疑問に思ったことがある。それを聞いて良いか少し迷ったが、やはり確認する必要がある。

「清風、湖北村で見たのは本当に妖獣なのか？」

紅貴がそう言うと、清風が睨みつけてきた。

「俺が子供だから信じてないのか!？」

「違うよ!清風が子供だとかそんなことじゃなくて、清風は『史書』創世の巻きは知ってるか？」

「ああそつちのことか。知ってるぞ。ええと……人々は、この世界の秩序を作り出した……で、なんだっけ」

「……人々は、この世界の秩序を作り出した。秩序の世界と混沌の世界の線引きをしたのは妖術使いだ。神龍の体より生まれし世界に人間の秩序の世界と、混沌の世界の境界を作った、だな。つまり、門の内が秩序の世界で、外は違う。門と郭壁が、かつて妖術使いがひいた境目の名残だと考えると、門の内……湖北村で勝手に妖獣が現れるはずはないって言いたいんだらう?もし、本当に湖北

村で妖獣が暴れまわってるって言うなら、今はいないはずの妖獣使いが関わってるってことになる」

紅貴が言いたかったことを翡翠がまとめた。今では妖獣そのものの存在が疑われているが、かつては確かに存在していた。しかし妖獣が存在する場所は、門の外、つまり街の外のだった。そんな妖獣を門の内側で使うことができる一族がかつては存在しており、妖獣使いと呼ばれていた。だが、妖獣使いは今では存在しないことになっている。

「でも、本当に妖獣なんだ。亮先生も、妖獣だって断言していたんだから間違いないさ」

「それは大変ですね。……ところで話は変わりますが清風君お疲れなんじゃありませんか？」

「うん、寝ずにこの街に来たんだ。俺、少し疲れちゃった……」

白琳はいつも通りやわらかく笑って清風に言う。
「妖獣は私たちでなんとかしますから安心してください。今はお休みなってください。翡翠様、清風君を部屋に案内してください」

翡翠はため息をつく、紅貴と翡翠が泊まっている部屋へ清風を案内した。

「紅貴って意外と妖獣に詳しいのね。なんか意外だわ」
瑠璃にそう言われ、紅貴は曖昧に笑うことしかできない。

「なあ瑠璃、湖北村に本当に妖獣が出たのかな」
「正直、妖獣が本当にいるなんて私には信じられないわ。でも、清風が嘘ついているようには思えないし……」

紅貴はどうなの？
「俺はあり得ないことではないと思う。あ、翡翠が戻ってきたな」

「清風君はどうですか？」
白琳が翡翠に尋ねると、翡翠は淡々と答えた。

「よっぽど疲れてたのかすぐ寝始めた。紅貴は今晚は床で寝るんだな」

「寝たつておれの寝台でか？」
「当たり前だろう。俺の寝床を誰に譲るか」

翡翠と知り合ってわずか数日だったがなんとなく翡翠の性格をわかっていた紅貴は反論するのも面倒になり、代わりに話を変えた。

「翡翠は湖北村のことどう思うんだ？」

「どうも何もさっき、王からの命令が書かれた巻物が届いてな、そこに湖北村のことが書かれてたんだ。妖獣が出たからなんとかしろださ」

「じゃあ、どう思うも何もないな」

紅貴がそう言うのと翡翠は腕をくんだまま、また溜息をついた。

「妖獣とかなら、私の方が得意だから、私、一人で湖北村に行くね。みんなは先に慶に行つて待つて。慶で待ち合わせしよう」

「……桃華、今のお前より俺が行つた方が早いと思うぞ」

「なんで？」

桃華は首をかしげて不思議そうに翡翠を見ていた。

「…… 自覚ないのか。まあいい。とにかく、妖獣には俺が行く。

あの偽役人に、俺たちの消息を絶つたために念のために嘘をついたんだが、その嘘が目的地を湖北村だと偽る嘘なんだ。目的地と真逆の場所を言う嘘だとばれた時に怪しまれる可能性があるから、それなりに外れた場所にあつていく予定がなかった湖北村は丁度よかったんだが……役人は捕まつたから大丈夫だとは思つが、追手がもしいたとして、行く可能性があるとすれば湖北村の可能性は高い」

「馬鹿兄でも頭使つてるのね」

瑠璃を無視して言葉を続けている。

「それから、悪いが白琳にも一緒に来てもらつ。もし、本当に妖獣がでたとして……あとは分るだろう？」

「ええ」

「つていうか、みんなで湖北村に行けば良いんじゃない？私が行つても足手まといかもしれないけど白琳が妖獣にやられた人の手当をするのを手伝つことぐらいはできるだろうし。あ、もちろん紅貴がそれで良かったらんだけど……」

瑠璃が紅貴の方を見た。紅貴は湖北村に行くことに迷いはなかった。

もちろん、洗にはできるだけ急いで戻る必要がある。だが、湖北村をほっとけるはずがなかった。妖獣がでていうならなおさらだ。なぜなら……

瑠璃、翡翠、白琳、桃華。みんな紅貴の方を見ていた。紅貴の答えを待っているようだ。

「うん、みんなで湖北村に行こう。湖北村に妖獣が出たならなおさら俺が行かなきゃダメだと思っただ。みんなにはまだ言っただけど、おれ、実は、その……まだ半人前だけど……妖獣使いなんだ」

桃華は目を見開いていた。瑠璃と白琳は、え、と声をあげ、普段は無表情の翡翠ですら驚いたようで、眉をぴくりと動かしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2812ba/>

史書

2012年1月8日00時51分発行